

飛鳥・藤原宮発掘調査概報 20



1990年5月

奈良国立文化財研究所

「飛鳥・藤原宮発掘調査概報20」正誤表

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
2	8	木殿	城殿	56	5	堤防	堤防
2	10	1,000 m ²	5,000 m ²	58	23	浄御原推定地	浄御原宮推定地
3	2	90.3.20～	90.3.20～90.4.2	59	3	2月	8月
3	3	90.3.22～	90.3.22～90.4.2	63	12	県教委	県教委
3	9	喜田正己	喜多正己	63	18	床下	床上
3	10	豊田善司	大字共有地	67	14	西を	南を
14	4	7世紀後半	7世紀中頃	67	20	1連	1連
14	16	12.6 m	12.5 m				
16	16	桁行1間	梁行1間			(表右)	
27	22	Ⅱ区全域	Ⅲ区全域	73	10	四重孤紋	四重孤紋
27	23	S X 2445	S D 2445	78	24	東の櫓	西の櫓
30	25	東北坪	西北坪	80	1	0.32 cm	0.32 m
32	4	藤原宮	藤原京	81	15	5 m	5 cm
32	23	S X 04	S K 04	82	28	曲物底板	曲物側板
33	4	藤原宮	藤原京	85	2	S D 635	S K 635
34	4	左京	右京	90	20	調査区に	調査区は
44	15	S K 6479	S K 6489	92	10	両側に	両岸に
46	24	北で東に傾き	西で北に振れ	92	10	上がるが	上げるが
46	25	北で西に	西で南に	96	17	「続日本記」	「続日本記」



目 次

1989年発掘調査地一覧表	2
I 藤原宮の調査	4
1 内裏地域の調査 第58次	5
2 西方官衙地域の調査	15
A 第60-10次	16
B 第58-18次	17
C 第60-13次	18
D 第58-19次	19
II 藤原京の調査	20
1 一条大路の調査 第60-6次	21
2 左京九条四坊の調査 第58-20次	23
3 右京一条一坊の調査 第60次	29
4 右京二条一・二・三坊の調査	31
A 第60-11次	32
B 第60-5次	33
C 第60-1次	34
D 第60-2次	34
E 第58-16次	35
F 第60-12次	36
5 右京七条一・二坊の調査	39
A 第58-17次	40
B 第62次	41
C 第58-22次	47
D 第60-14次	48
E 第60-7次	49
6 右京十条四坊の調査 第60-3次	50
7 西二坊人路の調査 第60-8次	56
8 本業師寺の調査 1989-1次	59
9 その他の調査 A 第60-4次	60
B 第60-9次	60
C 第58-21次	61
III 飛鳥地域の調査	62
1 飛鳥寺の調査 1989-1・2・3次	63
2 奥山・久米寺の調査 1989-1次	67
3 山田寺第7次調査	76
4 川原寺の調査 1988-2次	87
5 山田道第1次調査	90

1989年発掘調査地一覧表

※ 本書に未収録

遺跡・調査次数	調査地区	面積	調査期間	調査地	所有者等	備考
藤原宮 58-16	6AJQ-E	132㎡	89. 1. 7 ~89. 1. 31	橿原市醍醐町146-10	大西君子	住宅新築
58-17	6AJH-U	32㎡	89. 2. 6 ~89. 2. 14	橿原市上飛騨町	橿原市	墓地拡張
58-18	6AJF -R・S・T	32㎡	89. 1. 31 ~89. 2. 20	橿原市高殿町・醍醐町	橿原市	下水道敷設
58-19	6AJH-Q	69㎡	89. 2. 27 ~89. 3. 3	橿原市四分町	橿原市	下水道敷設
58-20	6AMF B	900㎡	89. 3. 2 ~89. 4. 6	橿原市南山町	橿原市	道路建設
58-21	6AWJ-Q	25㎡	89. 3. 13 ~89. 3. 15	橿原市本殿町下八反田3	森田政雄	駐車場造成
58-22	6AJH-S	82㎡	89. 3. 24 ~89. 3. 27	橿原市上飛騨町63-5	橿原市	下水道敷設
58	6AJF-D-E	1,000㎡	87. 12. 18 ~89. 5. 22	橿原市高殿町録町356他	国	計画調査
60	6AJ P-P	1,086㎡	89. 5. 5 ~89. 7. 19	橿原市醍醐町333-1	岩城新久	店舗新築
62	6AJH-R・S	2,500㎡	89. 7. 3 ~89. 10. 11	橿原市高殿町7	橿原市	宅地造成
60 1	6AJ P-T	24㎡	89. 4. 3 ~89. 4. 5	橿原市醍醐町219-3	小田浩幹	住宅新築
60-2	6AJ J-B	29㎡	89. 4. 10 ~89. 4. 12	橿原市醍醐町115-3	国澤英明	住宅新築
60-3	6AMR-R	529㎡	89. 5. 8 ~89. 6. 27	橿原市栄和町	関西電力	変電所新設
60-4	6AJC-E	38㎡	89. 5. 10	橿原市下八釣町	橿原市	道路新設
60-5	6AJ P-T	36㎡	89. 5. 16 ~89. 5. 20	橿原市醍醐町219	多田勝男	住宅新築
60-6	6AJN-K	220㎡	89. 5. 23 ~89. 6. 16	橿原市勝夫町中ノ町662-9	藤田忠三	住宅新築
60-7	6AJM-E・F	96㎡	89. 6. 7 ~89. 6. 20	橿原市飛騨町61-1他	橿原市	道路整備
60-8	6AJM-C	714㎡	89. 7. 1 ~89. 8. 11	橿原市四分町253-1	木下無次郎	住宅新築
60-9	6AWG-H	80㎡	89. 8. 7 ~89. 8. 11	橿原市木之本町29-1	中島貞義	住宅新築
60-10	6AJL F	600㎡	89. 8. 28 ~89. 9. 30	橿原市四分町298他	橿原市	団地建替
60-11	6AJ P-U	130㎡	89. 10. 12 ~89. 10. 13	橿原市醍醐町186-2	森川喜八郎	住宅新築
60-12	6AJ J-A	60㎡	89. 10. 5 ~89. 10. 12	橿原市醍醐町120-6他	堀内太郎	住宅新築
60-13	6AJL-C	100㎡	89. 10. 16 ~89. 10. 23	橿原市鶴手町397-3	竹林忠太郎	住宅新築
60-14	6AJM-E	140㎡	89. 12. 11 ~90. 1. 10	橿原市飛騨町61-1他	橿原市	宅地造成
※ 60-15	6AJL-F	190㎡	90. 1. 16 ~90. 1. 31	橿原市四分町298他	橿原市	団地建替
※ 60-16	6AJM-A	70㎡	90. 1. 12 ~90. 1. 18	橿原市四分町278-6他	橿原市	下水道敷設
※ 60-17	6AMA-P	807㎡	90. 1. 18 ~90. 3. 26	橿原市南山町490他	橿原市	道路建設
※ 60-18	6AJ J-A	8㎡	90. 2. 6	橿原市醍醐町117-6	河原田久	住宅改築

遺跡・調査次数	調査地区	面積	調査期間	調査地	所有者等	備考
60-19 奈	6AJQ-E	90㎡	90. 3. 20 ~	横浜市醍醐町 151-1	大西君子	住宅新築
60-20 奈	6AJH-P+Q	230㎡	90. 3. 22 ~	横浜市飛騨町	横浜市	下水道敷設
山田道 第1次	6AMC-N+U	1,260㎡	88. 12. 12 ~89. 4. 6	高市郡明日香村奥山	奈良県	道路拡幅
山田道 第2次	6AMC-U 6AMF-F	940㎡	90. 1. 6 ~90. 4. 7	高市郡明日香村奥山	奈良県	道路拡幅
川原寺 1988-2次	6BKH-E	25㎡	89. 1. 10 ~89. 1. 17	高市郡明日香村川原	大字川原 管理組合	道路改修
飛鳥寺 1989-1次	5BAS-A	3.9㎡	89. 7. 5	高市郡明日香村飛鳥 656	西井保司	住宅改築
飛鳥寺 1989-2次	5BAS-B	100㎡	89. 10. 24 ~89. 11. 10	高市郡明日香村飛鳥 132	豊田正明	住宅改築
飛鳥寺 1989-3次	5BAS-A	15㎡	89. 11. 13 ~89. 11. 16	高市郡明日香村飛鳥 653・654	豊田正己	住宅改築
飛鳥寺 1989-4次	5BAS-B	1.5㎡	90. 2. 5	高市郡明日香村飛鳥	豊田善司	道路改修
飛鳥寺 奈 1989-5次	5BAS-E	12㎡	90. 2. 26 ~90. 2. 27	高市郡明日香村飛鳥 623	島田康知	住宅改築
木栗岡寺 1989-1次	6BMY-C	17㎡	89. 8. 21 ~89. 8. 23	横浜市城嶺町 278-2	前田一治	平庫新築
奥山久米寺 1989-1次	5BOQ I	170㎡	89. 8. 29 ~89. 10. 16	高市郡明日香村奥山 650・651	大字共有地	庫裡改築
山田寺 第7次	5BYD-N	1,150㎡	89. 10. 12 ~90. 2. 22	横浜市山田	国有地	学術調査

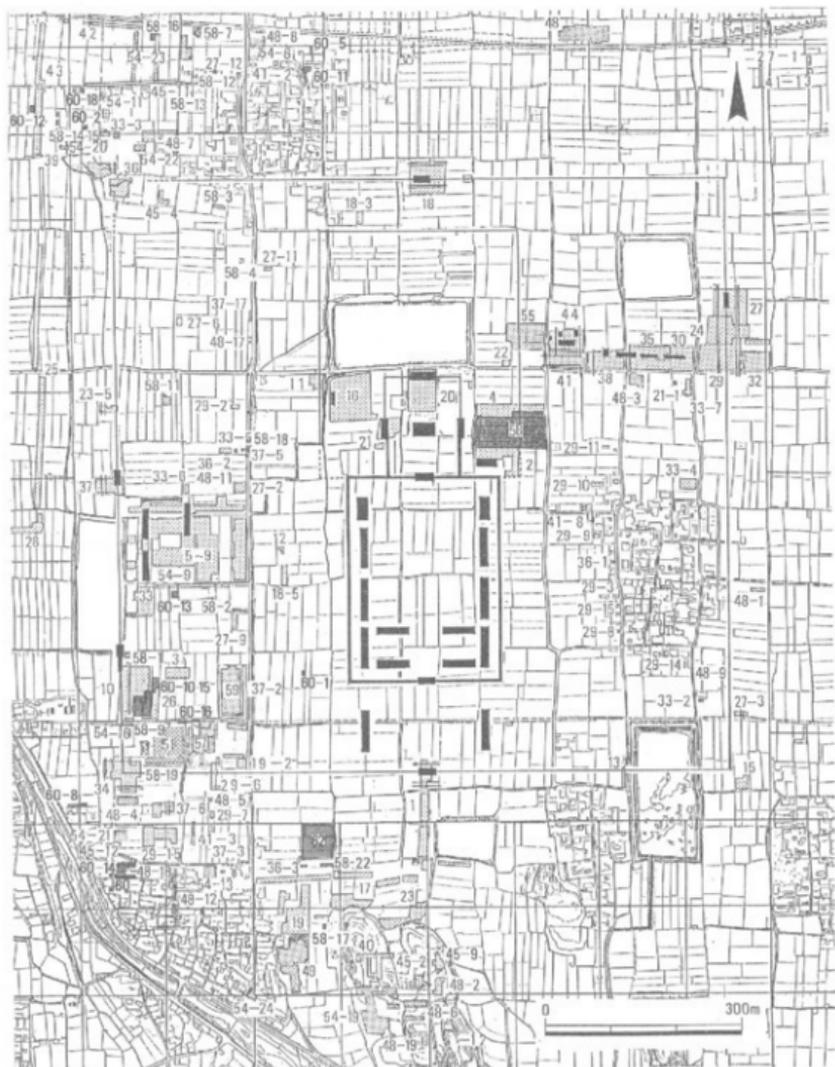
凡 例

1. 本書は、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部が、1989年4月から同年12月までに行った藤原宮跡・藤原京跡および飛鳥地域の発掘調査の概要報告である。1988年度の調査で未報告分については本書に収録した。各調査報告の執筆は、原則として各現場の発掘担当者が行った。
2. 発掘調査地一覧表には、1989年度の調査地をすべて示すとともに、本書に収録した1988年度の調査地を再録した。なお、寺院跡の調査については、各寺院で年度毎の通し番号を次数としてつけることとする。またその中で主な調査については、別の調査次数を合わせて与える。例：和州庵寺3次(和州庵寺1986-1次)
3. 発掘遺構図に用いた座標値は、平面直角座標系第VI座標系による座標値であり、遺構図では「-」符号を省略している。高さはすべて海拔高を示す。
4. 本文中では『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』を『報告』、『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』を『概報』と省略した。
5. 遺構図には、個々に遺跡あるいは大地区割りごとの一連番号を付け、番号の前に、SA(築地・溝)、SB(建物)、SC(回廊)、SD(溝・濠)、SE(井戸)、SF(道路)、SK(土坑)、SS(足場)、SX(その他)、などの分類記号を付けた。遺構番号には仮番号で示したものがある。
6. 7世紀の上層の時期区分は飛鳥I~Vと表す。詳しくは『報告』p.92~100を参照されたい。
7. 第60-3次調査では、天理参考館の金原正明氏に弥生時代の水田の花粉分析を依頼した。その成果について金原氏に報告していただいた。

表紙カット：藤原宮第58次調査出土人面蓋器木製品

裏表紙カット：山田寺第7次調査出土鳥書土器

I 藤原宮の調査



藤原宮周辺調査位置図（数字は次敷）

1 内裏地域の調査 (第58次)

(1987年12月～1989年5月)

この調査は藤原宮内裏東外郭地区と東方官衙地区とを明らかにする目的で行ったものである。内裏東外郭地区については、1970年の第2次調査で、大極殿院の東側、朝堂院のすぐ北側に礎石建ち建物と礎敷遺構を確認し、1971～72年の第4次調査では、第2次調査区の北方で、内裏と東方官衙地区とを隔てる一本柱塀と大溝とを検出した。今回の調査は、1978年以来続けてきた東方官衙地区の調査が、第55次調査によって内裏東外郭地区に到達した成果を受けて、新たな視点で内裏地区の解明を進めるべく計画した調査の手始めとして、第2・4両次調査区の間(東西110m・南北52～55m)に及ぶ調査区を設けて実施した。

遺 構

検出した遺構は、掘立柱塀・掘立柱建物・溝・道路・土坑などであり、これらの遺構は、古墳時代・7世紀中頃・藤原宮直前・藤原宮期・藤原宮廃絶以後の5時期に大別される。以下、時期別に遺構群の概要を記した後に、個々の遺構の規模等について詳しく述べる事とする。

古墳時代の遺構 調査区西半で古墳時代初頭の斜行溝SD912・914を確認し、調査区東半で鋸状に折れ曲がる溝SD6637や土坑SK6652を検出した。

SD912・914は調査区を西南から東北に向かって平行して貫流する2本の溝で、第2・4次調査ですでに検出している。古墳時代初頭の土器が出土した。SD6637は素掘り溝で、幅0.8m・深さ0.2mである。SK6652は浅い皿状の土坑で、東西1.4m・南北2.5mあり、堆積土から土師器片が出土した。

7世紀中頃の遺構 調査区西南部に総柱建物を含むまとまった建物群がある。遺構の方位は北で東にやや振れる。遺構群東端に南北棟建物SB6730があり、西と南を塀SA6735・6734で囲む。その西に、SB6730と北妻柱筋と建物方位を揃えて南北棟建物SB6755を配し、南北塀SA6759をはきんで、西端に東妻柱筋をほぼ揃えた同規模の倉庫とみられる2棟の総柱建物SB6770・6775を置く。

以下、個々の遺構を詳説する。

SB6730は桁行4間・梁行2間の掘立柱南北棟建物で、方眼北に対して東へ5度振れる。柱間は桁行2.5m・梁行2.6m。SB6755は桁行5間の掘立柱南北棟建物で、梁行は北妻側が2間、南妻側が3間割になる。柱間は桁行2.0m・北梁行2.0m・南梁行1.6m。SB6770は南北3間・東西2間以上の掘立柱建物で、柱間は1.6m等間。SB6775は南北3間・東西3間以上の掘立柱建物で、総柱建物と考えるが、西端は1ヶ所でしか柱を検出しておらず東庇付き東西棟の可能性もある。柱間は東西2.1m・南北1.6m。SA6734は掘立柱東西塀で、7間分(総長13.4m)を確認し、柱間は1.5~2.4mと不揃いである。調査区外へ続く可能性もある。SA6735は掘立柱南北塀で、5間分を検出し、SA6734とT字形に交わる。柱間は2.5m等間。SA6759は掘立柱南北塀で、3間分(総長5.8m)を確認した。

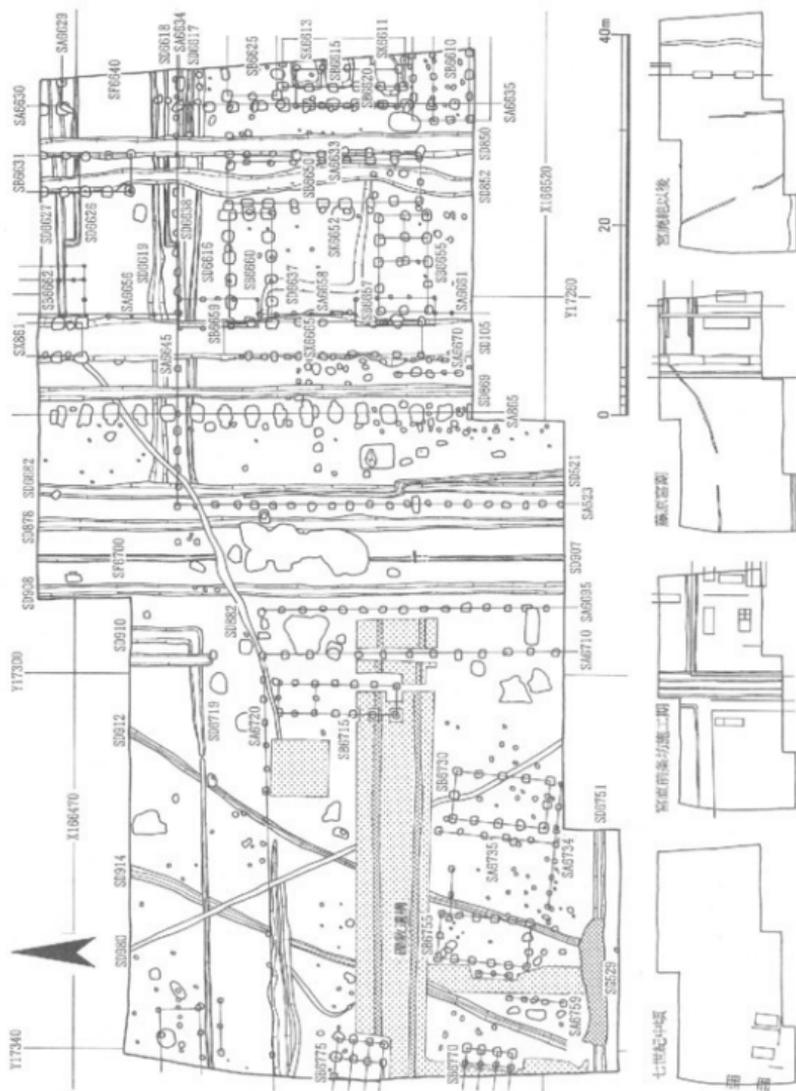
藤原宮直前(先行条坊施工期)の遺構 調査区の中央を藤原宮の先行条坊である東一坊坊間路SF6700が南北に走り、その東西は街区として塀や溝で区画される。街区内に整然とした配置の建物を確認した事が大きな成果である。

東一坊坊間路SF6700は、南北溝SD878・908を東西の側溝とする道路で、中央に計画線と考えられる細い南北溝SD907がある。

道路の西の街区は、西側溝SD908の西2mを併走する南北塀SA6695と、その西4.8mの塀SA6710およびSA6695の北端の位置で西折した東西塀SA6720で区画される。区画の東北隅に南北棟建物SB6715が建つ。SA6720の北6.9mの東西溝SD6719は、東で北折して南北溝SD910となる。出土土器は7世紀中頃のもの为主体を占めるが、東西塀に平行し、SD910がSA6710とSA6695の中間にあるなど強い関連を示すので、北西部を区画する施設と考える。

道路東の街区は、東側溝SD878の東2mに南北塀SA523が走り、24間分で東折して東西塀SA6645となる。SA523の東1.5mにはSD878とともに塀をはさんで併走する南北溝SD6682があり、溝はSA6645を越えて北に延びる。SA6645の南と北にもそれぞれ東西溝SD6616・6619があり、ともにSD6682に流れ込んでおり、掘立柱塀の区画の内外に溝を持っていることが判る。

東南の街区には、調査区の東南隅に南北に庇を持つ東西棟建物SB6610があり、その北に南北棟SB6620、さらにその北に東西棟SB6625を配置する。こ



第58次調査遺構配置図 (1:600)

これらの3棟の建物の西には、互いに建物中軸を揃えた2棟の東西棟建物SB6660・6655が配置される。東と西の建物群のほぼ中間には南北塀SA6633を置き、SB6660の北端からSB6655の南端までを塞ぐものの、SB6660とSB6625は、共に方1mの大型掘形を持ち北側柱を揃えるなど深い関連を持つ。この時期の遺構は、SB6620の西側柱や東西塀SA6645の位置が、後続する藤原宮期の官衙区画施設的位置と揃い、柱位置を避ける配慮がみられるなど、両期の遺構が時間的に近接した関係にあることを伺わせる。東北の街区には東南区の南北塀SA6633と東側柱を揃えた位置に南北棟建物SB6631がある。

以下、個々の遺構を詳説する。

SF6700は側溝心々7.0m・幅員5.5mの道路である。東側溝SD878は断面U字形で、幅1.2m・深さ0.6m。西側溝SD908も断面U字形で幅1.5m・深さ0.6m。SD907はSF6700の路面中軸線上にあり、幅0.6m・深さ0.3m。

SA6695は掘立柱南北塀で、調査区南端から15間分北へ伸び、そのまま途切れる。柱間は1.8~2.1mと不揃いである。SA6710は掘立柱南北塀で、調査区南端から12間分北へ伸び、西に折れてSA6720となる。屈曲位置はSA6695の北端と等しい。柱間は2.55m等間。SA6720は掘立柱東西塀で、6間分の柱穴は明確に検出できたが、それ以西は不明確となる。ただし西方に点在する柱穴をつなぐと、しだいに南へ方位を振る塀が復原できる。柱間は約2.4m。SB6715は桁行6間・梁行2間の掘立柱南北棟建物で、北2間目に間仕切り柱が建ち南妻柱は確認できなかった。柱間は梁行1.5m・桁行1.5~2.4mと不揃いで、柱穴は方0.7mと小さい。

SD6719は東西溝で、西でやや南へ振れ、方位はSA6720と等しい。幅は東端で1.6m、西端で0.6m、西方でしだいに浅くなる。SD910は断面U字形の南北溝で、幅1.5m・深さ0.45m。

SA523は掘立柱南北塀で、第2次調査区から24間分北に延び、東へ折れてSA6645となる。柱間は1.8~2.1mと不揃いで、柱穴も方0.6~0.9mとばらつきがある。柱根を残すものが多い。SD6682は南北溝で、幅1.5m・深さ0.35m。

SA6645は掘立柱東西塀で、調査区の東外方にさらに延びる。途中、SD105・

850に柱穴を削平され、正確な柱間数は復原できない。柱間はSA523と同様に1.8~2.1mと不揃いである。SD6616は東西溝で、SA6645の南側約2mをやや湾曲しながら走り、幅約0.5m・深さ0.45m。SD6619は東西溝で、SA6645の北2mにあり、幅0.8m・深さ0.2m。西に行くほど広く浅く不明確になる。

SB6610は東西3間以上、南北3間以上の掘立柱東西棟建物。柱間は桁行2.4m・梁行2.1mで、柱穴は方0.8mとさほど大きくない。北庇を持ち南にも庇が付くようで、藤原宮直前の条坊施工期としては初めて確認された庇付き建物であり、遺構の性格が注目される。SB6620は桁行4間・梁行2間の掘立柱南北棟建物。柱間は桁行2.7m・梁行2.1mで、柱穴は方0.7mとSB6610より一回り小さい。西側柱列が藤原宮期の塀SA6635の位置と揃ううえ、柱間寸法が等しい西遺構の柱穴が4.5尺ずつずれて重複しないなど、時間的に近接した関係にあることが伺える。SB6625は桁行2間以上・梁行2間の掘立柱東西棟建物で調査区の東に延びる。柱間は2.6m等間で、柱穴は方1.2mと大きい。

SB6660は桁行5間・梁行2間の掘立柱東西棟建物で、柱間は2.4m等間。柱穴はSB6625と同様に方1.2mと大きい。西側柱がSD105に壊されている。SB6655は桁行4間・梁行2間の掘立柱東西棟建物で、東半が総柱になっている。柱穴は方0.8mと小振りで、柱間はやや不揃いながら平均2.5mである。SA6633は掘立柱南北塀で、SB6655・6660の東5.5mにあり、8間分(総長20.4m)を検出した。柱間は1.8~2.7mと不揃いが目立つ。SA6670はSB6655の西にある掘立柱南北塀で、4間分(総長6.6m)を確認した。柱穴径0.5m以下の小さなもので、この時期である確証はない。

SB6631は桁行4間以上・梁行1間の掘立柱南北棟建物で、妻柱は確認できなかった。柱間は桁行2.4m・梁行3.9m。

藤原宮期の遺構 調査区のほぼ中央を通る南北塀SA865とその東の南北溝SD105・869によって、内裏東外郭地区と東方官衙地区とに分けられる。

内裏東外郭塀SA865は、4次調査で既に確認しているが、今回16間分を確認した。大極殿院に直接取り付くことなく南進し、朝常院の北東隅に取り付くものと推定される。塀の東に近接して南北溝SD869がある。

内裏東大溝SD105は宮の基幹排水路でもある。SD105の兩岸傾斜面には、橋脚状遺構SX861・6665がある。SX861南端とSX6665北端との間は官衙間の東西道路にあたり、これらの遺構を橋脚とする事には疑問が残る。

SD105の東20mの南北溝SD850は東方官衙の西を限る溝であるが、その西岸に東側柱列を置いて南北棟建物SB6650が建つ。SB6650は南北両端がSX6655と揃った同じ性格の建物で、妻柱はない。

SD850の東には、2組の鍵形に折れた堀があり、それぞれ官衙の西南隅（SA6629・6630）と西北隅（SA6634・6635）を形成する。

東南部の官衙ではSA6635に近接し、柱間を揃えた南北棟建物SB6615がある。官衙区画の西北に建つ倉庫様の建物であろうか。SB6615と重複して、官衙廃絶時の塵芥処理用と思われる土坑群SK6611～6614がある。

北の官衙区画はそれぞれ1間分を検出しただけであるが、第41次調査で検出した鍵形の堀に連なり、南北72.5m・東西65.1mの大きさに官衙を区画する。

北と南の官衙間は堀間12.5mの宮内道路SF6640である。官衙の整備以前には北側溝SD6627と南側溝SD6638が官衙地区からSD850とSD105をつなぐように流れていた。両側溝は、官衙の整備に伴い道路内側にそれぞれSD6626・6618として掘り直され、SD850・105の中間で先の溝に注ぐ。SF6640（幅12.5m）は第41次調査で確認した宮内道路（幅12.7m）とほぼ同規模である。第41次調査の宮内道路は内裏内郭南端とほぼ一致し、SF6640は大極殿の真東にあたり内裏をおよそ4分した位置にあるから、内裏の東に近接する地区には、宮内道路で区切られた同一規模の官衙区画が4つ配置されていることになる。

内裏内は広い空地で、内裏内からSD105に至る斜行溝SD882と、第2次調査で庭園と考えた礫敷遺構SG529の下で検出した東西溝SD6751がある。以下、個々の遺構を詳説する。

SA865は内裏東外郭を画する掘立柱南北堀で、今回16間分を確認した。柱間2.95m（10尺）等間。柱穴は方約1.5m・深さ0.6～0.8mで、柱を東西両側から抜く特徴は、他の内裏外郭堀と同様である。SD869は索掘り南北溝で、幅1.2m・深さ0.7mと幅の割に深く、遺物から見て藤原宮期であるが、最上層は宮廃絶後

に掘られた溝であろう。

SD105は内裏東外郭を両する南北大溝で、幅4.5m・深さ0.7m。3層に分かれる堆積層の下2層が藤原宮期で、多量の土器・瓦・木製品とともに木簡が出土した。上層は幅3m・深さ0.3mの蛇行する平安時代の溝で、摩滅した多量の瓦と土器が出土した。SX861・6665はSD105の上に架けられた橋脚状の建築遺構で、SD105の開削にやや遅れて構築され、溝と共に藤原宮期を通じて存在する。柱掘形はSD105の両岸傾斜面に掘られ、埋土は溝の堆積土と同様である。SX861はすでに第4次調査で10間分を検出している。SX6665はSX861の南端から16.5m離れて構築されている。南北20.5m（8間）・東西3.5mで、両妻柱とも無い。柱間は2.1～2.6mと不揃いである。

SD850は南北溝で、幅2.4m・深さ0.7m。堆積層は3層に分かれ、上層の暗褐色砂質土は宮廃絶にともなう埋立土で、下層の灰色砂層から木簡を含む藤原宮期の遺物が出土した。SB6650は掘立柱南北棟建物で、SD850の西岸に東側柱を置き、桁行8間（総長20.5m）・梁行2間（5.5m）と考えられるが、妻柱は2ヶ所とも無い。柱掘形埋土はSD850の堆積土と同じである。

SA6629は掘立柱東西塀、SA6630は掘立柱南北塀で、ともに1間分を確認したのみで、東および北へ伸びる。柱間2.7m。SA6634は掘立柱東西塀、SA6635は掘立柱南北塀で、ともに柱間2.7m、方約1.3mの掘形を持つ。SA6635は調査区南端から12間分北へ延びて東折する。

SB6615は桁行5間・梁行2間以上の掘立柱南北棟建物で、柱間寸法・柱位置をSA6635に揃える。SK6611～6614は上坑群で、一辺3mの隅丸方形、深さ0.3mの土坑3基が並ぶ。瓦・硯・土器・木製品などが出土した。

SD6627・6638は東西溝で、心々間距離は12.8m。SD6627は幅0.9m・深さ0.3m、SD6638は幅0.6m・深さ0.3m。SD6626・6618は東西溝で、心々間距離は9.6m。SD6626は幅0.6m・深さ0.3m、SD6618は幅0.5m・深さ0.2m。

SD882は斜行溝で、幅0.6～0.9m・深さ0.3～0.5mと一定しない。SA865より古い。東半の堆積土から多くの瓦が出土した。

SD6751は東西溝で、幅1.1m・深さ0.6mのV字形断面を持つ。堆積層は2層

あり、下層から瓦や木片が出土した。

藤原宮焼絶以後の遺構 平安時代の遺構は、調査区東部を蛇行する南北溝SD 852と、小規模な南北塀でつながれた南北棟建物SB 6657・6659・6662が並ぶ。これらの建物は「宮所」の字名とともに平安時代の荘園に関わる遺構であろう。

宮直前のSD 6682と重複する溝SD 521は第2次調査の方形小池SG 520からのびる溝であるが時期が不明である。

調査区の西半には礫敷遺構SX 6725・6760が広がっている。その汀線と考えられたSG 529は藤原宮以後ではあるが、時期の断定は保留する。礫敷遺構中の東西方向にのびる帯状の高まりSX 6740は、その位置から高市郡路東条里25条2甲の29坪と30坪の境にあたる。このほか、礫敷遺構より古い斜行溝SD 980と発掘区西北隅の東西棟建物SB 6785がある。

以下、個々の遺構について詳述する。

SD 852は蛇行する南北溝。幅2.0m・深さ0.5mだが、発掘区南端では0.1mと浅い。両岸傾斜面には人頭大の玉石列があり、部分的に2段の所がある。本来、玉石で護岸した溝であろう。堆積した砂層から瓦片などが出土した。

SB 6657・6659は掘立柱南北棟建物。中央の2間分が幅狭い桁行4間・梁行2間で、両妻柱に塀が取り付く。柱間は梁行が1.6m、桁行の両端2間が2.5mで中央2間が1.6m。SB 6662は掘立柱南北棟建物。小柱穴が点在し建物の存在を示すが、構造の詳細は不明である。一応、東西3間(5.3m)・南北2間(3.8m)以上の建物が復原できるが、SD 105埋土層上にも伸びる可能性が高い。

SA 6656・6658・6661は、SB 6657・6659・6662を接続する掘立柱南北塀である。南のSA 6661(2間分)と中央のSA 6658(5間)は建物の妻柱に取り付く。SA 6656は4間分を検出した。柱間は1.8~2.5mと不揃いである。

SD 521は途中で鋸状に屈曲する南北溝で幅0.8m・深さ0.2m。

SX 6725・6760は礫敷遺構で、礫の間から10世紀代の緑釉が出土し、これを覆う土からは瓦器が出土した。調査区東半では削平されたとみられる。SX 6740は条里に伴う坪境の東西道路遺構で礫敷遺構の中の幅3m以上・高さ0.3mの高まりである。

SD980は斜行溝で幅0.6m・深さ0.35m。雑敷より古い。SB6785は掘立柱東西棟建物。梁行2間・桁行3間以上で、北で西に5度振れる。柱間は桁行2.7m・梁行2.1m。時期の決め手を欠く。

遺物

調査区全域から、多量の瓦罫類・土器類（弥生時代・古墳時代・7世紀前半～藤原宮期・平安時代）が、SD105・850から多量の木製品・木簡が出土した。

瓦罫類は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・面戸瓦・炭斗瓦・隅木蓋瓦・罫が出土した。軒瓦は軒丸瓦7型式14種・軒平瓦4型式7種があるが、軒丸瓦6275A型式と軒平瓦6643C型式の出土が目立ち、これが当地域における軒瓦の主要な組み合わせと考えられる。軒瓦・丸瓦・平瓦はいずれもその9割以上が粘土紐巻きつけ技法で作られているが、その傾向はこれまでの大極殿院を中心とした地域の調査結果と一致する。

土器では多量の土師器・須恵器のほか、亀を模したと考えられる形象罫、葡萄唐草文を陰刻した須恵器蓋、新羅土器の壺、土馬などの特殊な土製品がある。

木製品では、SD105から日用品（叩き板・杓子・留針・糸巻・櫛・曲物）や祭祀用具（粘形・鳥形・刀子形・舟形）、SD850から留針・曲物が出土した。

木簡は、SD105の中層および下層から86点（うち削屑21点）、SD850の中層および下層から243点（うち削屑133点）、またSK6613から10点、合計339点（うち削屑154点）が出土した。SD105出土の木簡には、丙申年（696）や大宝2年の年紀を有する木簡、また「三野□山方評」あるいは「周防国佐波評」など評制記載

型式番号	軒丸瓦		瓦		軒平瓦	
	個体数	%	型式番号	個体数	型式番号	個体数
6233-A	3	1.0	6275-A	114	6641-Aa	1
6233-B	38	13.0	6275-D	5	6641-Ab	4
6271-A	2	0.7	6275-H	5	6641-C	17
6273-A	3	1.0	6275不明	6	6641-E	30
6273-B	35	12.0	6279-A	43	6641-F	27
6273-C	2	0.7	6279-Ab	1	6641不明	5
6273不明	8	2.7	6279-B	4	6642-A	11
6274-Ab	1	0.3	6281-A	4	6643-C	107
			6281-B	17	6647-Ca	2
			計	291	計	204
						100.1

第58次調査出土軒瓦分類表

のあるものがみられるほかに、人物を描きその左半に「渥」と書いた墨画（表紙カット）もある。SD850出土の木簡には、和銅2年の紀年を有するものがある。

まとめ

1 7世紀後半については、総柱建物を含む4棟以上の建物群を確認した。その配置から、さらに西方や南方に同様な建物が建つ可能性があり、この地域の7世紀における最初の遺構群としても、その性格説明が急がれる。

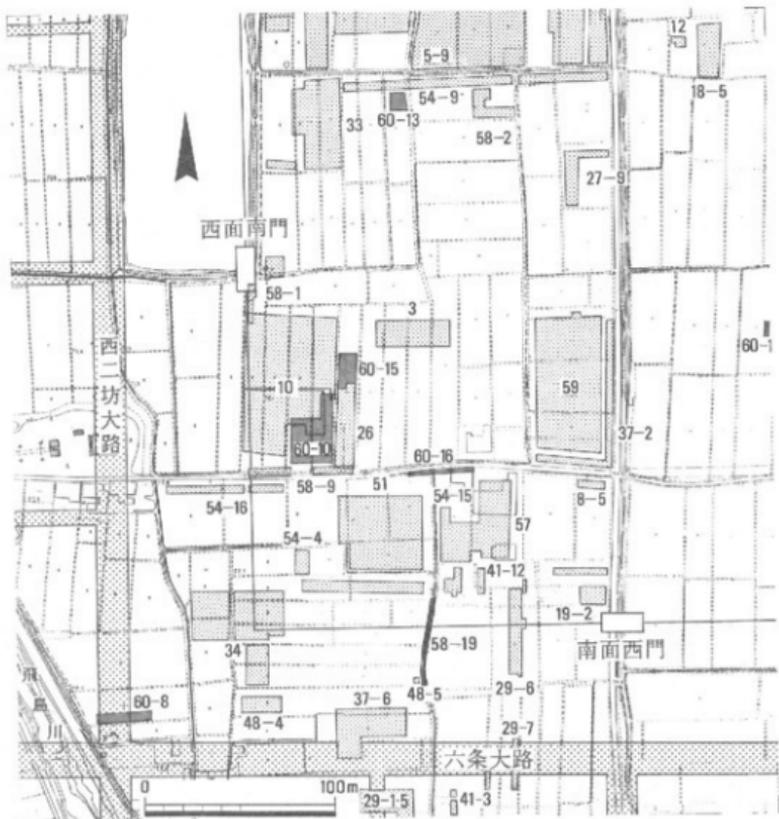
2 先行条坊施工期については、道路に平行する塀で区画された街区に、整然とした配置の大規模な建物群を確認した。庇付きの建物は初めての発見である。それが、後の藤原宮期の建物群と密接に関係し、近接した時期に営まれていることは、これらの建物群が、単なる集落ではなく、官の造営になる施設であり、藤原宮・京造営の監督官庁施設か離宮の一部にあたる性格を想定させる。

3 藤原宮期については、東方官衙の一区画の規模が明らかになったことが大きな成果である。今回確認した官衙は、東西65.1m・南北72.5mの範囲を塀で区画するもので、その位置は内裏地区の南4分の1にあたり、内裏東外郭の東に接した地区には、ほぼ同じ規模でやや小型の官衙区画が4つ配置されていたと考えられる。官衙区画間の宮内道路の規模（塀間距離12.6m）も判明した。内裏に接する官衙が小規模な方形区画であることは、平城宮・長岡宮、古岡で知られる平安宮と共通した配置であり、そうした官衙配置の先駆的形態が既に藤原宮に成立していることが確認された。

4 宮廃絶後については、南北に連なる3棟の建物、その間をつなぐ塀は、「宮所」の字名とともに平安時代荘園の一端を示す遺構である可能性が高い。かつて藤原宮の園地の一部と考えた雑敷遺構の年代は、平安時代と判明したが、汀線を形成すると考えたSG529については時期の断定は保留する。雑敷遺構とそれが帯状に高まる道路状遺構は、高市郡路東条里25条2里の29坪と30坪の境を走る条里遺構である可能性が高く、条里研究に大きな手がかりを与える。また、多くの耕作用小溝の存在から、かつての農地の区画、土地利用の様子を、おぼろげながらも伺い知ることができる。

2 西方官衙地域の調査（第60-10次等）

藤原宮西方官衙地域では、第5～9次調査で南北に長い建物を、第3・10・26・51次調査などで小規模な掘立柱建物や扉を、第51・54-15・57次調査で宮城内先行条坊の六条条間路と西二坊坊間路の側溝などを検出している。本年は第58-18・60-10・60-13次の3ヶ所を調査した。なお、南面大垣の調査（第58-19次）についてもここで報告する。



藤原宮西南辺地域調査位置図 (1:3000)

A 第60—10次調査

(1989年9月)

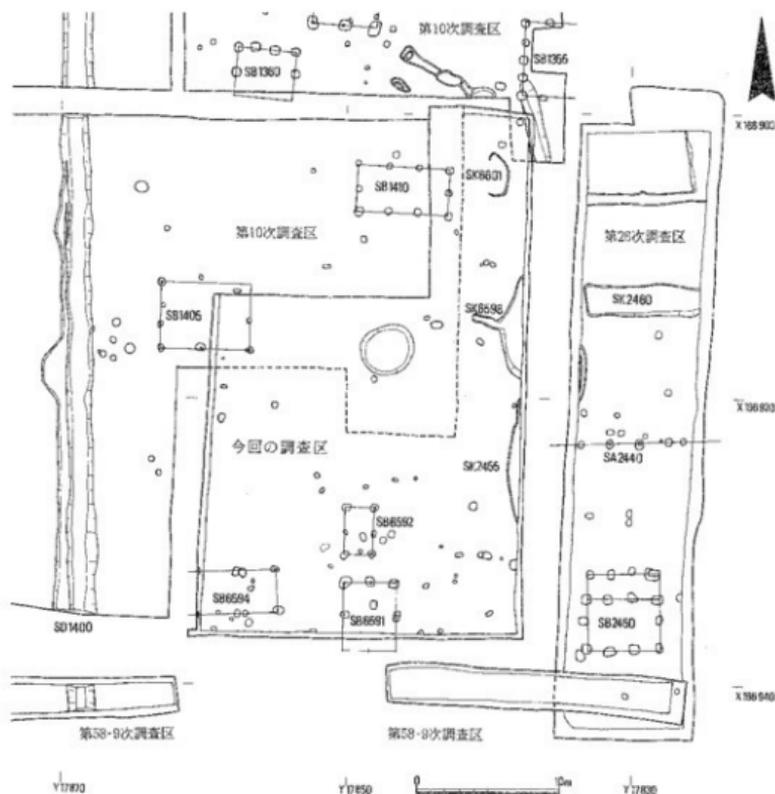
この調査は公営住宅建設に伴う事前調査として、樞原市四分町で行ったものである。調査地は藤原宮西南辺部にあたり、第10次(概報4・5)・26次(概報9)・58—9次(概報19)の調査区に囲まれている。今回の調査目的は、周辺の調査成果と併せて藤原宮西南辺部の状況を把握することである。調査区は東西約22m・南北約24mの方形に東西約7m・南北約13mの張り出し部がつく。

調査区の基本層序は、上から順に盛土・耕土・床土・褐色砂質土・暗灰色土ないし黄灰色粘土があり、その下が茶褐色砂ないし黄色粘土の地山となる。藤原宮期の遺構は褐色砂質土上面で検出した。褐色砂質土は弥生時代後期の土器を多量に包含し、その下の暗灰色土・黄灰色粘土は弥生時代中期の包含層である。検出した遺構は、藤原宮期の掘立柱建物3棟・土坑3基などである。

SB6591は桁行2間・梁行2間の掘立柱南北棟建物であり、北で僅かに東に振れる。柱間寸法は桁行約2.4m・梁行約1.9m等間である。いずれの柱穴にも径約10cmの柱痕跡がある。南妻は検出していないが、南接する58—9次調査区には及ばず桁行は2間であろう。SB6592は桁行2間・桁行1間の掘立柱南北棟建物で、北で僅かに東に振れる。柱間寸法は桁行1.7m等間・梁行2.1mである。SB6591と西側柱筋を揃え、東側柱筋はSB6561の妻柱筋にほぼ揃う。SB6594は桁行2間以上・梁行1間の掘立柱東西棟建物であり、北で西に僅かに振れる。柱間寸法は3m等間である。以上の3棟は、柱穴の出土遺物や振れから見て、第10・26次調査で検出した藤原宮期の建物と同時期であろう。土坑SK2455・SK6598・SK6601からは藤原宮期直前から宮期の遺物が出土し、周辺の建物群に伴うものと考えられる。なお、下層の弥生時代中・後期の包含層については、調査区壁際で土坑等の遺構が多数存在することを確認するにとどめた。

出土遺物には弥生時代前～後期の土器、藤原宮期の土師器・須恵器・瓦、中世の瓦器をはじめ、石包丁・石鎌・碁石・鉄釘・鉄滓などがある。

今回の調査では、周辺の調査で検出した藤原宮期の遺構と同時期の建物群を検出し、小規模な建物が散在するこの地域の状況がいっそう明確になった。



第60--10次調査遺構配置図(1:400)

B 第58--18次調査

(1989年1月~2月)

この調査は下水道管敷設工事に伴う事前調査として、橿原市高殿町・醍醐町で行ったものである。調査地は大極殿院西方で、西方官衙地区の東北部にあたる。発進立杭(長さ5m・幅2m)3ヶ所について調査した。東西道路上のA点では東北方向に流れる灰色砂礫の旧自然河川を確認し、西一坊大路に想定される南北道路上のB点では旧水田面上で寛永通宝1枚を発見したにすぎず、遺構は検出されなかった。

C 第60—13次調査

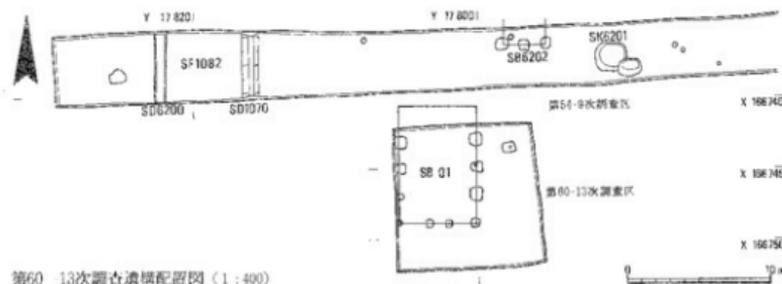
(1989年10月)

この調査は宅地造成に伴う事前調査として、橿原市繩手町で行ったものである。調査地は藤原宮の西方官衙地域にあっており、東西10m・南北10mの調査地区を設けた。周辺では鴉公小学校の建設、同幼稚園の建設、幼稚園への導入路建設に伴う事前調査が行われている。小学校建設予定地では桁行の長い建物が数棟検出され、「馬寮」と推定されている。また、宮の西南隅の地域でも数次の調査が行われているが、小規模な建物が点在するだけで、きわめて遺構の密度が薄い地域と言えよう。しかし、南面西門に面する内濠からは薬物に関する木簡が集中して出土している。

調査地の層序は、上から耕土・床土・灰色粘質土（遺物包含層）があり、その下の灰色砂質土の上面で遺構を検出した。検出した遺構は建物1棟である。SB01は4×3間の南北棟で、桁行2.1m等間、梁間は隅の間が2.0m、中央の間が1.5mである。柱掘形は桁行では1辺0.8mであるが、梁行では0.5m程度の小規模なものである。柱掘形には柱根を残すものもあるが、直径0.2m弱のものである。建物の時期は7世紀後半あるいは藤原宮期と考えられる。

遺物は土師器・須恵器・瓦類が少量出土している。

今回の調査では、比較的小規模なものとはいえ、遺構密度の薄い地域で建物を検出することができた。鴉公小学校の地域では「馬寮」と考えられる遺構が検出されているが、今回の建物がそれと直接関わるか否かは不明である。今後の周辺地域での調査の進展を待ちたい。



第60—13次調査遺構配置図(1:400)

D 第58-19次調査

(1989年2月～3月)

この調査は下排水路の改修工事に伴う事前調査として、橿原市四分町で行ったものである。調査地は藤原宮南面大垣を南北に縦断する位置にあり、既設水路の跡地を中心とした南北50m・東西1.5mの調査区を設けた。

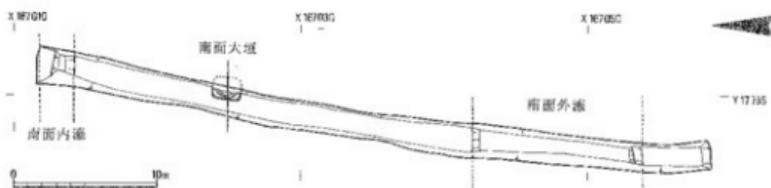
調査地の層序は、上から耕土・床土(厚さ0.4m)・青灰色粘土(0.2m)・暗褐色粘土があり、遺構は、弥生時代の遺物包含層である暗褐色粘土層上面で検出した。検出した遺構は、南北・東西方向の小溝の他に、南面内濠にあたる東西溝、南面大垣の柱穴、南面外濠にあたる東西大溝がある。

南面内濠は、幅1.5m以上・深さ0.9mの横断面V字形の素掘り溝で、長さ1.5m分を検出した。埋立土である茶灰褐色粘土から藤原宮の瓦類が、堆積土層である灰色砂土・暗褐色粘土から藤原宮期の土器や木質遺物が少量出土した。

柱穴は、一辺2m・深さ1.3mの大型の柱掘形で、掘形埋土は茶褐色粘土と黄褐色粘土との粗い互層である。柱は暗灰褐色粘土を埋土とする平面楕円形の柱抜き穴をもって西方向に抜き取られるが、直径30cm程と推定される。

南面外濠は調査区の幅が狭いために充分には確認できなかったが、上層は茶褐色粘質土の埋立土、下層は暗褐色砂質土・灰色砂土で堆積土である。上層での幅は13mで、既知の外濠幅よりも広く、北側にあふれているものと見られる。少量の藤原宮瓦類・土器と多量の弥生土器が含まれるものの、西南隅部を調査した第34次調査での所見と異なり、奈良時代の遺物は含まれない。

以上のように、外濠を除けばこれまでの成果を追認するにとどまり、新たな知見はなかった。



第58-19次調査遺構配置図(1:400)

1 一条大路の調査（第60-6次）

（1989年5月～6月）

この調査は住宅・倉庫新築に伴う事前調査として、樫原市膳夫町で行ったものである。調査地は一条大路と東三坊坊間路の交差点の存在が予想される位置である。調査は交差点の検出を目的とし、当初東西9m・南北15mの調査区を設けたが、遺構の状況より、東西4m・南北23mの調査区と東西3.5m・南北11mの調査区を新たに設定した。

調査区の層序は、上から耕土・床土・赤褐色土の順であり、この層序は3調査区とも基本的には変わらない。藤原宮期の遺構は赤褐色土上面で検出した。

調査の結果、一条大路とその両側溝、東三坊坊間路とその両側溝、および両道路の交差点を検出した。

一条大路SF6250は、長さ13m分を検出し、両側溝心々距離8.5m・幅員7.5mと復原できる。北側溝SD6406・SD6408は、最大幅1.5m・深さ0.4mである。南側溝はSD6403・SD6405であり、最大幅1.25m・深さ0.25mである。

東三坊坊間路SF4300は、長さ32m分を検出し、両側溝心々距離6.6m・幅員5.5mと復原できる。東側溝はSD6400・SD6407であり、一条大路路面を横断し、最大幅1m・深さ0.25mである。西側溝はSD6404・SD6409であり、最大幅1m・深さ0.27mである。

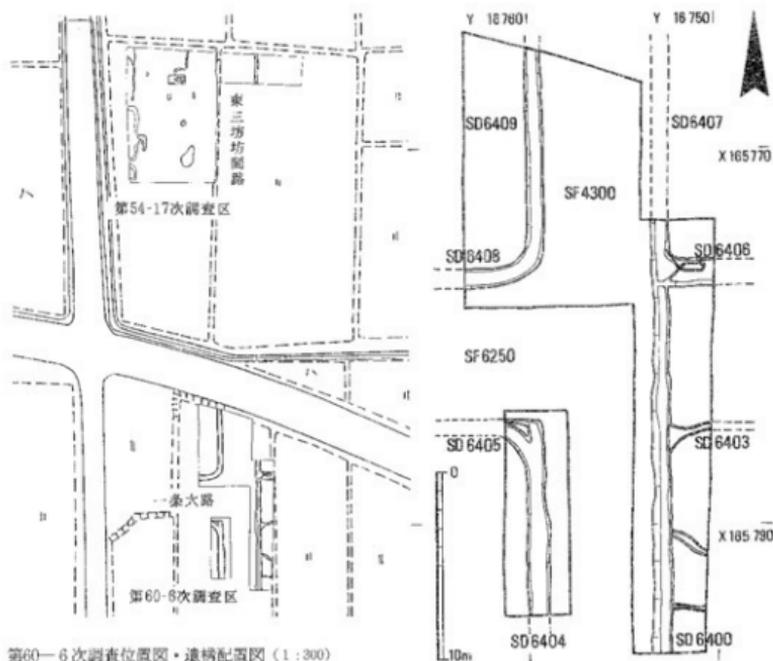
一条大路と東三坊坊間路の交差点の状況は、交差点西側では坊間路西側溝SD6404・6409が大路の南北両側溝SD6405・6408とそれぞれL字形ないし逆L字形に接続している。これに対し、交差点東側では北流する坊間路東側溝SD6400・6407に大路の南北両側溝SD6303・6406がT字形に接続している。

北および西に下がる周囲の地形から考えると、坊間路以東の水は坊間路東側溝に集めて北に流し、一条大路以南の坊間路西側溝の水は、大路南側溝を経て西へ流し、また交差点の水は大路北側溝と坊間路東側溝に分け、それぞれ西と北へ流したものであろう。

遺物はその大半が一条大路・東三坊坊間路の両側溝から出土した藤原宮期の

土器であり、その他縄文土器、弥生時代の石鏃等ごく少量出土している。

今回の調査で特筆すべき成果は、一条大路の検出である。一条大路想定位置については、第36—4次（概報未収録）・41—7次（概報15）・41—9次（概報15）・41—16次（概報15）・52次（概報18）の諸調査を行ったが、第41—16次調査で幅1.3m、深さ0.3mの南側溝を検出した他は、遺構面の削平がひどく側溝が残っていないかった。したがって、一条大路の両側溝心々距離（8.5m）・幅員（7.5m）が判明したのは初めてであり、藤原京の条坊を復原する上で貴重な資料と言える。今調査と第41—16次調査の成果によれば、一条大路南側溝の振れは西で南に $0^{\circ}7'2''$ となる。また、東三坊坊間路については、今調査地の約1150m南の第46次（概報16）・50次西（概報17）調査でも検出し、側溝心々距離7~7.5m・路面幅6.3~6.4mであった。今調査地より1m弱幅が広い。今調査と第46次調査の成果によれば、東一坊坊間路の振れは北で西に $0^{\circ}6'42''$ となる。



2 左京九条四坊の調査 (第58-20次)

(1989年3月~4月)

この調査は、橿原市戒外町から南浦町集落の南を通り、高市郡明日香村小山の村道耳成線に至る農道(総長590m)の新設事業に伴う事前調査の第2年次調査である。調査地は香久山の南、史跡大官大寺跡の北100mの位置にあり、藤原京左京九条四坊東北坪・西北坪および九条三坊東北坪にあたり、東四坊坊間路・東三坊大路推定線を横切ることとなる。また、周辺地での調査成果から、藤原京以前の遺構の存在が予想され、藤原京関連遺構の検出、藤原京以前の遺構の広がりを確認することを主な目的にした。

調査は事業地の西半分(長さ216m)について、既存の水路や里道によって、東からⅠ区(100m)・Ⅱ区(50m)・Ⅲ区(60m)の3調査区に分けて実施したが、調査区が路面敷幅に限定された幅4~5mと狭長なために、検出した遺構はいずれも断片的なものとならざるを得なかった。なお西端のⅢ区については、耕土・床土直下で、摩滅した大官大寺の瓦や10~14世紀の土器を含む砂・砂利層が現われた他に顕著な遺構はなかった。調査地西の百貫川に架ける橋梁工事の立会調査(A)の所見でも、深さ4m以上の砂利層を確認しており、Ⅲ区以西は旧河川の氾濫原と判断される。以下Ⅰ・Ⅱ区の遺構の概要を記す。

Ⅰ 区

Ⅰ区の基本的な層序は、上から耕土・床土・黄褐色粘土あるいは灰緑色砂・暗褐色粘土であり、遺構は7世紀代の大規模な盛土整地の一部であり、それ自体が一つの遺構でもある黄褐色粘土あるいは灰緑色砂上面(水田面 $0.6\sim 0.8\text{m}$)で検出した。この遺構検出面は、西に低く東に高くなっており、調査区東西両端での比高は約0.7mである。

検出した遺構には、東西・南北方向に走る多数の小溝のほか、南北溝2条・東西溝1条・土坑6基・獨立柱穴列6条、そして石組暗渠1条などがあり、7世紀末の大官大寺の瓦の有無によって2時期に大別される。なお、東西・南北小溝については13~14世紀の瓦器・土師器片が含まれており、中世の水田耕

作に関わる溝と考えられるが、ここでは図示記述ともに省略する。

南北溝SD2428は調査区の中で検出した素掘り溝で、幅3m・深さ0.4mである。整地上の黄褐色粘土を掘り込み、灰色砂が堆積する。7世紀末の上器と大官大寺の瓦片が出土した。南北溝SD2429はSD2428の西約14mにあり、幅2m・深さ0.4mの素掘り溝である。溝底の東寄りが幅0.3mで1段深くなっている。埋土の黄灰色粘土から7世紀中頃の土器が出土した。

2条の南北溝は約14mの間隔で並行するが、出土遺物の時期が異なり、東西坊間路の想定線からも大きく外れた位置にあり、道路側溝とすることはできない。なお、同想定線上では道路側溝やそれに伴う施設は検出されなかった。

東西溝SD2427は、調査区の中央に広がる灰緑色砂層に掘り込まれた幅2mの溝で、溝の北肩と南肩の一部に石が残っており、部分的な護岸があったものと推定される。埋土の灰色砂からは大官大寺の軒瓦などが出土した。

調査区東端にある多くの土坑は、炭化物混りの黄灰色粘土で埋められており比較的多くの土器が含まれる点で共通する。出土土器はいずれも7世紀中ごろから末の時期のものが混在し、土坑は大官大寺の時期以降に掘られたものと考えられる。このうち、調査区東端の東西溝状土坑SK2421は、東の昨年度調査区で検出した東西溝SD2242につながる位置にあり、西には南北方向に長い土坑SK2422が連なっている。溝SD2242は土坑SK2421の西端から東18mの地点で北へ折れ曲がっていることから、これらが、一連の鋸形に折れ曲がる溝である可能性がある。SD2242を含めていずれも流水の痕跡はみられず、敷地を区画する空堀状遺構と考えられるが、それに伴う遺構は検出されていない。

掘立柱穴の多くは調査区の東端で検出されたが、西端にもいくつかの柱穴がある。いずれの柱穴にも瓦片が含まれず、7世紀代の遺構と考えられる。

柱列SA2435は、ほぼ真東西に並ぶ5個の柱穴で、東の柱間が2.8mと広いほかは2.1m等間である。柱穴は一辺1mの方形で深さ0.3mである。土坑SK2422・柱列SA2433よりも古く、東西棟建物の南側柱列と考えられる。柱列SA2433は直径0.3mの円形柱穴4個からなり、北で西に振れる方位をしめす。埋土は灰色砂で深さ0.3m。SA2435より新しいが詳細は不明である。柱列SA2432・

2426・2436・2437等は一辺0.4m～0.5m、深さ0.2mほどの方形掘形で、直径0.1mの柱痕跡の残る柱穴もある。埋土に炭化物の混じる特徴があり、ほぼ同時期の建物の一部をなすと思われるが調査区内では完結しない。調査区西端の柱穴(SA2439)も埋土に炭化物が混じる点で共通しており、同様の時期の建物の一部と考えられる。

石組暗渠SD2430は、I区の西端から約30m東の位置にあり、調査区の北壁際に方形石組による開口部(SX2431)がある。開口部の南で3m、北で1m程を検出したにとどまるが、東南東から西北西へ方向に延びているとみられる。暗渠は底での幅0.4m・深さ0.6mで、溝内下半は拳大の小石で埋められ、その隙間には水垢状の粘土が溜っている。溝内上半には比較的粗い砂が堆積する。暗渠の開口部は暗渠両側石上あるいは天井石上に、0.3～0.4m大の川原石を3～4段ほど横積みして構築され、深さ0.6m。開口部の上端の石は一辺1mほどの方形に配列されるが、その向きは暗渠の方向とも、その対角線とも一致せ



第58—20次調査位置図

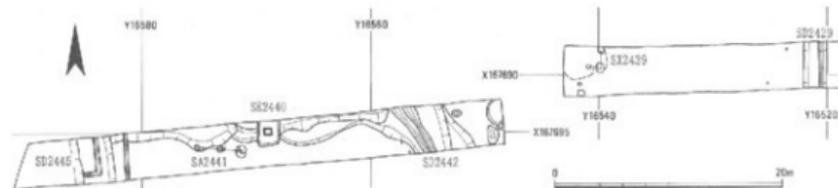
ず、ほぼ真東西南北を指している。このことは真北方向の遺構に伴う遺構であることを示すとともに、石組暗渠の方向が何らかの遺構に規制された結果であることを示している。暗渠の時期は、開口部埋土の砂層から出土した土器から、7世紀前半から中頃と考えられる。

石組暗渠の構築は、遺構検出面下約0.7m程にある縄文時代晩期の土器包含層の上に直接掘え並べた側石の周辺を灰緑色砂あるいは黄褐色粘土で包み込み、天井石を架構したのち、隙間に小石を粘土で詰め込んでいる。そして、天井石の上は広い範囲に厚さ0.6mほどの黄褐色粘土で覆って暗渠とする。

石組暗渠を覆う黄褐色粘土は、調査区の北壁断面の観察によれば、調査区西端に一部顔を出す灰緑色砂層の上に黄褐色粘土が乗り、その上に、調査区中程に広がる灰緑色砂層が乗り、さらに、東端の黄色粘土が乗っている関係になっている。また、各々の砂・粘土層も細かく観察すると、西から東へ順次積み重ねられた状況にあることから、少なくとも調査区周辺では、西方から順次進められた大規模な整地地業の一部にあたる。また、地業の下層である暗褐色粘土層の上面は地勢の傾きにほぼ合った傾きを示しており、地業が旧地形の凹凸をただすことを目的にしたものでなく、盛土による高上げを目的としたものと理解される。この整地地業はこれまでの調査成果から、東西400m・南北300m以上にわたることが明らかになっており、今回の調査地はその中程にあたっている。地業全体がどのような順序と方向で進められたのか、そして、地業の中心が何処にあるのかについて、一断面の所見からでは明らかでない。

II 区

II区の基本的な層序は、上から耕土・床土・茶褐色砂質土・黄色粘土・暗褐色粘土・黒褐色粘土・灰褐色細砂質土である。黄色粘土はI区の整地と同じで



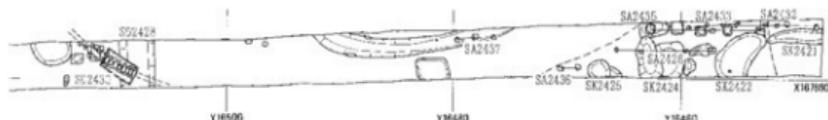
あり、暗褐色粘土層・黒褐色粘土層は縄文時代晩期の遺物包含層、灰褐色細砂質土が地山である。遺構は黄色粘土あるいは暗褐色粘土面で検出したが、黄色粘土の整地土は東端に0.1mの厚さで残るだけで、中程以西では下の暗褐色粘土が露出する。これは、Ⅱ区の東端がⅠ区の西端よりも約0.5m低くなっていることからすれば、すでに削平、流失した結果と考えられる。検出した主な遺構には、縦板組井戸・斜行流路・柱穴などがある。

縦板組井戸SE2440はⅡ区の中程にあり、一辺2m・深さ1.7mの掘形内に、一辺0.9mの縦板組の井戸枠がある。井戸枠は幅約30cmの板を $\frac{1}{2}$ ずつ重ねながら各辺4枚ずつ配し、底と中程とを横材で留めている。堆積土である底近くの青灰色砂層から完形の土師器甕・壺、須恵器壺などの土器や、鉄斧頭・鉄釘・銅塊・有孔無文銅門板（無文銅銭）などの金属製品が出土し、埋土である上層の黄灰色粘土からは、凝灰岩質砂岩を含む多量の石塊とともに、大官大寺の瓦が出土した。井戸は黄色粘土の整地以後に掘られ、その廃絶は大官大寺廃絶後とみられる。出土土器から藤原宮期には使われていたと考えられる。

斜行流路SD2442は、Ⅱ区の南東から西北へ流れる浅い流路で、調査区の北壁に沿って西行する。灰色砂・褐色砂からなる埋土に摩滅した大官大寺の瓦や奈良時代の土器が含まれ、13～14世紀代の土器を含む南北小溝よりも古いことから、中世以前の氾濫河川と考えられる。

柱穴列SA2441は井戸の西に並ぶ3個の柱穴で、いずれも一辺0.5mほどの掘形に直径0.1mの柱痕跡がある。深さ0.1m程までに削平され、柱間は1.9m等間であるが、調査区内では建物にはまともらない。

Ⅱ区の西端は、Ⅱ区全域で確認した旧河川の氾濫の縁辺にあたる大きな段差(SX2445)があり、下層の黒褐色粘土層が露出する。黒褐色粘土層には、縄文時



第58—20次調査遺構配置図(1:500)

代後期から晩期の多量の土器が含まれているが、飛鳥盆地北半では大官大寺下層をはじめとして、縄文時代の土器包含層が確認されており、飛鳥川右岸の微高地上に形成された同時代の遺跡の一部にあたるものである。

まとめ

今回の調査は極めて細長い調査区であることから、検出した遺構は断片的なものであり、その解明は今後の課題として残ることになった。

調査の目的の一つである藤原京関連の遺構については、東四坊坊間路は検出されなかったものの、左京九条四坊西北坪内で縦板組の井戸1基と南北溝、同東北坪内で幾つかの土坑を確認した。縦板組井戸は大官大寺廃絶と相前後して廃棄されており、同坪内での営みが藤原京と深く関わっていることを示している。東四坊坊間路が確認されなかったことについては、検出した柱穴などが浅く、道路遺構も後世の削平を受けたことが考えられるが、史跡大官大寺跡の一連の調査を通じて、伽藍中軸線上に当たる東四坊坊間路がどの調査時でも確認されておらず、講堂下層で九条大路相当の東西道路遺構を確認していることからすれば、当初から施工されなかった可能性を考慮しなければならない。

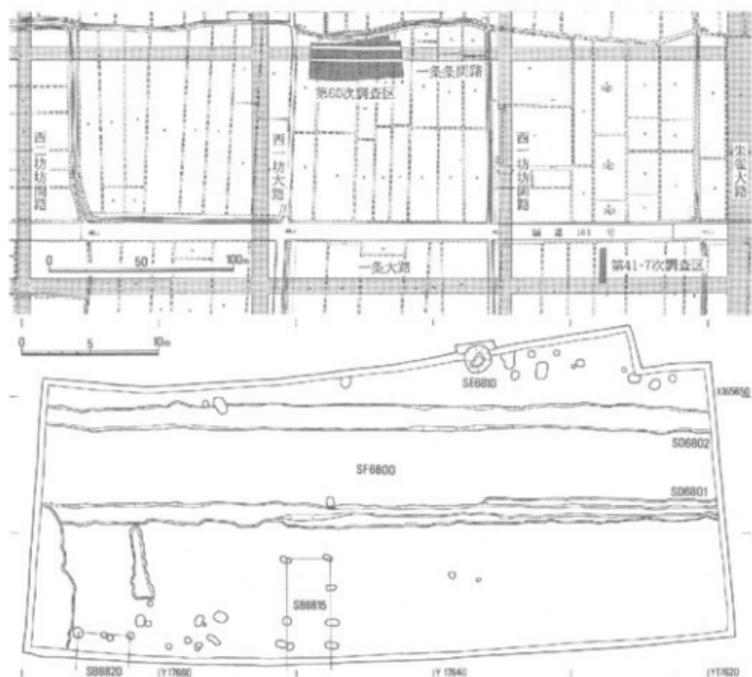
藤原京以前の遺構については、7世紀中頃の黄色粘土による整地と一体で構築された石組暗渠を検出したことが、特筆すべき成果である。飛鳥盆地内の石組暗渠の類例は、明日香村飛鳥の石神遺跡や奥山の上ノ井手遺跡のほか、調査地の西約300mの紀寺跡下層で検出されており、7世紀前半から後半にかけての宮殿あるいは貴族の邸宅にかかわる遺構として、飛鳥の都の都市計画の大きさを示す大土木事業の一部と考えられてきた。また大官大寺北西一帯に広がる黄色粘土の整地については、7世紀前半から中頃の時期の大規模な整地として、宮殿相当の遺構の存在を示すものと考えられてきた。今回検出した石組暗渠は、そうした大規模な整地事業に確実に伴う遺構としてはじめて確認されたものであり、飛鳥盆地北半部における宮殿相当遺構の追究および飛鳥盆地全体の土地利用・都市計画の解明にとって、より具体的に重要な手がかりを与えるものといえる。周辺地域における本格的な調査を期待したい。

3 右京一条一坊の調査 (第60次)

(1989年5月～7月)

この調査は国道165号に面する大型店舗建設の事前調査として、橿原市醍醐町で行ったものである。建設予定地は藤原京右京一条一坊西南坪と西北坪の一部にあたるが、調査は諸般の事情から建物の建設予定地に限定され、駐車場予定地は将来建物を建設する場合に調査することにした。調査は一条条間路を中心に東西52m・南北25mの発掘区を設けて実施した。調査面積は1086㎡である。

調査区の層序は、上から現コンクリート工場に伴う盛土・旧水田耕土・床土・灰褐色土・黄灰褐色砂質土(地山)の順で、遺構の大部分は黄灰褐色砂質土の



第60次調査位置図 (1:3000)・遺構配置図 (1:400)

上面で検出した。

遺構 検出した遺構には、一条条間路とその両側溝・小規模な建物2棟・井戸1基・約30個の小柱穴や土坑がある。このほか、調査区全体から中世以降の水田耕作に関係するとみられる東西・南北方向にのびる多数の小溝を検出したが、これ以外は、主として藤原宮期の遺構である。

ほぼ想定位置で、東西にのびる一条条間路SF 6800を約50mにわたって検出した。道路幅は現状で約5.5m、両側溝間の心々距離は7mである。南側溝SD 6801は幅約1.5m・深さ約0.3m、北側溝SD 6802は幅約1.5m・深さ約0.2mである。両側溝とも堆積土から藤原宮期の遺物が少量出土した。

西南坪は、その北辺を調査し、建物2棟と小柱穴・土坑を検出した。SB 6815は、桁行3間以上(6.8m)・梁行1間(3.5m)の南北棟建物である。柱穴に重複が認められるので、ほぼ同位置で一度建て替えられているらしい。SB 6820は発掘区南壁にも柱穴があるので、桁行1間以上(2m)・梁行2間(4m)の南北棟総柱建物に復原できる。これ以外の小柱穴には柱根や柱痕跡を残すものもあるがまとまらない。

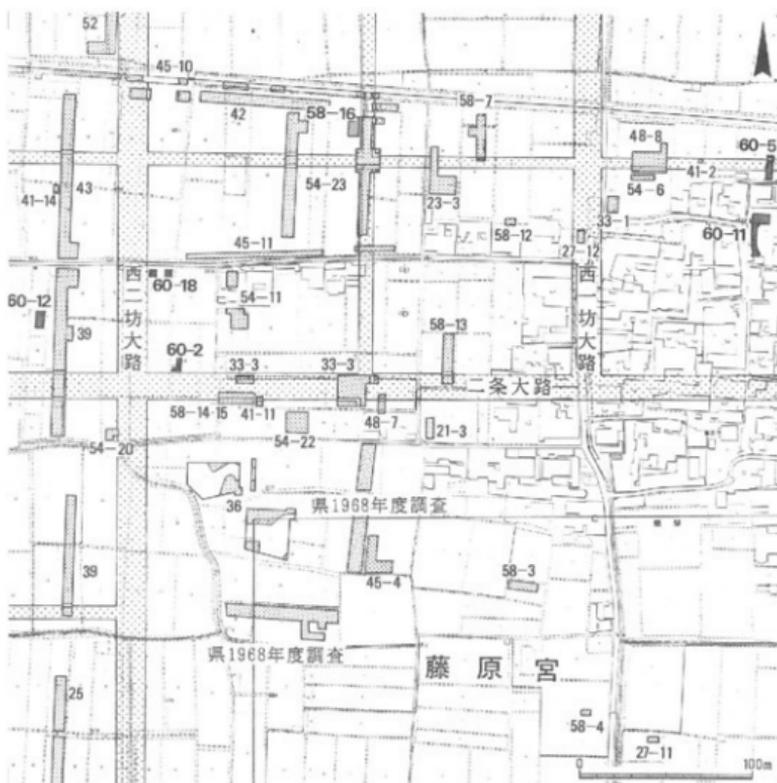
西北坪は、その南辺のごく一部を調査したにとどまり、検出した遺構は少ない。SE 6810は直径約2m・深さ約1mの掘形をもつ井戸であるが、井戸枠は抜き取られている。埋土から藤原宮期の遺物が出土した。ここも小柱穴には柱根や柱痕跡を残すものがあるが、うまくまとまらない。

遺物 出土遺物の大半は藤原宮期のものであるが、これ以外に弥生時代の土器・石器、古墳時代の土器、鎌倉時代の瓦器などが少量ある。

藤原宮期の遺物には、土師器・須恵器のほかに、円面硯・転用硯・土馬・漆の付着した土器・鉄製品・銅製品・銅滓・鞆羽口・埴塼などがある。瓦は軒丸瓦3点(6278Ca・6281Ab)・軒平瓦2点(6643Aa・6643B)と、少量の丸・平瓦が出土した。これらの遺物は、両側溝および西南坪・東北坪からまんべんなく出土したが、銅関係の遺物は、どちらかといえば西南坪の西半に集中する傾向が認められた。付近に銅製品の製作に関わる工房が存在した可能性を指摘しておきたい。

4 右京二条一・二・三坊の調査（第60-11次等）

この地域は藤原宮の北側にあって、外周帯をはさんで藤原宮に接するという、きわめて重要な場所にあっている。この地域一帯は、開発の速度が特に速いこともあって、調査件数が多い。このため、藤原宮・京関係の資料、なかでも条坊遺構に関する資料が特に多く蓄積されている。本年度においてもこれらに関する重要な知見の追加があついたので、ここにこの地域の調査をまとめて報告することにする。



右京二条一～三坊周辺調査位置図

A 第60—11次調査

(1989年10月)

この調査は住宅新築に伴う事前調査として、樞原市醍醐町で行ったものである。調査地は藤原宮右京二条一坊西南坪の東北部中央付近にあたり、坪の中央部に近いため、坪内の様子のある程度明らかにできると期待された。当初、敷地の北辺部に東西5m・南北3mの調査区を設けたが、西端付近で大きな柱穴1個を検出し、調査区内でこれと関連する柱穴を他に検出できず、南方あるいは西方に柱穴の存在する可能性が強くなったため、南と西に調査区を拡張した。

調査区の層序は、上から盛土・灰褐色粘質土・茶褐色砂質土があり、その下が藤原宮期の遺構検出面(黄灰色砂質土)となる。検出した主な遺構は、掘立柱建物・掘立柱塀・東西溝・土坑である。

藤原宮期の遺構には掘立柱建物SB01と掘立柱塀SA02がある。SB01は桁行6間の南北棟建物で、梁行は北妻が2間、南妻が3間と推定される。柱間寸法は、桁行約3.1m等間、梁行は北妻が約2.4m、南妻が約1.6mとなる。柱掘形はいずれも一辺1mを超え、建物の棟方向かそれと直角の方向に柱を抜き取っている。SB01の南妻柱筋と東側柱筋は、それぞれ坪の南北・東西三分線に近い位置にあり、坪内に計画的に配置されたと考えられる。SA02は、SB01の北約1.8mにある東西塀で、2間分を確認し、東西にさらに延びると推定される。柱間寸法は約3m等間である。

藤原宮期以後の遺構には、東西溝SD03と土坑SK04がある。SD03は、幅1m・深さ0.15mの素掘りの溝である。堆積上からは、奈良時代から平安時代にかけての土師器・須恵器などが出土した。SK04は、南北約3.5m・東西約0.6m・深さ約0.1mほどの南北に長い溝状を呈し、埋土には炭化物を含む。SX04は、重複関係からSD03より新しい。

今回検出した南北棟建物SB01は、藤原宮の建物としてきわめて大規模であるが、右京二条一坊西南坪における計画的な建物配置を考慮すると、この建物の西方、坪の中央あるいはその北寄りに、さらに大規模な正殿級の建物が存在する可能性があり、今後の当坪内における調査の進展に期待がもたれる。

B 第60—5次調査

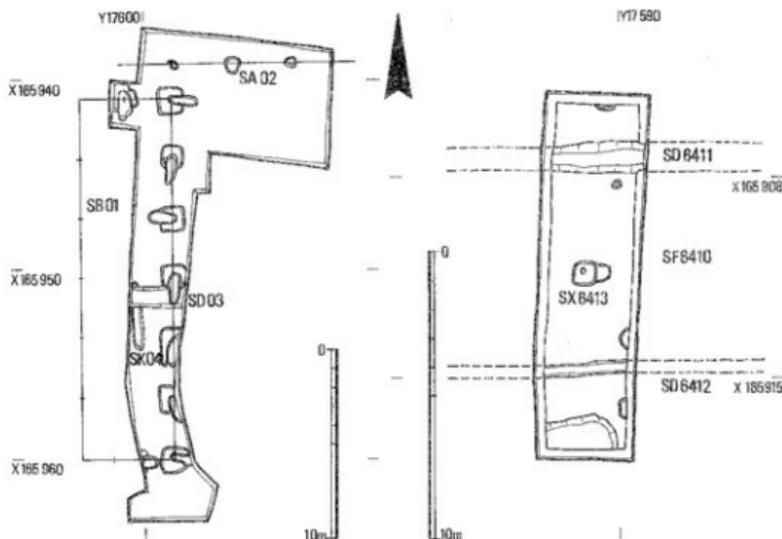
(1989年5月)

この調査は住宅新築に伴う事前調査として、榎原市醍醐町で行ったものである。調査地は藤原宮右京二条一坊西北坪と西南坪にまたがり、二条条間路の想定位置である。東西3m・南北12mの調査区を設けて調査した。

調査区の層序は、上から耕土・床土があり、その下が遺構検出面である。検出した遺構は、素掘り溝11条・土坑9基・柱穴1個である。

SD6411は二条条間路SF6410の北側溝、SD6412は同南側溝であり、その間が路面にあたる。SD6411は幅1m・深さ0.25mで、藤原宮期の土器が出土した。SD6412は幅0.6m・深さ0.1mで、後世の削平が著しく、遺物は皆無であった。SX6413は調査区中央にある柱穴で、柱痕跡はあるが、遺物が出土せず時期の決定ができない。

調査の結果、二条条間路の側溝心々距離7.2m・幅員6.8mと判明した。二条条間路については、過去4回調査を行い、第43次(概報15)・58—7次(概報19)



第60—11次(左)・60—5次(右)配置遺構配置図

で北側溝、48—8次（概報17）で南側溝、54—23次（概報19）で両側溝（心々距離7.1m）を検出している。右京二条一坊内の第48—8・60—5次調査の成果から南側溝の振れを求めると、西で北に $0^{\circ}2'29''$ となりほとんど振れがない。一方、左京二条二坊内の第54—23・58—7次調査の成果から北側溝の振れを求めると、西で南に $0^{\circ}14'30''$ となる。ところが、西一坊大路をへだてた第54—23・60—5次調査の成果により道路心の座標を比較すると、東方に位置する第60—5次調査地の方が南へ1.3mほど寄っている。先に見たように二条一坊内でほとんど振れがなく、二坊内では西で南であるから、西一坊大路をへだてて、二条条間路がくいちがっている可能性がある。この点については、この地域一帯における今後の調査の進展を待って検討したい。

C 第60—1次調査

（1989年4月）

この調査は住宅建築に伴う事前調査として、橿原市醍醐町で行ったものである。調査地は藤原京右京二条一坊西北坪にあたる。東西3m・南北8mの調査区を設けて調査した。土層は上から順に暗茶色土（耕土）・黄灰色土（床土）・暗灰色砂（古墳時代包含層）・暗灰色粘質土（地山）となる。遺構検出は暗灰色砂上面で行ったが、中世の溝に限られ藤原宮期の遺構は検出できなかった。

D 第60—2次調査

（1989年4月）

この調査は住宅建築に伴う事前調査として、橿原市醍醐町で行ったものである。調査地は藤原京右京二条二坊西南坪にあたり、第58—14・15次調査の成果（概報19）からみて、二条大路にほぼ接した位置にある。このため堀などの閉塞施設の検出を目的に、東西3m・南北8mの調査区を設定し、後に東西2.5m・南北2m拡張して調査した。土層は上から順に茶色土（耕土）・青灰色土（床土）・灰褐色土・淡褐色砂質土（地山）である。遺構検出は淡褐色砂質土の上面で行ったが、藤原宮期の遺構は検出できなかった。

E 第58-16次調査

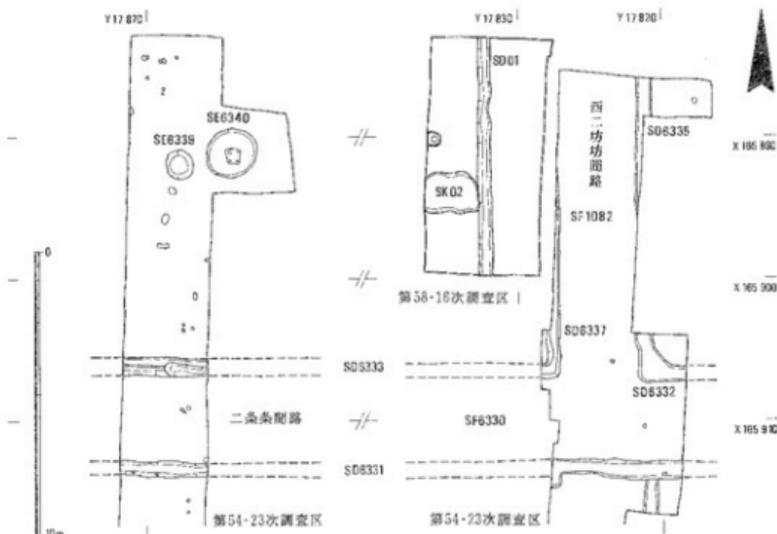
(1989年2月)

この調査は住宅新築に伴う事前調査として、榎原市醍醐町で行ったものである。調査地は藤原京右京二条二坊西北坪にあたり、東隣接地の調査（藤原宮第54-23次調査）では西二坊坊間路を検出している。調査は坪内に予想される施設と坊間路を限る施設の検出を主たる目的として、宅地東半部に南北16.5m・東西8mの調査区を設定した。

調査区の基本層序は耕土・床土・暗褐色粘質土・黄褐色粘質土・暗茶褐色粘質土となる。暗褐色粘質土・黄褐色粘質土の各上面で中世遺構の南北および東西方向の小溝多数を検出し、さらに掘り下げて、暗茶褐色粘質土上面（地表下約0.6m）で7世紀代の遺構、南北溝1条および土坑1基を検出した。

遺構面は調査区南半部では褐色砂質土となり、その上に部分的に薄く粗砂層がある。遺構はこの粗砂層上面で検出した。

南北溝SD01は調査区のほぼ中央で検出したもので、上幅約1m・深さ0.3



第58-16次調査遺構配置図(1:200)

～0.4mの索掘り溝である。SD01の西側には一部重複して南北3m・東西3m以上の大土坑SK02があり、深さは10cmほどと浅いものである。SD01とSK02の重複関係はSK02が新しいが、両者とも炭化物を含む酷似した茶褐色粘質土で埋め戻している。SD01・SK02内の遺物は7世紀後半代の土器を主体としており、SK02には藤原宮期の須恵器が少量混じる。

SD01・SK02の時期差は大きくなく、藤原宮期に存続していた可能性が高いが、SD01の位置は西二坊坊間路西側溝の西約5mにあって平行するもので、その性格は明らかでない。調査区外南約7mには二条条間路北側溝が位置することから、今後この北側溝と合流するものか否か調査が望まれる。

その他、SK02の北側で井戸1基を検出した。径約1mの円形掘形に径40cmほどの曲物を掘えたもので、曲物は最下段と二段目の一部が残る。掘込面が明確でなく、遺物の出土もみられず、遺構の時期は明らかでないが中世のものと考えられる。

F 第60—12次調査

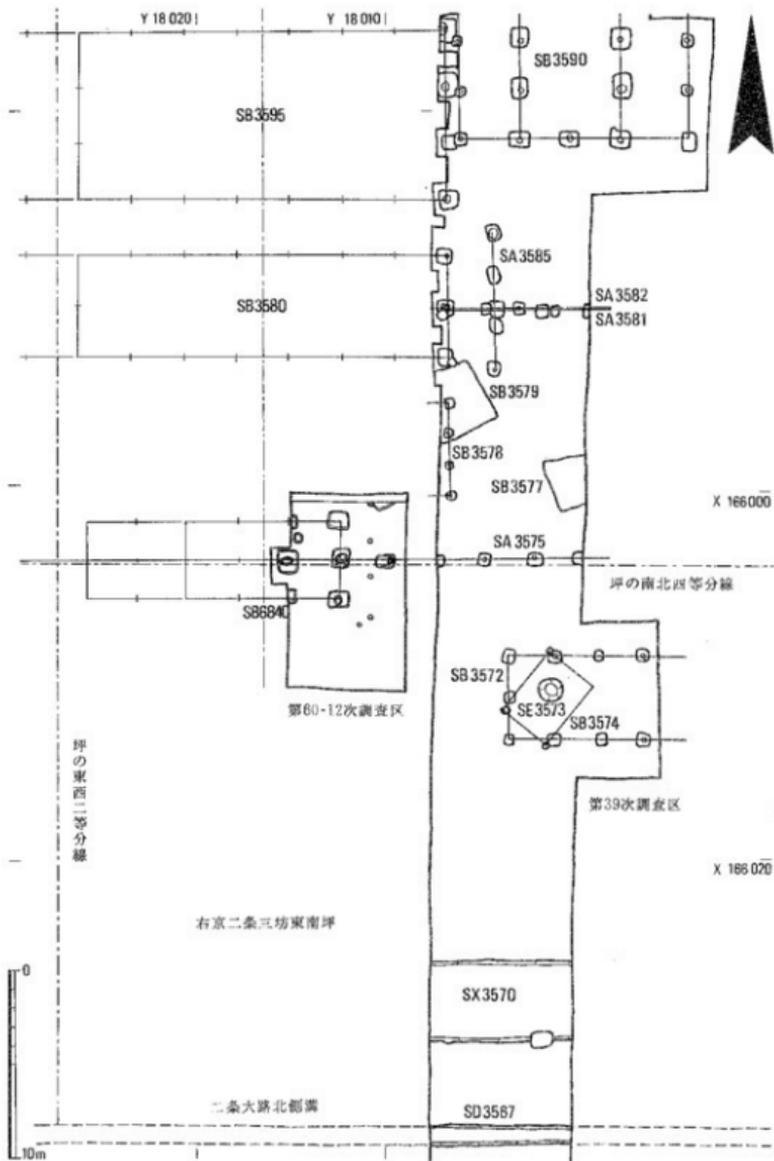
(1989年10月)

この調査は住宅新築に伴う事前調査として、橿原市醍醐町で行ったものである。調査地は藤原京右京二条三坊東南坪の東南部にあたり、1984年の第39次調査地(概報15)に西接する。第39次調査およびその北側の第43次調査(概報15)では、条坊道路のほか東南坪内の建物多数を検出し、東南坪が藤原宮期を通じて、一坪を占地した宅地であったと推定される。今調査は、坪の南から四分の一に位置する掘立柱塼SA3575の西延長線を含む位置にあり、関連する遺構の存在が予想された。調査は東西6m・南北10mの調査区を設けて行った。

調査区の層序は、上から盛土・耕土・床土・暗褐色土があり、遺構は地表下0.7mの暗褐色土上面で検出した。検出した遺構は掘立柱総柱建物1棟・掘立柱東西塼1条である。

SB6840は、調査区北西部にかかる掘立柱の総柱建物である。後述する理由

第60—12次・39次調査遺構配置図(1:300) >



で東西棟になると推定する。桁行は1間分を検出し、さらに西に伸び、梁行は2間である。柱間寸法は桁行2.7m(9尺)・梁行2.1m(7尺)等間である。柱掘形の規模はやや不揃いで、一辺0.9～1.2mほどの方形ないし長方形を呈する。全てに柱痕跡を確認した。

SA3575は、第39次調査区から伸びる掘立柱東西塀で、SB6840の東妻中央柱に接続する。1間分を検出し、第39次調査での検出分とあわせて4間分を検出したことになる。柱間寸法は2.6mであり、第39次調査での所見と一致する。柱掘形は東西1m・南北0.7mの長方形を呈し、柱痕跡がある。

出土遺物には、各柱穴からの少量の藤原宮期の土器と瓦数点がある。
まとめ 今回検出したSB6840・SA3575と、第39・43次調査で検出した遺構との関係について調べておく。第39・43次調査では、右京二条三坊東南坪内で多数の遺構を検出し、建物相互の切り合い関係・配置関係から最低2時期(A・B期とする)に分けることが可能であった。一坪宅地内での中心的建物は、A期ではSB3580・3595、B期ではSB3590である。SB6840・SA3575はどちらの時期に属するのであろうか。

A期のSB3580・3595はSA3575の北方にある2棟の東西棟建物であり、東妻のみを検出した。両者は妻柱筋を揃え、SB3580が前殿、SB3595が正殿と考えられている。一方、今回検出したSB6840は総柱建物であり、東妻の中央に東西塀SA3575が取り付く。かりに、SB6840の桁行を5間(9尺等間)、SB3580・3595の桁行を9間(9尺等間)とすれば、3者の桁行中心線はほとんど一致する。あるいはSB6840の桁行を3間、SB3580・3595の桁行を7間と考えても、3者の桁行中心線は一致する。そして、SB3580の棟通りはSA3575の北13.3m(45尺)に位置する。以上の仮定が正しければ、SB6840・SA3575はA期に属すると考えてよく、SB3580に対する位置関係から見て、内郭の南辺を画す中門と塀となろう。なお、SA3575は坪の南北四等分線に一致し、坪の東西二等分線は、SB3580・3595が7間とすればその西妻にほぼ一致する。

今回の調査は小面積であったが、一町規模の土地利用の様相に関する重要な成果が得られた。以上の復元案の当否は周辺の調査の進展を待って検討したい。

5 右京七条一・二坊の調査 (第58-17次等)

この地域は藤原宮の南側にあって、外周帯をはさんで藤原宮に接するという、きわめて重要な場所にあっている。この地域の東南部には日高山、西半部には古くからある飛驒の集落が広がっているが、橿原市による市営住宅建設や小集落地区改良事業にともなう宅地造成工事の事業が進展しつつあるため、調査件数が多い。特に条坊遺構や坪内の利用状況に関する資料が蓄積されつつある。本年度においても、2500 m²におよぶ第62次調査をはじめ重要な知見の追加があついたので、ここにこの地域の調査をまとめて報告することにする。



右京七条一・二坊周辺調査位図

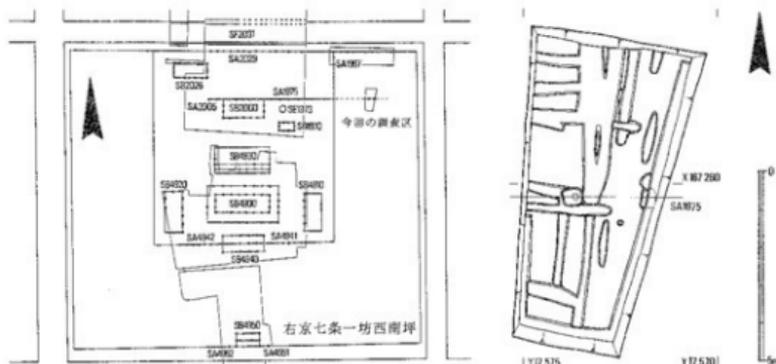
A 第58—17次調査

(1989年2月)

この調査は市営墓地の拡幅整備に伴う事前調査として、樫原市上飛驒町で行ったものである。調査地は藤原京右京七条一坊西南坪にあたる。従来行った第19次・48次調査の結果、坪内全体を占める大規模な邸宅遺構の存在が明らかとなっているが、邸宅内東辺部の様相はなお不明であった。第19次調査では邸宅内部を区画する東西塀(SA1975)の存在を確認しているが、この塀が邸宅東辺まで続くものか、あるいは途中で南北塀(SA1997)に取り付いて終わるのか不明であった。したがって今回調査では東西塀(SA1975)の東延長線上に調査区を設定した。

調査区は現在駐車場であり、厚い盛土があり、現地表下0.8mが旧水田面となる。基本層序は上から耕土・床土・茶褐色砂質土・灰色砂質土となる。

茶褐色砂質土上面で中世遺構の東西および南北方向の小溝多数を検出し、さらに掘り下げて灰色粗砂層上面(現地表下1.3m)で東西に並ぶ柱穴2個を検出した。掘形の大きさは一辺約50cmで、残存する深さは10cmほどである。西側の柱穴では掘形底に径18cmほどの柱の窪みが認められた。柱間は約1.8mである。柱穴の位置は東西塀(SA1975)のほぼ東延長線上にあるが、SA1975の柱間は平均2.4mであるのに対して狭いものであり、さらに周辺部での調査を要する。



第58—17次調査位置図・遺構配置図

B 第62次調査

(1989年7月～10月)

この調査は宅地造成に伴う事前調査として、榎原市高殿町で行ったものである。調査は、藤原京右京七条一坊西北坪の北半分にあたる約5200㎡に及ぶ対象地について、3ヶ年に分けて行うこととし、今回はその初年度として対象地の東半分(東西48m・南北53m)について実施したものである。

右京七条一坊は、これまでに藤原宮第17・19・23・40・49次調査などが実施され、京内では比較的坊内の状況が明らかになっている地域である。その成果によると、東南坪全域が日高山丘陵で占められ、東北坪との境(七条間路)については丘陵北裾に東西溝1条を通すだけの不完全な区分であることや、東北坪が著しい低湿地であることが確かめられている。これに対して西南坪は、坪の中軸線上に大規模な掘立柱建物を整然と配置した1坪全体を占有する邸宅跡であることが確認されており、右京七条一坊地内の利用状況が坪毎で一様でないことが明らかになっている。

今回の調査地である西北坪については、これまでに東側を西一坊坊間路西側溝に相当する南北溝とそれに並行する掘立柱塀で区画し(第17次)、南側を七条間路で区画した中に掘立柱建物が数棟確認されている(第19次)。しかし、検出した建物はいずれも小規模なものであって、宮に南接する六条大路に面した「一等地」であるこの坪の利用状況の解明は、藤原京内の宅地利用・占地の実態を追究する手がかりを与えるものと期待された。

遺構 基本的な層序は上から水田耕土・床土・灰褐色砂質土・褐色細砂・黄灰色粘質土であり、調査区の北半には褐色細砂の下に暗褐色粘土が北に厚く堆積している。黄灰色粘質土には弥生時代中期末から後期初頭の土器が、暗褐色粘土及び褐色細砂には古墳時代前期の土器が含まれており、これらは日高山丘陵から延びる微高地とその縁辺の谷地形とが、弥生時代以降幾度となく整地された結果形成されたものと考えられる。また、調査区の西南部は東半部の微高地をえぐる自然流路であり、褐色細砂の上に古墳時代前期の土器を含む青灰褐色

砂質土・青灰褐色粘質土・灰色粗砂が広がっている。さらに、流路の上層には飛鳥Ⅳの土器を含む青灰色粘土があり、藤原宮造営期の整地と考えられる。

遺構は古墳時代の包含層や自然流路の上面で検出し、竪穴住居・掘立柱建物・掘立柱塀・溝・土坑・井戸などがある。時代によって、古墳時代、藤原宮期直前から藤原宮期、藤原宮期以後に大別される。なお、藤原宮期以後の遺構には14世紀代の東西・南北方向の小溝、近世末以後の2種類の水抜き暗渠・野井戸などがあるが、ここでは記述・図示共に省略し、前2者について報告する。

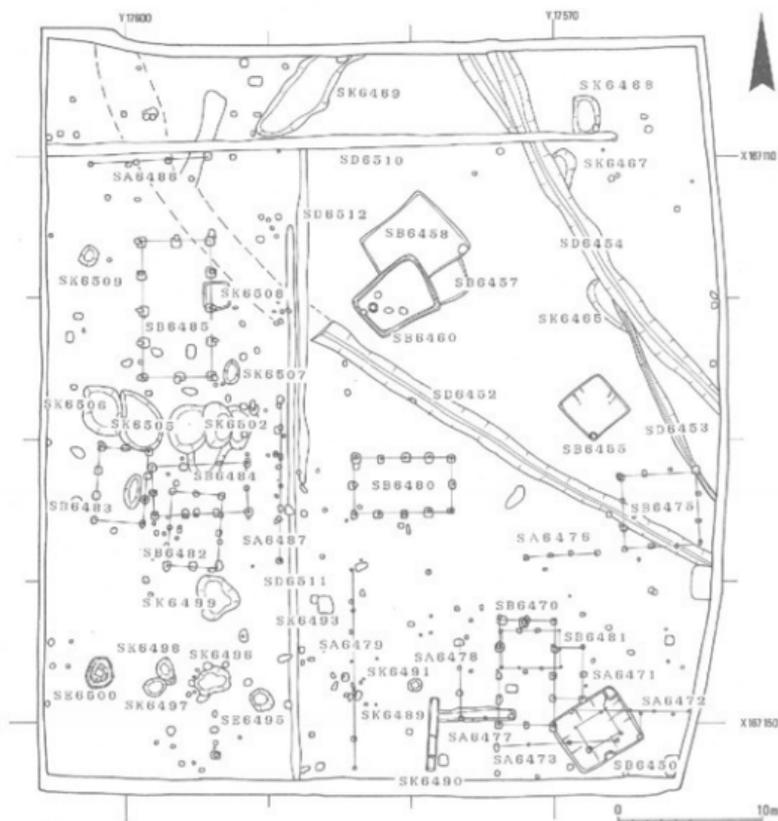
古墳時代の遺構 調査区北東部の微高地縁辺を西北流する3条の斜行溝、斜行溝の間と調査区東南部にある5棟の竪穴住居のほか、土坑8基がある。

東南隅で検出した竪穴住居SB6450は長辺5.3m・短辺4.4mの方形で、深さ0.3m。床面上に4本の柱穴(柱間2.5×2.0m)と貯蔵穴がある。床面には全体に薄い炭化物層があり、各辺に直交あるいは対角線上に延びる炭化材もある。壁周囲には断面形レ字形の溝がめぐり、炭層が溝外壁に沿って底にまで及ぶ。壁際を中心に暗青灰色粗砂質土が堆積し、くぼみ状になった中央部は黄色粘土で埋め立てている。遺存状況は比較的良好だが、カマドは無く、堆積土から小型丸底壺・甕などが少量出土した。

竪穴住居SB6455は一辺3.6mの方形で深さ0.15mほどと遺存状況は悪い。床面に炭化した屋根あるいは壁材と思われる炭化物が遺存したことから焼失住居と考えられる。床面では柱穴が確認されず、南隅の貯蔵穴には半ば落ち込んだ状況で土師器壺・甕があり、周辺から小型壺・高杯が出土した。貯蔵穴の底には蓋板の可能性がある板状の木材があり、これは炭化していない。壁周辺には部分的に焼土が遺存するがカマドは確認されなかった。

調査区中央の3基の竪穴住居SB6457・SB6458・SB6460は遺存状況が悪くいずれも柱穴は確認できない。最も新しいSB6460は5.2m×4.2mの長方形に壁溝がめぐり、溝底と床面に焼土が、西よりにある貯蔵穴に炭化物があり焼失住居である。SB6457・6458にも焼上の細粒が含まれており焼失した可能性があるが確証はない。斜行溝SD6454は横断面V字形の素掘り溝で中央が幅狭く1段深くなっている。上層に暗灰色細砂が下層には灰色粗砂が堆積する。溝

の中央が1段深い構造は斜行小溝 SD 6453や斜行大溝 SD 6452についても同様である。SD 6454の上層には、SB 6455に近い長さ6 m分について著しい炭化物層が認められ、完形の土師器壺・甕・高杯などが多く出土した。溝の廃絶と住居の廃絶が同時であったことが伺われる。SD 6452にも少ないながら炭化物層が認められ、SB 6455は2本の斜行溝に挟まれていたものと推定される。斜行小溝 SD 6453はSD 6454と重複し、より古い溝であるが、出土土器に大きな違いは認められず、相前後した時期に掘り直されたものと考えられる。



第62次調査遺構配置図(1:400)

土坑SK6463～6469は微高地上を中心に散在し、いずれも浅く不整形である。出土土器には小型丸底壺・高杯・甕などがあるが、斜行溝や竪穴住居よりもやや古い時代の土器である。

藤原宮直前から藤原宮期の遺構 掘立柱建物8棟・掘立柱塀10条・素掘り溝3条・井戸2基・土坑15基などがある。これらは造営の方位と配置、出土遺物からA～Dの4群に細別される。

A群は北で西に約4°振れる方位を持った掘立柱建物SB6475・SB6484、掘立柱塀SA6473・SA6474・SA6486が属す。柱穴埋土に黄褐色山土が混じる点に特徴があるが、柱穴も小さく建物は散在的である。この一群に属す他の遺構については明らかでないが、調査区北端の東西溝SD6510は黄褐色山土混じりの粘土で丁寧に埋められている点で共通する特徴を持つ。振れが西へ約1°30′と小さく、むしろ、藤原宮期の遺構の振れに近い点で問題が残るが、わずかに出土した土器の最新のものが飛鳥IVであることからA群と考えておきたい。また、東西溝SD6510と同じ振れをもつ調査区南端中央の浅い東西溝状土坑SK6479も、飛鳥IVの土器が含まれることからこれに含める。

B群は北で東へ約4°振れる一群で、掘立柱建物SB6482・SB6483がある。ほぼ同規模の建物を柱筋を建物半分だけずらせて隣接平行して配置する。いずれも調査区の西南部に広がる飛鳥IVの土器を含む整地土上で検出した。B群に伴う遺構はわずかで、調査区南端中央の溝状土坑SK6490が、ほぼ同じ振れである。土坑はほぼ垂直に掘られ南半が一段深くなっている。土坑の上層には灰の層があり、下層からは漆を入れた小型壺や飛鳥Vの土器などが出土した。形と遺物から器物製作工房に関わる土坑と考えられる。藤原宮・京造営に関わる遺構群と理解しておきたい。

C群は北で東に約40°振れる一群で、掘立柱建物SB6470・掘立柱塀SA6471・SA6472・SA6487がこれに属し、柱穴埋土に木片が含まれる特徴がある。SA6471は南北棟建物SB6470の東2.1mに柱筋を揃えた南北塀で、SB6470と一体の遺構である可能性が高い。調査区中央の南北溝SD6512はSA6487の東1.6mを一部併走する浅い溝で、7世紀後半の土器が出土したが瓦は含まない。D

群の遺構であるSD6511とはほぼ同じ位置にあり、両群が近接した時期の造り替えであることを伺わせる。

D群は北で西へ約30' 振れる一群で、掘立柱建物SB6480・6481・6485、掘立柱塀SA6477・6478・6479などがこれに属す。同じ振れを持つ南北溝SD6511には藤原宮の瓦が含まれ、建物が調査区西南部に集中する瓦を含む土坑群と重複しないことは、建物方位が藤原宮の造営方位と類似することと共に、この一群が藤原宮の時期の遺構である事を示していよう。D群の遺構は、右京七条一坊西北坪の東 $\frac{1}{2}$ に位置する南北溝SD6511によって区切られ、東には東西棟建物SB6480と小規模な東西棟建物SB6481を配置する。SB6481の南と西は鍵の手に連なる掘立柱塀SA6477・SA6478で囲み、その西に南北塀SA6479を配置する。南北溝SD6511の西は北よりに南北棟建物SB6485を配し、南には井戸SE6500・SE6495のほか土坑群が営まれる。SB6485とSB6480・SA6479とは南北溝SD6511から等距離に配置されており、溝で区分されてはいるが深い関わりを持つ建物と考えられる。井戸SE6500は大きく壊されていたが、底に円礫を詰めその上に1辺55cmの横板組の井戸枠をのせている。堆積土中には飛鳥Vの土器や独楽などの木製品、木簡が含まれる。木簡はほとんどが削り屑の細片で「□年六十三」のほかは釈読できない。井戸SE6495も井戸枠は完全に壊され、四隅に立てた細い棒が残る。抜取り土から飛鳥Vの土器が出土し、中に井戸の北約30mにある土坑の土器と接合する破片があり、南北溝SD6511の西側でのD群の遺構が有機的な関係を持つことを示している。

遺物 比較的多量の土器のほかに、瓦・木製品・土製品・石製品がある。土器には、土師器・須恵器があり、整理途中であるが、古墳時代の斜行溝・堅穴住居の土器、7世紀の土坑・井戸出土土器にまとまりがある。瓦は調査区の西南部の整地土上や南北溝SD6512・井戸SE6500から少量出土した。丸瓦・平瓦の他に軒丸瓦6274型式があるが、いずれも近在のH高山瓦窯で焼かれたもので坪内で使用された瓦ではない。その他石製品には砥石や弥生時代の石鏃が、土製品には鞆羽口・土馬がある。

まとめ 今回の調査地では、宮南辺の東西大路（六条大路）の南側溝及びその南の右京七条一坊西北坪の遺構が確認されると期待された。西北坪内については、いくつかの小規模な建物を検出し、井戸、土坑など生活の跡を確認することができた。第19次調査で明らかになっている2棟の掘立柱建物と1条の塀と共に、西北坪が西南坪とは異なる利用形態を持つことを確認したといえよう。しかし、六条大路南側溝と坪北を限る掘立柱塀については検出されず、課題として残されることとなった。以下、調査の成果と残された課題についてまとめておく。

1 弥生時代の四分遺跡の近辺で初めて古墳時代の住居を確認したことは大きな成果である。竪穴住居は、出土土器の特色からすれば、直線距離1km足らずの指呼の間にあり、最も近在の古墳時代集落である藤原宮東南部の香具山西堀の集落とほぼ同時代の集落と見られる。しかし、その集落をはじめ、これまでに飛鳥川流域で確認されている集落はいずれもカマドをもった5世紀後半代以後の竪穴住居で構成されており、カマドをもたず、須恵器を伴わない今回の竪穴住居とはかなり様相が異なっている。その違いの理由について、今回の竪穴住居がこの地区の集落に須恵器やカマドが取り入れられる直前の時期の遺構とするのか、すでにカマドをもつ集落と系譜を異にする集落と考えるか、カマドを取り入れた段階で香具山西堀へ移ったとするかは、古墳時代の飛鳥藤原地域を理解する上で興味深い問題であり、詳細な土器の検討を待って果たしたい。

2 六条大路南側溝については、想定地に近い調査区北端の東西溝SD6510を充てる見解があるが、それにはいくつかの問題点がある。一つには、六条大路については調査区の西約100mの地点での調査（第29—6次）で検出されており、その南側溝を藤原宮の国土方眼に対する振れで東に延長すると、調査区付近ではSD6510の北3mの位置を通る点である。今仮に、SD6510と先の六条大路南側溝とを結び北で東に傾き、宮大垣や主要遺構、他の条坊遺構の振れと大きく異なる。さらに東西溝は北で西に約 $1^{\circ}30'$ 振れる方位を持ち、彼我を直線で結ぶことはできないのである。なお、先の検出地点が西一坊大路の西側であることから、西一坊大路を境に西と東とで道幅・傾きが異なることも考えられようが宮正面の幹線道路である六条大路であるだけに躊躇せざるを得ない。

今一つには出土土器の問題がある。通常、条坊側溝には飛鳥Ⅲから飛鳥Ⅴの土器が含まれるが、東西溝SD6510の土器は極わずかで、しかも飛鳥Ⅳの上器が最新であり、藤原京の時代を通じて機能した溝としては奇妙である。溝の北側に飛鳥Ⅴの土器を含む小規模な土坑が存在することも、東西溝が道路側溝であるとすれば路面敷上に位置することになる。これらの諸点を踏まえて、六条大路南側溝については東西溝SD6510の性格を含めて、この坪の中軸線上あるいは西一坊大路側溝との関係が明らかになった段階で再考したい。

3 西北坪外周については、坪東側で掘立柱塀が確認されているものの七条条間路に面した南側では検出されていない。今回、宮南の六条大路に面する北側でも検出されなかったことから、この坪は塀で囲まれていないと考えられる。1坪を占める邸宅である西南坪は塀で閉じられており、外周を塀で囲むか否かは坪内の建物群の内容と関わり、坪の性格を示すものといえよう。

4 藤原京の時期の遺構については、北で西にわずかに振れる一群がそれであるとされるが、南北溝SD6511は坪の東3分の1にあり、これによって坪内は分割されているとみられる。東の区画の東西棟建物SB6480は、東南部の小規模な東西棟SB6481を囲む鍵形の塀と東妻柱が揃い、西妻柱に揃う南北塀で区画された建物前面にはそれぞれ飛鳥Ⅴの土器を含む土坑を配する。しかも、SB6480は南北溝SD6511を挟んで中央の区画の中心的建物である南北棟建物SB6485と等距離にあり、散在すると見える小規模な建物も、ある程度の規格と配置を持つことを示している。しかし、建物群の規格と配置からだけでは、その性格を推定するにはいならず、小規模建物群及び坪の性格については、今後の検討課題である。西側の調査を待って再考したい。

C 第58—22次調査

(1989年3月)

この調査は下水道敷設に伴う事前調査として、橿原市上飛騨町で行ったものである。調査地は藤原京右京七条一坊西北坪にあたる。東西20m・南北3mの調査区を設けて調査したが、後世の削平が著しく明確な遺構は確認できなかった。

D 第60-14次調査

(1989年12月～1990年1月)

この調査は宅地造成に伴う事前調査として、橿原市飛騨町で行ったものである。調査地は藤原京右京七条二坊西南坪にあたる。調査地周辺では数次の調査が行われているが、すぐ西を流れる飛鳥川の氾濫のためか、遺構の残存状況は場所により異なる。本調査地の北に接する第45-12次調査(概報17)では、藤原宮期の溝SD4700・奈良時代の土坑・弥生時代の土坑などを検出したが、本調査地の南に接する第60-7次調査では遺構面は飛鳥川の氾濫で流されていた。

調査は、当初東西20m・南北6mの調査区を設定して始めたが、遺構の残存状況により西南部に新たに東西10m・南北10mの拡張区を設けた。

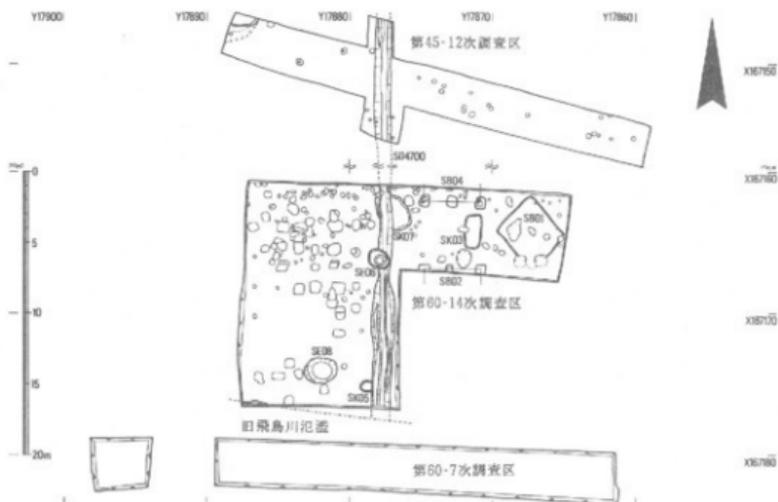
遺構 遺構は耕土・床土・遺物包含層の下の黄褐色粘土層の上面で検出した。検出した主要な遺構は、掘立柱建物・溝・土坑・竪穴住居跡などであり、それらの時期は弥生時代から中世にわたる。

弥生時代の遺構は、後期の土坑(SK03・05・07)と、調査区東辺部で検出した数棟の切り合った状態の竪穴住居跡がある。住居跡は削平のため床面部を残すだけであり、SB01一棟分のプランを明らかにするとどまった。

藤原宮期の遺構は、建物2棟・溝・土坑・井戸などがある。建物SB04は南北棟で、調査区東北部の北壁沿いに南妻を1間分確認した。柱間は2m等間である。建物SB02はSB01の南にある南北棟で、北妻を1間分確認した。柱間は2m等間である。調査区ほぼ中央の北流する南北溝SD4700は、16m分確認し、最大幅1.7mである。この溝は第45-12次調査でも検出され、南北30m分を確認した事になる。調査区西北部の多数の小土坑は、建物・堀などにはまともならず、掘形も不整形で浅いため柱掘形とは考えがたい。調査区南部の井戸SE08は、検出面での掘形の径が2mを越すが、井戸枠はすべて抜き取られていた。

中世の遺構は、小柱穴・井戸がある。小柱穴は建物にはまともならない。井戸SE06は調査区の中央でSD4700と重複しており、掘形の径1m弱の小規模な井戸である。本来石組であったと考えられるが、石はすべて抜き取られていた。

遺物 遺物には土器(弥生土器・土師器・須恵器・瓦器)・土製品・瓦類がある。こ



第60-7・14次調査遺構配置図(1:400)

れらの中でSD4700から出土した土馬と、小柱穴から出土した本薬師寺所用の軒平瓦6641Kが注目される。

まとめ 本調査で確認した最大の成果は、坪内の分割方法についての資料が得られた点である。SD4700は30m以上にわたって延びており、その位置は概ね坪の東西二等分線にあたる。藤原京内の坪の分割方法が明確となっている例は少なく、右京七条二坊東北坪を東西に二等分すると考えられる塀が検出されている程度であった。なお、第60-7次調査で検出した旧飛鳥川の氾濫の落ち込みを調査区の西南隅で確認することができた。

E 第60-7次調査

(1989年6月)

この調査は道路整備に伴う事前調査として、橿原市飛騨町で行ったものである。調査地は第60-14次調査区の南側で、東西27m・南北3mの調査区1ヶ所と3m四方の調査区2ヶ所を設けて調査したが、飛鳥川の氾濫が著しく、遺構は確認できなかった。遺物は極めて少なく、13世紀の中国製白磁碗が1片ある。

6 右京十条四坊の調査 (第60-3次)

(1989年5月～6月)

この調査は関西電力の変電所建設に伴う事前調査として、橿原市栄和町で行ったものである。調査地は藤原京右京十条四坊にあたり、十条条間路および東南坪と東北坪の一部がかかっていることが予想された。このため条坊遺構の検出と坪内の土地利用状況の把握を主な目的として、東西・南北とも21mの調査区を設けて調査した。さらにこの調査区内の一部を掘り下げて調査したところ、弥生時代後期に属するとみられる水田を検出した。上層と下層とで、遺構の性格が異なるので、二つに分けて調査結果を述べることにする。

上層遺構

基本的な層序は上から順に、礫混淡褐色土(盛土)・暗灰色土(耕土)・緑灰色土(床土)・淡褐色細砂(古墳時代包含層)となる。遺構検出は淡褐色細砂の上層で行った。

検出した遺構には、掘立柱建物・掘立柱塀・井戸・河川などがあり、これらは藤原宮期と古墳時代に属す。

藤原宮期の遺構 掘立柱建物1棟・掘立柱塀4条・井戸2基がある。

SB2410は、調査区の北西隅にかかった建物である。柱間寸法は約1.75m。柱掘形は一辺0.8mで方形を呈す。深さは現状で0.5m。どの柱穴も柱は抜き取られていたが、西端の柱穴の底で、35×20×5cmの礎板がみつかった。

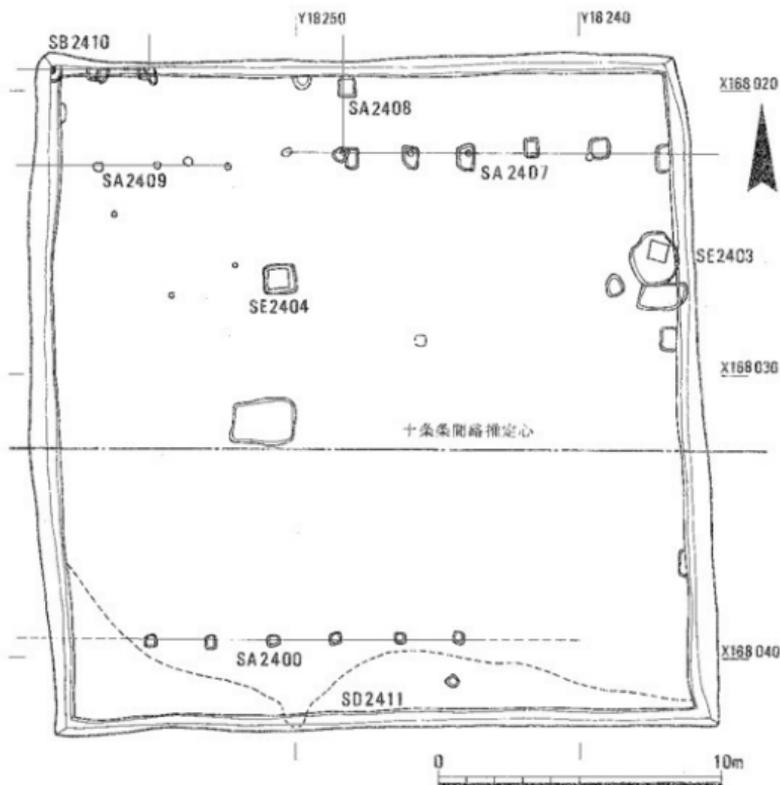
SA2400は、調査区南端にある東西に伸びる掘立柱塀である。5間分(11.0m)検出した。柱間寸法は2.2m前後である。柱掘形は一辺約0.5mで方形を呈す。深さは現状で0.05m～0.3mで、残り具合からみて本来は東西にさらに伸びていたものと思われる。

SA2407は、北東部で東西に伸びる掘立柱塀である。6間分(13.7m)検出した。柱間寸法は2.3m前後である。柱掘形は一辺0.5m～1.0mで、方形を呈する。ただし西端の柱穴は、柱のあたり部分しか痕跡をとどめていない。深さは現状で、0.1m～0.3mで、西へいくほど残り具合が悪い。

SA2408は、塀SA2407の西第2柱穴に取り付く南北に伸びる掘立柱塀である。柱掘形は、0.4m~0.6mで、長方形を呈する。

SA2409は、建物SB2410の南約3.5mにある東西塀である。2間分(4.6m)を検出した。柱掘形は後世の削平で失われており、柱の不等沈下部分をとどめているにすぎない。

SE2403は、東端で検出した縦板組井戸である。掘形上端は径1.5mほどの不整形円で、底部は一辺0.8m内外の方形となる。深さは現状で1.75m。内部には、底面に拳大の礫を敷並べた上に、一辺0.7m前後の井戸枠を乗せていた。井戸



第60—3次調査上層遺構配置図(1:200)

枠には、15～40×175(以上)×30 cmの板材を立て並べ、底から0.45 mと1.45 mの2箇所に70×5×20 cmの横棧を渡して固定する。なお少くとも西側板南端と東側板北端の井戸枠外には、先端を尖らせた板状の木製品6点(最大117.5×4.5×0.3 cm、最小13×3.5×0.2 cm)が立てて添えてあった。また井戸底で、藤原宮期に属する完形の土師器甕・須恵器平瓶、刀子や骨片が出土している。

SE2404は、北半中央部にある横板組井戸である。掘形の上端は一辺1.0 m内外で方形を呈する。深さは現状で約0.5 m。内部には30×75×1.5 cm内外の板を四方に並べて井戸枠とする。なお最下段の板材には木口相欠きと釘穴が、これより上段の板材には釘穴が残っていたので、本来70×75以上×30 cmの直方体の箱であって、これを井戸枠に転用したことがわかる。なおこの井戸からも藤原宮期に属する土師器・須恵器の破片が出土した。

古墳時代の遺構 SD2411は南端をかすめて流れる河川である。調査区内ではその北岸を検出したにすぎない。堆積土は卵大の礫が多量に混じった褐色砂で、流れの相当に速い時の堆積土のようである。この堆積土からは、弥生時代後期から古墳時代前期の土器が出土した。これらの土器に伴出して琴形木製品の共鳴槽の一部が出土した。摩滅のあり方からみて、この木製品は古墳時代前期に属するものとみられる。

下層遺構

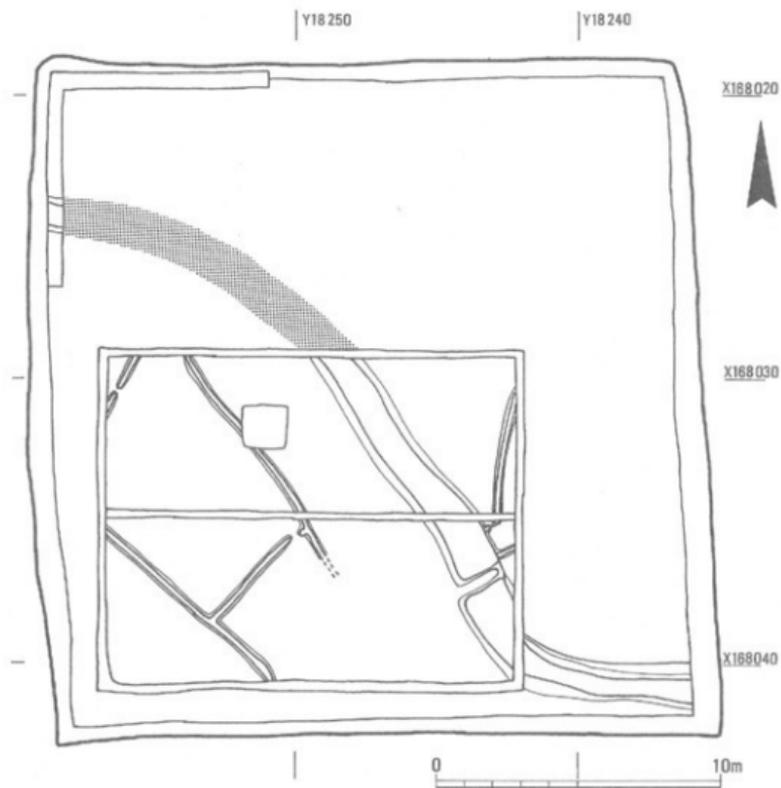
調査区南半部に東西15 m・南北12 mのトレンチ、さらに南東隅と北東隅にトレンチを設けて調査した。層序は、淡褐色砂の下が、上から順に淡灰色粘質土(古墳時代)・淡灰褐色細砂・淡灰色細砂・暗灰色粘質土(弥生時代後期水田耕土)・青灰色細砂・暗青灰色粘質土・淡青灰色細砂・青灰色粘質土となる。検出した水田は、大群の築成土から出土した土器などから、弥生時代後期に所属するとみてよい。

水田は調査区全面に広がっており、少なくとも8面はある。大きさのわかるものは、8.0×6.0 m前後であった。地形はゆるやかに傾斜し、基本的に南東側が高く、北西側が低い。高低差は、15 mで13 cmであった。畦には、幅と高さで大小2種ある。大畦は、上端幅が約1.0 m、下端幅が約1.6 m、高さが約0.3 m

である。他方小畔は幅約0.3m、高さは約0.1mであった。傾斜面の断面形はカマボコ状を呈していた。水口は、大畔で1箇所、小畔で等高線に沿うものそれぞれ1箇所ずつあった。なお大畔に接した西と東の水田面の高低差は、4.5cmである。また水田面には、足跡や稲株の痕跡はなかった。

第60—3次調査下層遺構の植物遺体

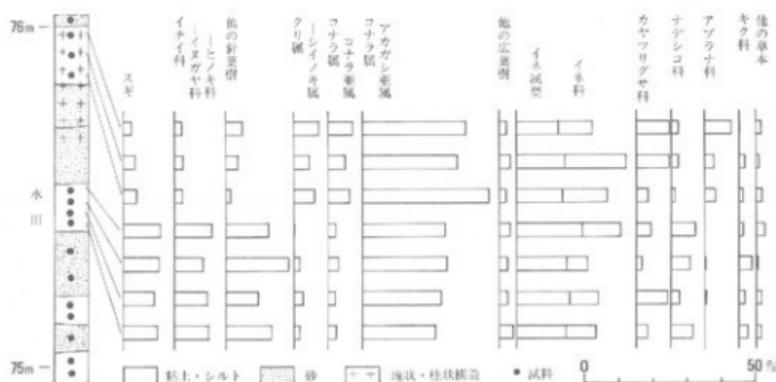
試料は藤原京下層の水田遺構（弥生時代後期）堆積物を含む断面で採取した。水田遺構の堆積物である暗灰色粘質土は腐植に富むシルトおよび粘土より成る。



第60—3次調査下層遺構配置図（1：300）

暗灰色粘質土層とその下位層は水田土壌化作用による断面構造がみられず、下位層は青灰色を呈する。上位の淡灰色粘質土（シルト）と砂層は、表面水型土壌すなわち乾田か半乾田で生成された塊状ないし柱状の断面形態がみられる。花粉遺体の検出された層準の主要花粉遺体組成を下方の図に示す。まず、暗灰色粘質土層において、樹木花粉コナラ属アカガシ亜属が優占しスギ・イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科などの針葉樹もやや多く出現する。周辺には針葉樹の混じる照葉樹林が分布していた。草本花粉ではイネ属型を多く含むイネ科が優占し、カヤツリグサ科・ナデシコ科・キク科などが伴われる。また、果種子では特に水田雑草であるタカサブロウ・ホタルイ属・クサネムが目立って検出された。乾田や畑を好む草本が比較的多いことや湿田を好む雑草がほとんど出現しないことを考慮すると、暗灰色粘質土層より成る水田遺構は乾田か半乾田であったとみられる。これは前述の断面形態が地下水型土壌すなわち湿田を示すことと矛盾するが、埋沈後の地下水の作用により水田土壌化作用の特徴が消し去られたものと推定される。淡灰色粘質土層においては樹木花粉では針葉樹の出現率が低くなり、草本花粉ではアブラナ科の出現率が高くなる。アブラナ科は多くの栽培植物を含み、水田に加え集約的な畑作が示唆できよう。

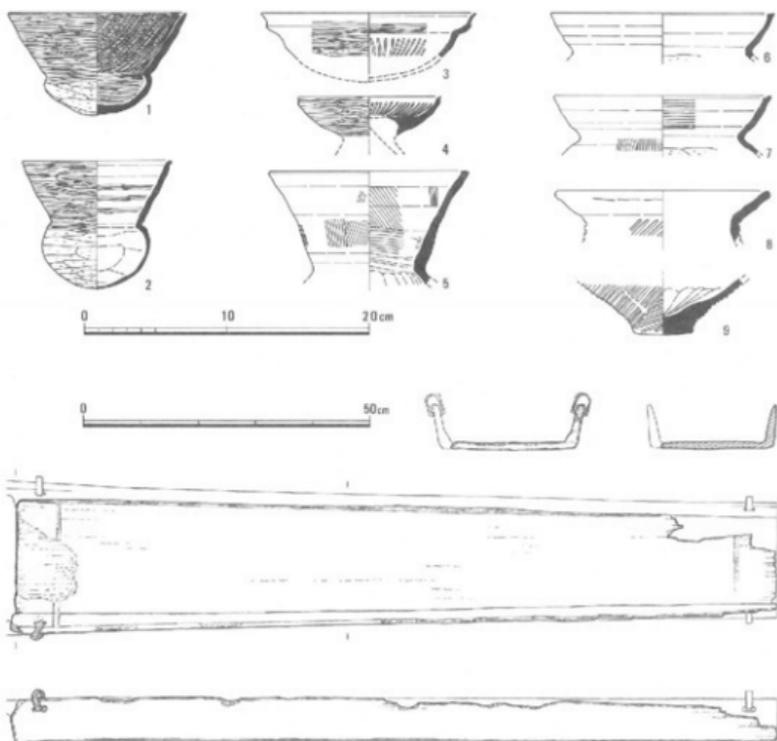
(天理大学附属天理参考館 金原正明)



第60-3次調査下層遺構出土主要花粉組成図

まとめ

今回の調査において、上層で藤原宮期に属する建物や井戸などを検出し、下層では弥生時代後期に属するとみられる水田を確認した。上層では、調査区を横断する十条条間路の検出が期待されたが、これをみつけることはできなかった。ただし第54—8次調査（概報18）で検出した九条大路の南側溝とみられる遺構と1989年度の奈良県の調査で検出した十条大路の位置から、十条条間路を割り付けると、今回検出した遺構はこれにきわめて整合する。また花粉分析の成果と下層の遺構のあり方から、周辺の環境の変化の一端を解明するための糸口を得た。今後の周辺地域での調査が待たれる。



SD2411出土土器(1:4)・竪(1:10)

7 西二坊大路の調査 (第60-8次)

(1989年7月～8月)

この調査は住宅新築に伴う事前調査として、樫原市四分町で行ったものである。調査地は鸛栖神社の南方約120m、飛鳥川堤防のすぐ東側の水田で、藤原京左京六条三坊東南坪東側の西二坊大路推定地にあたる。このため、西二坊大路の検出を目的として、東西29.5m・南北6mの調査区を設定した。なお、当地の東北方約50mにある第34次調査地(概報12)では、藤原宮西南隅の大垣・内濠を検出している。

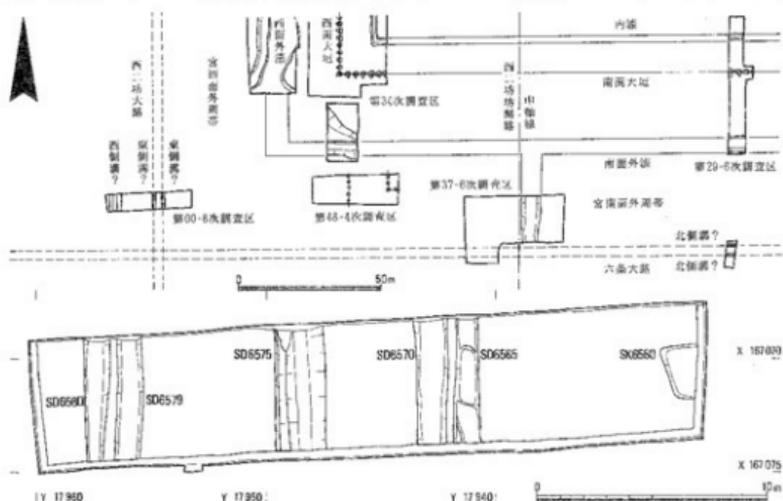
遺構 調査区の層序は、上から耕土・床土・暗灰褐色砂質土(平安時代包含層)・暗褐色砂質土(弥生時代包含層)・灰褐色砂質土(地山)があり、遺構は暗褐色砂質土の上面で検出した。調査前には、飛鳥川の氾濫で藤原宮期の遺構が削平されている可能性を考えていたが、遺構の残存状態は比較的良好であった。

検出した主な遺構は、藤原宮期の溝2条、平安時代後半の溝3条・土坑1基である。SD6570・6565は藤原宮期に属す。SD6570は幅0.7～1.3m・深さ0.3mの素掘り南北溝で、堆積土は3層あり、7世紀代の土師器・須恵器が出土した。SD6565は幅0.9～1.2m・深さ0.14～0.3mの素掘り南北溝で、堆積土は2層ある。堆積土から遺物は出土しなかったが、SD6570の堆積土と類似することから、藤原宮期と推定する。

SD6575・6579・6580・SK6560は平安時代後半に属す。SD6575は幅0.6～0.65mの素掘り南北溝で、堆積層は2層あり、10世紀の土師器・11世紀の瓦器などが出土した。SD6579は幅1～1.1m・深さ0.3～0.4mの素掘り南北溝で、堆積土は2層あり、中世の土師器・11世紀の瓦器などが出土した。SD6580は幅0.7～1.2m・深さ0.2～0.25mの素掘り南北溝で、堆積層は3層あり、11世紀の土師器が出土した。SK6560は方形の土坑で、南北長2.4m・東西長2m以上・深さ0.25mである。埋土から土師器・須恵器・11～12世紀の瓦器がまとめて出土した。このほか、縦横に走る中世の素掘り細溝や包含層から、土師器・須恵器・11～13世紀の瓦器が比較的多く出土している。

まとめ 当調査の目的は西二坊大路の検出であった。大路の東側溝想定位置付近にはSD6570・6565がある。SD6570が藤原宮期の遺構と見てよいのに対し、SD6565は出土遺物から時期を決定することができない。したがって、SD6570を東側溝とすべきかも知れない。しかし当調査地区で平安時代になる遺構からは少なからず瓦器が出土するため、それを全く含まぬSD6565を新しいと断定することもできない。このため、西二坊大路東側溝の確定は今後の課題としておく。なお東側溝は第54—18次調査(概報18)でも検出した。その成果を用いて東側溝の振れを求めると、東側溝がSD6565であれば北で西に $1^{\circ}3'45''$ 、SD6570であれば北で西に $1^{\circ}13'36''$ の振れとなり、従来知られていた左京域での条坊の振れ(20~40'前後)より大きくなる。したがって、第54—18次調査で検出した溝が東側溝であるのかも、今後の検討を要する。

西側溝の想定位置付近にはSD6579・6580があるが、いずれも平安時代後半の溝である。西側溝は削平された可能性が大きいが、SD6579・6580のどちらかと全く重複して消滅したとも考えられる。かりに後者の考えに立ち西二坊大路の幅員を求めよう。東西両側溝の位置について候補が二つずつあるので、



第60—8次調査位置図・遺構配置図(1:250)

四つの組み合わせができる。(6565-6579、6565-6580、6570-6579、6570-6580)。それぞれについて幅員(溝心々)を求めると、14.7・16.1・13.2・14.6mとなる。また道路心と宮西面大垣との距離を求めると、順に69.70m(196大尺)・70.40m(198大尺)・70.50m(198大尺)・71.20m(200大尺)となる。また、西側溝は第54次調査(概報18)でも検出している。その成果を用いて西側溝の振れを求めると、西側溝がSD6579の位置であれば北で西に $0^{\circ}41'31''$ 、SD6580の位置であれば北で西に $0^{\circ}37'17''$ の振れとなる。繰り返すまでもなくSD6579・6580は西側溝そのものではないから、以上の数値はあくまで参考値である。

今回検出した西二坊大路東側溝(SD6565ないし6570)と第34次調査で検出した藤原宮西面大垣・外濠との位置関係を調べよう。西面大垣の南延長線とSD6565・6570との心々距離を求めると、それぞれ62.35m(210小尺)・63.85m(215小尺)となる。また、西面外周帯の幅を西面外濠とSD6565・6570との心々距離として求めると、それぞれ39.9m(135小尺)・41.4m(140小尺)となる。これらの数値を、第29-6・29-7次調査で判明した宮南面の状況(概報11)と比較すると、南面大垣と六条大路北側溝との距離が56.75m(190小尺)ないし60.75m(205小尺)で、西面大垣と西二坊大路東側溝との距離より小さい。また南面外周帯の幅が32mないし36mであるから、西面外周帯の方がかなり幅が広いことになる。これは六条大路路心と南面大垣との距離が70.8m(200大尺)ないし72.55m(206大尺)で西面大垣と西二坊大路路心との推定距離と大差ないことからみて、西二坊大路が六条大路より狭いことに起因する。

当調査区では平安時代後半の遺構・遺物が多かった。付近に集落があったと考えられる。SD6575は比較的規模が大きい溝で、集落の環濠の可能性がある。中世集落の環濠は、27-6次(概報10)・浄御原推定地(概報11)・41-15次(概報16)・47次(概報17)でも検出しており、廃都後の土地利用の重要な資料である。また第34次(概報12)・36次(概報14)・37次(概報14)で、宮西面外濠が11世紀頃まで存続していたと想定されており、この地域の平安時代後半の景観については、今後の調査の進展を待って検討したい。

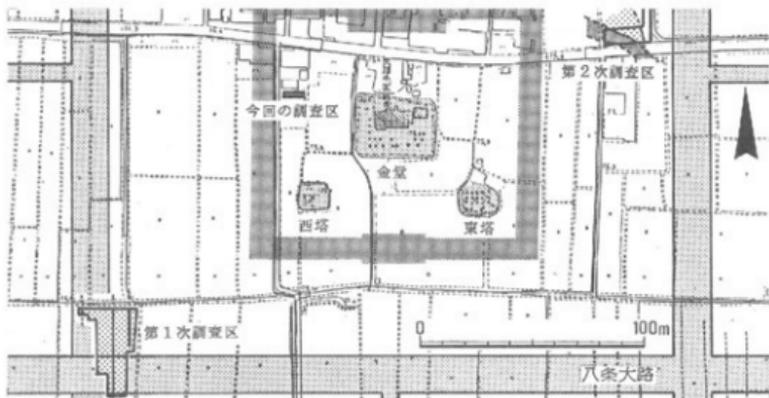
8 本薬師寺の調査 (1989-1次)

(1989年2月)

この調査は個人住宅の車庫建設に伴う事前調査として、橿原市城殿町で行ったものである。調査地は、本薬師寺金堂跡の西端から西へ約30mの所にある。本薬師寺の伽藍規模が平城京薬師寺とほぼ等しいと仮定すれば、西面回廊のすぐ東側にあたる。

調査は、東西約8.8m・南北約2mの調査区を設けて行った。調査区の層序は、上から現代置土・耕土・床土・灰褐色砂質土・褐灰色砂質土(弥生時代包含層)・灰緑色細砂質土(地山)があり、遺構は褐灰色砂質土上面で検出した。検出した遺構は、幅20～60cmの南北溝11条・東西溝1条で、いずれも中世のものである。本薬師寺の境内舗装面などは検出できなかった。

今回の遺構検出面は、西塔土壇上に現存する心礎の上面から約2.3m下がった所にある。平城京薬師寺西塔の復原基壇高(1.4m)や飛鳥地域主要寺院の塔の復原基壇高(奥山・久米寺1.45m、川原寺1.5m、山田寺1.8m)を参考にすれば、調査地周辺において、本薬師寺の伽藍に伴う境内面は削平されて残っていないと考えられる。



本薬師寺周辺図 (1:2500)

9 その他の調査

A 第60—4次調査

(1989年5月)

この調査は市道建設に伴う事前調査として、樫原市下八釣町で行ったものである。調査地は当調査部庁舎敷の東北に接する位置で、香具山の西裾を北流する中の川の西岸にあたる。東北方の膳夫寺方面に向かって緩やかに傾斜する。南北18.1m・東西2.1mの調査区を設定して調査した。

南半では、床土の下の瓦器を含む灰褐色砂質土を除去すると、すぐに暗青灰色粘質土の地山となり、北へ向かって徐々に下がる。北半では、地山の上に赤褐色砂質土がかぶり、北端4mほどのところでこの層を切って北へ広がる沼状の掘り込みとなることを確認した。遺物は出土せず、年代は決め難い。

B 第60—9次調査

(1989年8月)

この調査は住宅新築に伴う事前調査として、樫原市木之本町で行ったものである。調査地は藤原京左京七条三坊東南坪と西南坪の間にあたり、東三坊坊間路の存在が予想された。坊間路の検出を目的として東西約20m・南北約4mの調査区を設定した。調査区の層序は耕土直下に地山のバラス層があり、遺構検出はバラス層上面で行った。検出した遺構は南北溝1条・土坑1基のほか、小溝数条である。南北溝SD205は幅約4m・深さ約0.6mで、北で若干東に振れる。7世紀後半～平安時代までの土師器・須恵器が少量出土した。SD205以外の遺構はすべて中世に属す。当調査区の北約250mの第53次調査区(概報18)で検出した東一坊坊間路は確認できなかった。東三坊坊間路については、第60—6次調査(概報20)で一条大路との交差点を検出した。第53・60—6次調査の成果によって、東三坊坊間路の振れは北で西に $0^{\circ}6'42''$ と判明している。この振れで第53次調査区から南へ坊間路を延長し、今調査区での想定位置を求めると、調査区西端より4.8mに路心、SD205のすぐ西側に東側溝がくる。

C 第58—21次調査

(1989年3月)

この調査は駐車場造成に伴う事前調査として、橿原市城殿町で行ったものである。調査地は藤原京左京七条四坊西南坪にあたり、申請地の南端に七条大路北側溝が通ると推定された。南北8m・西南3mの調査区を設定し、南端で1㎡分拡張した。遺構は水田面下0.4mの茶褐色粘質土上面で検出し、東西溝1条のほかに中世の水田関係南北小溝1条がある。東西溝は、幅0.4m・深さ0.1mの素掘りで、埋土の暗灰褐色粘土には藤原宮期の土器がわずかに含まれる。

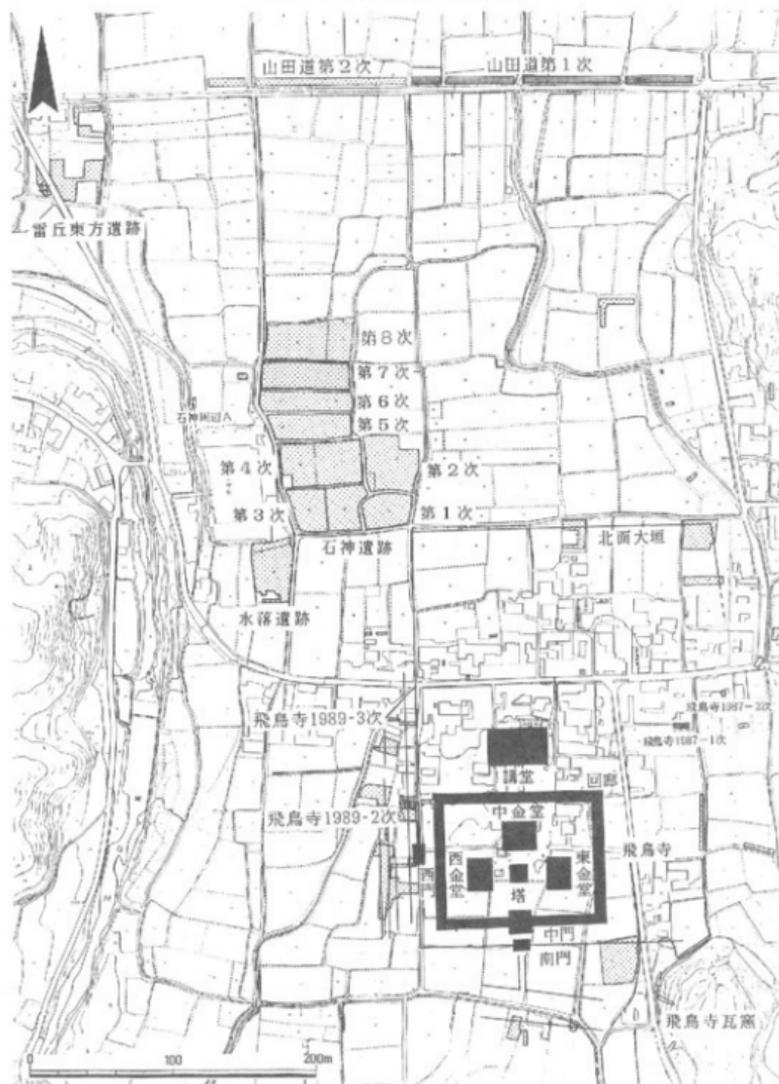
東西溝は、七条大路北側溝の推定線上に近く、北側溝にあたる可能性が高いが、遺構・遺物ともに断片的である。その当否は今後の調査結果を待ちたい。

なお、申請地の東辺での断面観察の結果では、西南坪内にあたる調査区の北方には自然流路状の灰色砂層が広がり、遺構は確認されなかった。



左京六条三坊・七条三坊周辺調査位置図(1:5000)

Ⅲ 飛鳥地域の調査



飛鳥寺周辺調査位置図 (1:4000)

1 飛鳥寺の調査 (1989-1・2・3次)

A 1989-2次調査

(1989年10月～11月)

この調査は史跡飛鳥寺跡の現状変更に伴う事前調査として、高市郡明日香村で行ったものである。調査地は飛鳥寺西面大垣の西に接し、西門の北30mの位置にあたる。東西10m・南北10mの調査区を設定した。調査区の南半部は1969年に実施された奈良県教育委員会による飛鳥京跡第18次調査ですでに調査が行われており、調査区の中央部に幅約1mで底に石敷をもつ石組溝SD6885が検出されていた。

また、当調査地周辺の飛鳥寺西辺部では、当研究所による1956年の西門の調査(学報V)をはじめ、いわゆる蘇我入鹿の「首塚」の周辺で県数委による数次の調査が行われている。当調査部でも、西面大垣の周辺で小規模調査を数回行っている。これらの調査によって、飛鳥寺の西側の地域には掘立柱塀・石組溝・石敷広場などの存在が確認されており、飛鳥寺と一体となった宮殿遺構の存在が明らかとなっている。

遺 構

遺構は耕土・床下直下の暗褐色砂質土の上面で検出したが、この層には遺物が若干含まれるため、整地層と考えられる。今回検出した7世紀代の主な遺構は、SD6885の北延長部・南北塀1条・石列抜き取り痕2条・石敷・土管を用いた暗渠1条等である。これ以外にも10～11世紀の素掘り溝1条を検出した。南北塀SA05はSD6885の西約1mにあり、後世の素掘り溝SD07の溝底で5間分を検出した。柱間は約2.3m等間である。柱掘形は一辺1mを超える大規模なものである。SA05は1985年に実施した飛鳥寺西門の西側の調査(概報15)でも検出されており総延長48m・20間以上を検出したことになる。この塀の柱は真上に抜き取られ、その跡は飛鳥の他の遺跡と同様に黄褐色の粘土で丁寧に埋め戻されている。SA05とSD6855の切合関係はSA05の方が古い。また、SA05は飛鳥寺の西面大垣の西11mの位置に存在し、いかなる性格の塀であるかは

今後の慎重な検討が必要とされる。

石列抜取り痕 SX01・SX03、石敷 SX02・SX04は石組溝 SD6885と一連の施設であり、飛鳥寺西面大垣とも一体であり、大垣から西に向って自然地形に沿って段々畑状に下がっていく施設の一部である。SD6885の側石も西側の側石の方が東側よりも約0.1m低くなっている。

暗渠 SX06は調査区の西端で検出した。検出した上管は21本で長さ40cm・径20cm・玉縁長15cm・厚さ2cmを測るものである。掘付の掘形の西肩は調査区外となって検出できなかったが、1985年の調査(概報15)では幅1.5mの規模であった。土管は掘形の東の下端に設置されている。この暗渠は塀に伴ったものか石組溝に伴ったものであるかは不明である。また、暗渠の内側は細かい粘土の堆積により、早い時期に使用不能となっていたものと推測される。暗渠掘形の暗渠直上部分には流水による堆積が認められるため、暗渠が使用不能になった後に開渠として使用された可能性もある。

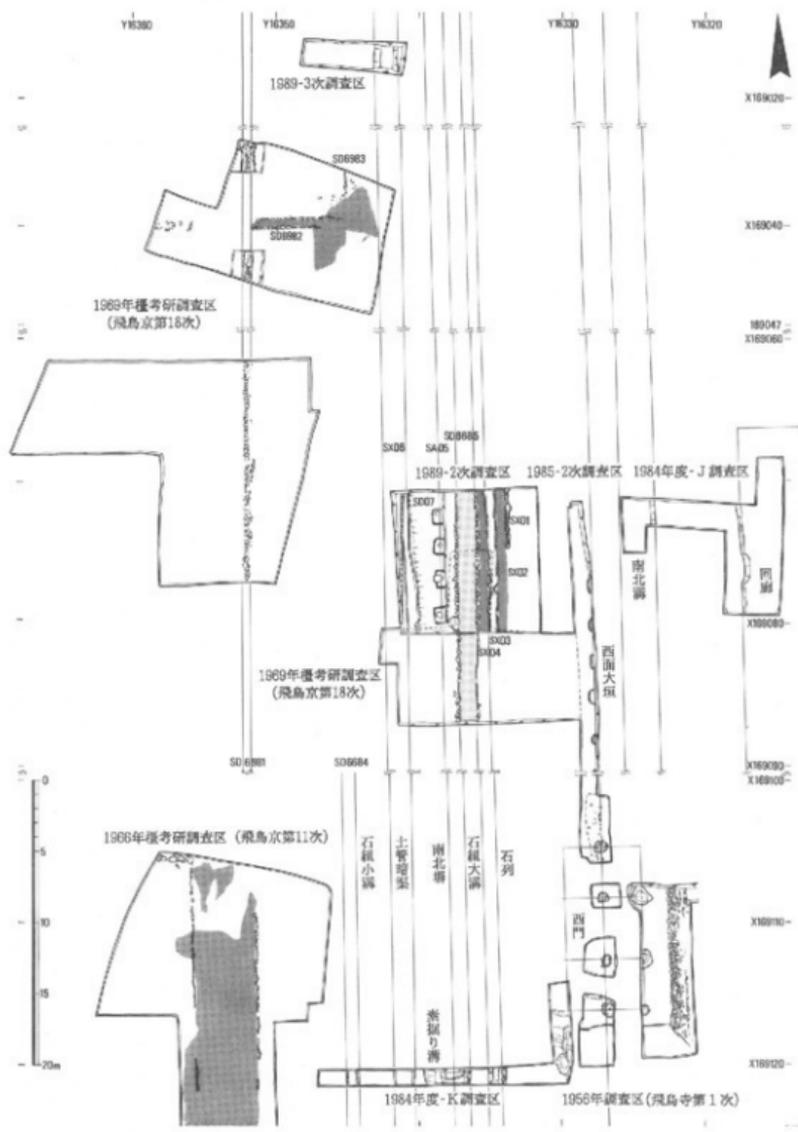
素掘り溝 SD07はSD6885の西に接して流れる南北溝で、幅3mを測る。この溝から10～11世紀の土器が出土している。この溝のため、SD6885の西の側石の西側は流水に洗われて石面を現していたこともある。この溝の堆積状況は底部に砂礫層があり、相当の流量があったものと想定できる。

遺物

出土した遺物は7～8世紀の飛鳥寺所用の軒丸瓦、7～8世紀の土師器・須恵器、10～11世紀の土師器・須恵器などであるが、量的には少ない。

まとめ

飛鳥寺の寺域に西接する地域は1966年の奈良県の第11次調査、1969年の第18次調査によって石敷広場・石組溝等の遺構が広がることが確認されていた。奈良国立文化財研究所が1985年に実施した、西門の西側の調査では、県の調査で確認した石組遺構の他にも柱穴・素掘り溝(暗渠掘形)等の7世紀代の遺構の存在が確認されていた。今回の調査では、先行する調査で検出した遺構の追認に終わったが、それらの遺構が飛鳥寺の西面大垣と平行して、少なくとも南北50mに及ぶことを確認することができたことは、大きな成果であると言えよう。



飛鳥寺西方遺構配置図(1:400)

これらの遺構が飛鳥寺と直接に関係するものであるか、あるいは寺を取り巻くように存在する宮殿遺構の一角であるかは今後の調査の進展を待ちたい。また、10～11世紀のかなりの流量があったと推定できる南北溝の存在は、西方に向かって強い傾斜で落ちていく自然地形に逆らって掘削されたものと考えられ、平城遷都以後の飛鳥寺の存在形態を考える上でも重要な資料を得ることができたものと考えられる。

B 1989—3次

(1989年11月)

この調査は納屋新築にともなう事前調査として行ったものである。調査地は1989—2次調査区の北約60mの位置にあり、1989—2次調査区で検出した暗渠SX06などの存在が予想されたため、東西7m・南北2mの調査区を設定した。

検出した主な遺構は素掘溝・土坑などである。

素掘り溝は調査区の東端で検出したものであり、幅1.5mを測り、深さは約1mである。SX06の北延長上にあたるが土管の暗渠は抜き取られており検出できなかった。しかし、流水の堆積が認められ開渠として使用されたものであろう。開渠の西肩から西は、平安時代の土坑で破壊されており、予想された石組溝SD6684などの顕著な遺構の検出はできなかった。しかしながら、飛鳥寺の西面大垣の外側に、南北100m以上にわたって排水施設が巡っていたことが確認できたことは、飛鳥寺およびその両側の宮殿施設の性格を考える資料を得られたということだけでも大きな成果であろう。

C 1989—1次調査

(1989年7月)

この調査は住宅改築に伴う事前調査として行ったものである。調査地は飛鳥寺西面大垣の西に接し、西門の北約60mの位置にあたる。東西2.5m、南北1.5mの調査区を設定して調査したが、近世以降の浅い東西溝2条・井戸1基のほか顕著な遺構は検出できなかった。

2 奥山・久米寺の調査 (1989-1次)

(1989年8月~10月)

この調査は久米寺庫裡の改築申請に伴う事前調査として、高市郡明日香村奥山で行ったものである。当調査部は、1987年の久米寺塔基壇の発掘調査に際し、庫裡の東側・北側にも調査区を設け、金堂基壇の南辺・西辺の一部を検出した。今回は1987年の調査区を含めて東西約18.5m・南北約14mの調査区を設定した。調査の結果、金堂およびその周辺の状況が判明した。

遺 構

調査区の層序は北半と南半で異なる。南半では、約0.3mの表土の下に、多量の瓦と礫を含む灰褐色粘質土があり、その下が遺構面となる。北半では、庫裡建設時の整地土(近世、厚さ0.1~0.4m)があり、その下が金堂基壇土となる。

主要な検出遺構は、金堂・参道(金堂前)・境内瓦敷である。

金堂 西を正面とする。基壇規模は東西23.4m(80尺)に復原でき、南北規模は未確認(おそらく18m前後)である。この基壇は重成基壇の可能性がある。これは、南面階段地覆石の北端が、基壇外装より0.6m内側にくい込むからである。この0.6mを下成基壇の出とすれば、上成基壇の東西長は22.2m(75尺)となる。基壇高は不明(現存高0.4m)であるが、1m以上であろう。基壇の周囲には幅約0.7mの犬走りめぐり。基壇は全面的改修を一度経ている。改修では、創建時の外装をすべて抜き取り、金堂周囲と一連で厚さ約0.3mの整地をおこなってから、外装・階段・犬走り緑石を据えている。この整地土には凝灰岩小片が多く入っている。基壇外装はすべて抜き取られているが、地覆石に花崗岩切石、羽目石等には凝灰岩切石を用いたと推定される。犬走り緑石には花崗岩自然石を用いているが、改修時のものである。階段の東側および西側5mまでは長さ0.6~1mの石、それ以外の所には長さ0.2~0.5mの石を並べる。

礎石位置は現状では不明であるが、境内に1個現存する径1.1mほどの円形造りだしを持つ花崗岩製礎石を使用した可能性がある。

塔から金堂へ向かう参道に面して階段がつく。階段は幅約3.8m、出は約1

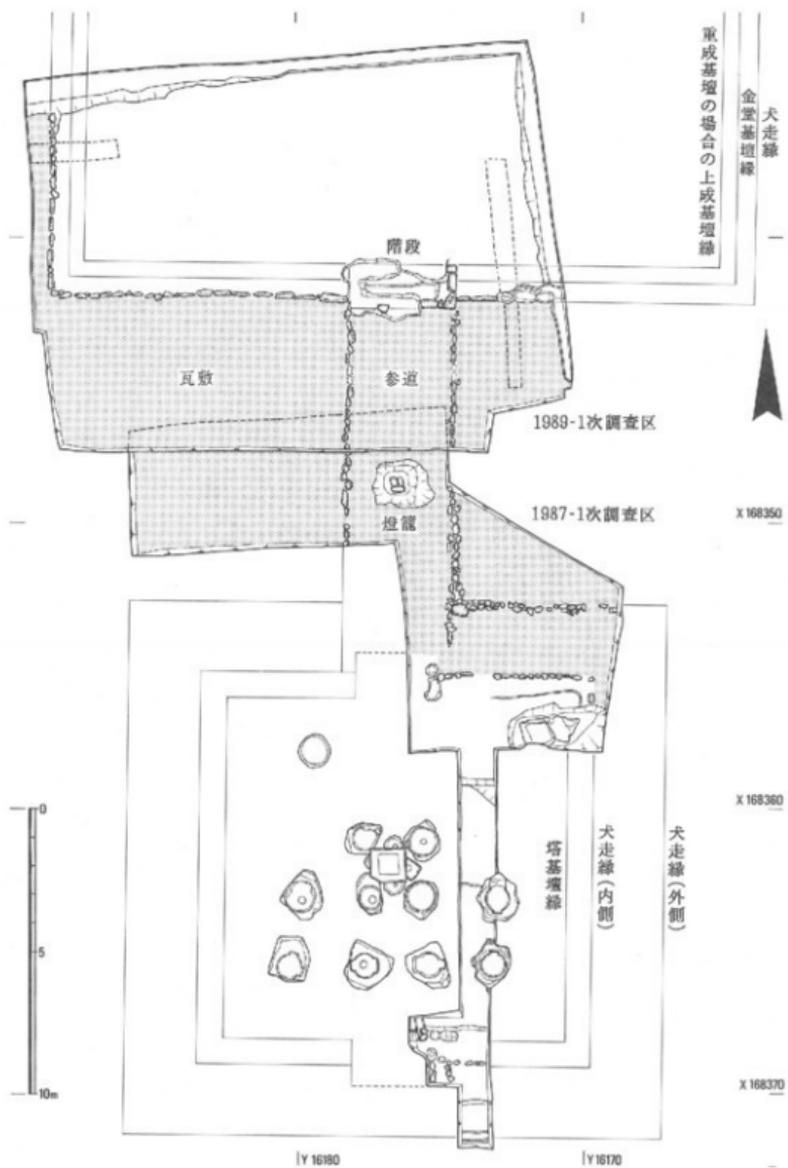
mである。重成基壇とすれば、上成基壇からの出が約1.6mとなる。地覆には花崗岩切石、耳石・段石には凝灰岩切石を用いている。耳石の地覆石3個、段石の地覆石2個を掘わたった状態で検出したが、いずれも改修時のものである。東南隅の地覆石には円形(直径0.1m)と長方形(0.15×0.1m)の納穴がある。

基壇は掘り込み地業・版築により造成されている。掘り込み地業は、地覆石の位置までの範囲で、深さは創建時地表面から0.9mである。版築は大別3工程で行なわれ、下から順に、橙色系土(厚さ0.25m・版築土5～7層)・暗灰褐色系土(厚さ0.4m・版築土9～12層)・明橙色系土(厚さ0.85m以上・版築土18層以上)を積む。1987年に調査した塔基壇土中には、7世紀前半の瓦が多量に含まれていたが、金堂基壇土中には、ごく少量の土器片(時期不明)が含まれるのみである。参道 塔と金堂をつなぐ。長さ約12m・幅約3.8mである。金堂基壇改修時の整地土と一体で造られ、周囲の瓦敷面より約0.1m高い。参道の側石には花崗岩自然石を用い、上面には瓦を敷いている。瓦敷には部分的に上下の2層がある。金堂階段のすぐ南側では、小礫敷を介して上下2層があり、下層は平瓦の凸面を上にして整然と並べ、上層は雑然としている。その他の場所は雑然とした1層のみである。1987年の調査では、参道積土から7世紀後半の土器が出土した。境内瓦敷 金堂の周辺には、瓦を全面に敷いている。この瓦敷は、金堂基壇改修時の整地土上に乗る、調査区西端から東へ9mの地点以西では、平瓦の凸面を上にして整然としているが、それ以外の場所ではかなり雑然としている。含まれる瓦は、7世紀前半～7世紀末・8世紀初頭の時期のものが多いが、一部奈良時代の瓦を含む。瓦敷はおそらく回廊内全面に敷かれていたであろう。回廊内に瓦を敷き、境内を整備した類例としては山田寺が知られる

遺 物

主要な出土遺物は、瓦埴類・土器類・埴仏・金具である。土器類は、ほとんどが久米寺庫裡建設時の整地土から出土した近世のものである。埴仏は1点あり、山田寺出土品と同範である。近世の整地土から出土した。瓦埴類は多量にあり良好な資料が多いので、以下で詳しく紹介する。

奥山・久米寺調査遺構配置図(1:200)→



瓦埴類 総計650袋出土した。飛鳥時代から近・現代までの瓦があるが、平安～中世のものはほとんどなく、大部分は7世紀代に属する。近世瓦は約1割、ほかに奈良時代のもが含まれる。

出土した瓦の内訳は、大量の丸・平瓦のほか、軒丸瓦175点・軒平瓦64点・甃斗瓦76点・面戸瓦5点・鬼瓦1点・近世の菊丸9点・不明瓦製品13点・鬼瓦2点である。ほかに埴仏1点がある。軒丸瓦・軒平瓦のうち、それぞれ26・22点は近世～現代のものであるので、それらを除いた軒丸瓦149点・軒平瓦42点について、型式別出土点数をP73の表に示した。

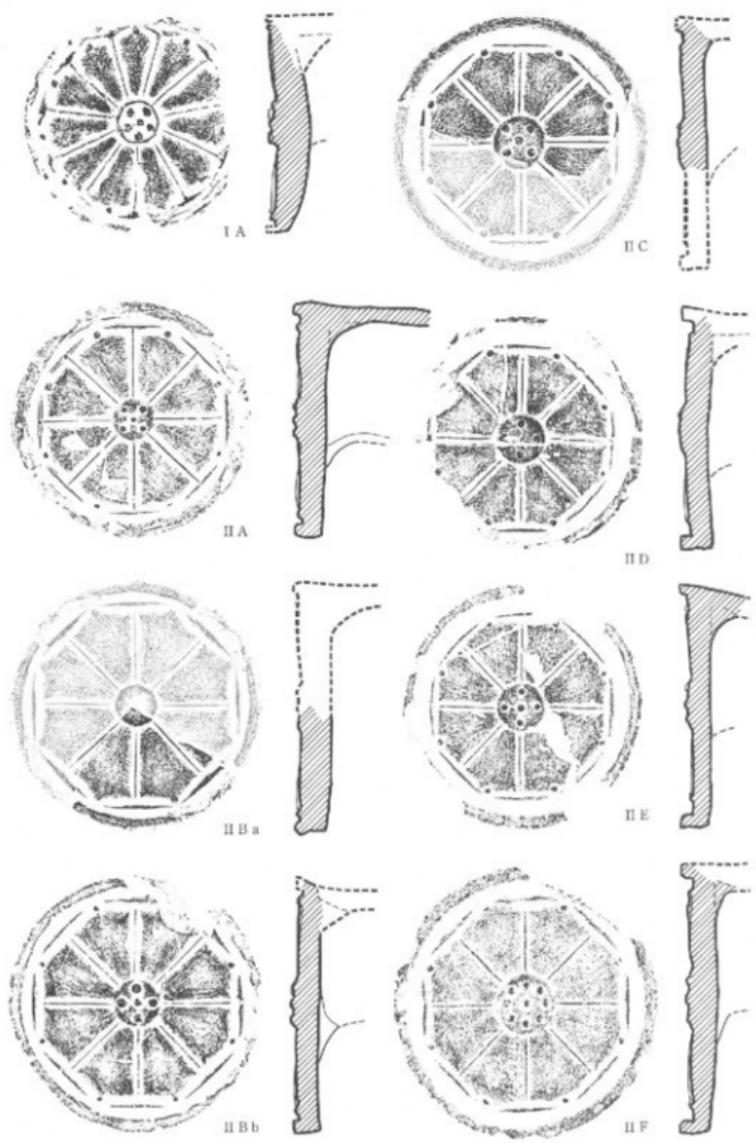
軒丸瓦で最も多いのはⅡ型式の61点で、次いでⅣ型式29点・Ⅷ型式24点・Ⅹ型式15点が続く。塔跡の調査でⅧ型式の出土が多かったところから、これと重弧紋軒平瓦の組合せが塔所用で、金堂所用の軒丸瓦はⅡ型式と考えてよかろう。また軒平瓦では、重弧紋系の1・2型式が29点と多く、次いで大官大寺式の3型式(6661型式)16点であり、今回他型式は出土しなかった。Ⅱ型式には軒平瓦は作わないと考えられる。

以下においては、従来より遺存状況の良好な資料が増えたので、奥山久米寺を代表する軒丸瓦Ⅱ型式を中心に『概報18』における報告を補足しよう。

Ⅰ型式は無子葉単弁で、角張った弁端に点珠を配した、いわゆる「角端点珠式」の奇数弁の蓮華紋軒平瓦である。外縁は無紋の直立縁。A・B2型式があるが、今回はⅠA型式のみが出土した。

ⅠAb型式 弁数は11、弁肉やや厚く、弁尖が盛り上がるが稜は作らない。弁端が若干丸みを帯びる。中房は小さく低い凸型で、大振りの蓮子を1+5配する。弁間の界線は細く、一部時計回りに彎曲する。同范の飛鳥寺Ⅲ(=豊浦寺ⅡA)には、中房周縁を彫り加えたb種と、元のa種とがあるが、当寺跡からはb種のみが出土。

Ⅱ型式も無子葉単弁8弁の蓮華紋軒丸瓦である。弁端は三角形を呈し、弁間の界線が直線的な幾何学紋風の蓮華紋である。稲垣晋也が「弁端剣尖形点珠」、近江昌司が「角端点珠B類」と呼んだほか、「奥山久米寺式」という呼称もある。すべて均等割りの8弁で、花卉は薄肉で平板。外縁には角張った直立縁と、



奥山・久米寺出土軒瓦 (1:4)

上面が丸みを帯び断面蒲鉾形を呈するものがある。いずれも無紋。中房は概して小さく、断面が低い半球形状をなす。蓮子は1+4が圧倒的に多く、1+8もある。范はBタイプで、薄い粘土板を順次詰め込む。二重縁のものもある。瓦当裏面はナデ調整によって平坦に仕上げる。接合前の丸瓦の加工は筒部先端の凹凸両面を斜めに削る手法が多く、まれに刻み目を入れた例もある。しかし、片柄状に加工した類も存在する。丸瓦は玉縁式であるが、筒部と玉縁部を一体で形成しない類である。胎土砂混じりで粗いものと、精良で焼成堅緻なものの2種がある。以上のような特徴によって、少なくとも7種に分類できる。

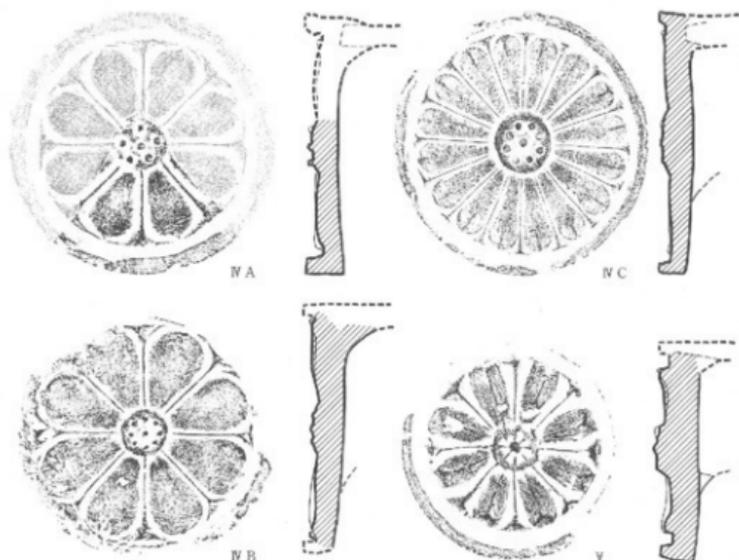
IIA型式 面径16cm強の小型品である。外縁は直立縁だがやや内傾斜する。弁区との境の溝が極端に狭くV字形をなす。界線は細く断面三角形形状に尖り、弁端まで突き抜ける。弁尖が若干盛り上がる。中房は小さく、1+4の蓮子も小粒である。灰色で硬い。大和天神山瓦窯と同范例と思われるものがあり、当瓦窯の製品である可能性が高い。

II B型式 弁区との境の溝幅が狭い点でAに似るが、溝底がやや丸みU字形に近く、面径19cmと大きい。また弁も平板、界線も細く弁端にまで達さない。中房は低く、1+4の蓮子は大振りである。外縁が低く上面が丸い蒲鉾形状をなすa種と、比較的外縁が高く上面が平らなb種とがあり、後者を范の影り直しと判断する。a種は灰色ないし灰黒色を呈し堅く、瓦当裏面に円圈状のナデが顕著。それに対してb種は褐色で、胎土の細砂が混じり焼成は軟質である。

II C型式 外縁が丸く、弁区と境溝が広い類である。弁は平板で、界線は太く丸い。中房は平板で、1+4の蓮子は大きくしかも盛り上がる。弁端の点珠も大振り。灰色で堅緻なものと、淡褐色で軟質の2様がある。

II D型式 外縁が角で高いが、若干丸みを帯びる。溝幅がやや広い。中房は大きめで1+4の蓮子も大振り。すべて淡褐色～赤褐色で軟質。平野山(楠葉西遺跡)瓦窯、山城久世庵寺出土品が同范である可能性が高い。

II E型式 外縁角型で細く高く、溝幅が最も広い。中房はふっくらとし、蓮子は1+4で小粒で高い。胎土に白色砂粒を多くまじえ、暗灰色と褐色があるが、双方とも堅緻な焼きである。石神遺跡①が同范。



奥山・久米寺出土軒瓦 (1:4)

種別	型式	数	備考	種別	型式	数	備考	
軒	I A	1	角端点珠単弁11弁	軒	ⅪA	3	平城宮6285Aa	
	ⅡA	8			ⅫA	1	平城宮6279Aa	
	ⅡBa	9			ⅩⅢA	1	平城宮6274Ab	
	ⅡBb	5			新	1	複弁・外区珠紋帯	
	ⅡB	8			不明	1		
	ⅡC	2			総数	149		
	ⅡD	7			26	1	3	三重弧紋
	ⅡE	3				2 A	16	四面弧紋
	ⅡF	3				2 B	2	
	Ⅱ	12				2 C	1	
丸	Ⅲ	5	単弁8弁 高句麗系	平	2	7		
	ⅣA	8	29		瓦	3 A	1	大官大寺6661A
	ⅣB	8				3 B	10	
	ⅣC	13				3	5	
瓦	V	2		総数		42		
	Ⅶ	1		道具瓦	鬼瓦A	1	角端点珠単弁8弁	
	ⅧA	18	24		製斗瓦	76		
	Ⅷ	6			面戸瓦	5		
	Ⅸ	4			複弁8弁 (飛鳥寺XIV)			
	ⅩC	3	大官大寺6231C					
	X	12						

奥山・久米寺出土瓦一覽表

II F 型式 面径18.5 cmと他種より大振り。外縁角型で、溝幅が広い。しかも中房が極めて大きく、断面半球状を呈し、蓮子も1 + 8と多い。胎土に砂粒を多くまじえ、淡褐色で焼成軟質である。

IV 型式は花卉端が円く整い、先端から中心に向かって短い鐮状の切込みを施した無子葉単弁蓮華紋軒丸瓦で、弁肉が厚めで弁央がふくらみ、弁端が肥厚して稜をなす型式である。瓦当面径20 cm近くの大形品が主体をなす。弁数は8弁。弁間の界線は細く、先端部は高く盛り上がる。中房も大きく、半球状に丸い。外縁は狭く、中高。瓦当裏面はナデ調整によって平坦に仕上がるが、周縁端部がわずかに突出する。瓦当との接合にあたって、丸瓦筒部先端を凹凸両面から斜めに広く削って楔形にし、さらに両側端部を斜めに切り欠く。その上さらに縦方向の刻み目をかなり密に入れている。丸瓦は行基式。

IV A 型式 外区と弁区との境に狭い溝がある。弁区が鐮状に尖り、外側に小さく突出する。蓮子は1 + 5で、細く突出する。

IV B 型式 弁区と外縁間の溝は狭く、ほとんど無いといってよい。弁端がわずかながら肥厚気味に反転し、切込みが一見点珠状をなす。中房の蓮子は1 + 8で大きく、各界線に対応する。

IV C 型式 面径20 cm近くの大形瓦で16弁のもの。弁端が反転気味にふくらみ、点珠のかわりに弁央を走る鐮状の線を徐々に肥厚させて外方にわずかに突出させている。中房は半球形に丸く、大振りの蓮子を1 + 8 順配する。

V 型式も無子葉単弁蓮華紋軒丸瓦で、弁端が強く反転し、弁中央に稜が通る。外縁は素紋の直立縁。瓦当裏面にハケメを有する。

まとめ

金堂の規模が推定できるようになった。飛鳥地域の7世紀代主要寺院の金堂と比較すると、久米寺金堂は、基壇規模では山田寺金堂をやや上まわり、川原寺中金堂より小さい。金堂建物の規模は不明であるが、桁行は5間となろう。築造時期は、基壇積土の状況から判断して、7世紀後半建立の塔より古く、出土瓦からみて飛鳥時代初期、7世紀前半の中頃までさかのぼる可能性が強い。飛鳥～奈良時代の寺院では、金堂より塔が遅れて造営されることが多く、その

間数十年経過することすらある。

金堂の基壇は7世紀後半以降に大がかりな改修をうけ、同時に回廊内に整地し参道を設けている。これは、塔の建設時の可能性が強い。さらに奈良時代には回廊内に瓦を敷き境内を整備している。

伽藍配置はどのようになるのであろうか。伽藍の造営方位は南北であり、南に塔、北に金堂がある。講堂はかつて石田茂作博士が推定したように、金堂北方の微高地であろう。したがって、四天王寺式か山田寺式となるが、前者の可能性が強い。金堂基壇北縁から講堂基壇南縁までの距離が約25mで、山田寺の約42mに比して狭く、北面回廊を金堂・講堂間に通すにはやや無理がある。また回廊の東西規模が約66mであり、約88mを有す山田寺に比してかなり南北に細長くなり、この点でも四天王寺式に近い。

今回の調査で、久米寺の金堂遺構が、基壇の上半が削られてはいるものの、犬走り・階段・周囲の瓦敷・参道について、きわめて良好な状態で検出できたことは、大きな成果である。花崗岩・凝灰岩切石を使った基壇化粧、入念な基壇構築法は、飛鳥諸寺の中でも、一級の内容の寺院であることを窺わせる。



奥山・久米寺、四天王寺、山田寺伽藍配置比較図(1:2000)

3 山田寺第7次調査

(1989年10月～1990年2月)

当調査部では、特別史跡山田寺の追加指定・土地公有化に伴い、史跡整備の資料を得るため、1976年以来6次の調査を行い、伽藍配置や塔・金堂・講堂・中門・回廊の規模や構造などを明らかにしてきた。今回は、南門の位置や構造・南門の南の利用状況・寺域の規模などの解明を目的に調査を実施した。

調査地は南北に連なる山塊から西に派生する小丘陵の北裾にあたる。この裾部は西に低い雑壇上の水田となっており、南北に長い二枚の水田に東西幅10～30m、南北長55mの調査区を設定して調査を実施した。面積は約1150㎡である。

遺 構

調査地の基本層序は、調査区の北半と南半では大きく異なる。北半では耕土・床土・黄灰褐色土の下が整地土となるが、中央部付近では、床土の下に中世の遺物を含む青灰色粘質土・青灰色微砂土が厚さ0.5mほど堆積し、地表下1.6mで整地土上面に至る。調査区南東端では、床土下に暗灰色砂質土が堆積し、地表下0.45mで岩盤に至る風化土層となる。整地は調査区北東部から始まり、東西は調査区の幅、南北は南へ約48mの位置まで行われている。整地の厚さは調査区東北隅付近では10cmにも満たないが、調査区中央付近では厚さ1.9m、計13層にも及び、5～30cmの厚さで砂質土や粘質土を交互に用いている。

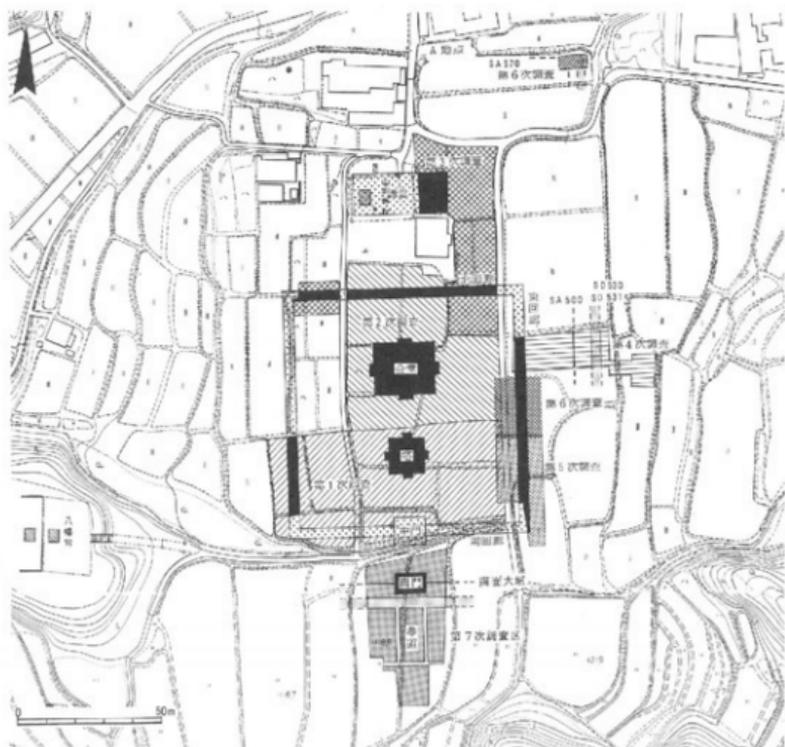
遺構は整地土上と整地土下で検出した遺構に大別できる。整地土上の遺構は、中世の小溝を除くと大半は南門に係わる時期のものであり、整地土下で検出した遺構は当然ながら山田寺造営前の時期と考えられるものである。

整地土上で検出した遺構はさらに南門造営前と造営後に細別できる。

南門造営前の遺構 東西方向の掘立柱塀 SA 600・615・621・624、東西溝 SD 601・609、斜行溝 SD 607がある。

東西塀 SA 600は南門造営前に寺域の南を閉塞する施設である。後の南門の棟柱筋上に、12間分検出した。柱掘形は一辺1.6m前後、深さは1.65～1.9mあり、柱位置に平石を据えた例も認められる。柱は門より西は南北方向、門を含

めた東は東西方向に全て抜き取られる。柱が抜き取られていることや南門の礎石下に柱位置があることから、柱間寸法を確定し難いが、中軸線上の1間は金堂や回廊の基準尺と同じ高麗尺で11尺(約3.96m)、その他は6.5尺(約2.35m)、または中軸線上の1間を9尺、左右の脇間を7.5尺と推定することも可能である。いずれにせよ中軸線上の1間は他よりも若干広く柱間をとり、通路としていたと考えられる。また、瓦の出土量から瓦葺の塀であった可能性が強い。塀SA621・624は、東西溝SD625Aの南肩で検出した。いずれも上半部をSD625掘削時に削平されている。SA621は1.75mで2間分、SA624は1間分・1.8mを検出した。東西塀SA615はSA600の南14.8mにある。5間分を検出した。柱掘形



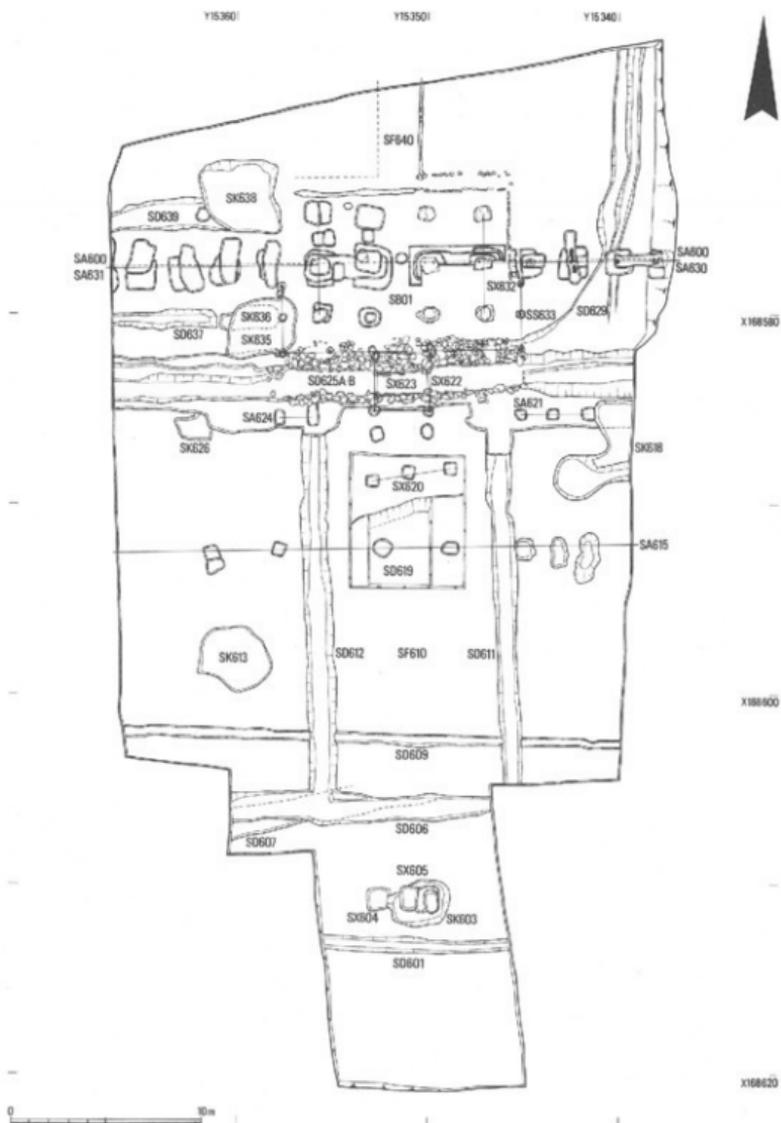
山田寺調査位置図(1:2000)

の平面は不整形を呈するが、深さは1.2m前後である。柱間寸法は3.5～5.4mと不揃いである。東西溝SD609・601は同規模の西流する素掘り溝で灰褐色砂が堆積する。幅0.6m・深さ5～20cmである。斜行溝SD607は北で西へ振れながら西流する。幅1.6m・深さ0.2mである。

南門造営後の遺構 南門SB01、SA630・631、暗渠SX632、足場穴SS633、参道SF610・640、東西溝SD625、橋脚SX622・623のほか東西溝3・斜行溝1・土坑6などがある。

南門SB01は花崗岩製礎石6個と礎石採取跡6個が残っていることから、正面3間・側面2間の建物となる。柱間寸法は正面3間が唐尺（1尺=約29.5cm）で10尺等間、側面2間は2.62m等間であり、本来9尺等間を意図したと考えられる。整地上を若干掘り凹め、根固め石を用いずに礎石を据え、その後に厚さ15cmほど基壇土を積みたし基壇を築成する。礎石は南面の2個のみに円形の柱座を造り出す。また、棟通りの礎石には扉の軸を受ける軸摺穴（直径12cm前後、深さ5～6.7cm）があり、棟通りの3間全てに扉が設けられたことになる。基壇は縁に榛原石の板石や花崗岩玉石を並べた簡単な造りで、東西約11.65m・南北7.84m、礎石上面までの高さは南で0.5m、北で0.1mとなる。また、基壇の南面では玉石を敷きつめた犬走り、北面では玉石を縁石として内側に瓦を乱雑に敷いた犬走りが残るが、いずれも奈良時代と考えられる。南門造営時の足場穴SS633は棟通りより南で検出した。いずれも粗割りにした角柱が残る。

南門にとりつく掘立柱塀は東で4間分、西で5間分を検出した。直径30cmの柱根が2本残り、柱間は8尺等間である。前身の塀SA600の柱を溝状に抜きとり、その抜き取り穴を利用して前回よりも浅い位置に柱を据えている。このため柱の下に瓦を敷きつめて、さらに柱に削り込みをいれ、南北から副木を添え、不等沈下やねじれを防いでいる（81頁図）。また、東の塀SA631の柱は全て抜きとられているが、いずれの抜き取り穴も瓦を敷きながら版築状に埋められている。このような入念な埋め戻しの状況は、塀の後に築地に改造されたことを想定させる。暗渠SX632はSA630が門にとりつく部分で検出した。側石として榛原石や塼を用い、塀の柱筋のみに榛原石の蓋石をする。南北長1.5m、内



山田寺第7次調査遺構配置図 (1:300)

法幅0.25～0.32 m、深さ0.2 mである。

東西溝SD625A・Bは南門のすぐ南にある。当地区の基幹排水路と考えられ当初は幅2.5～3.75 m、深さ1.0 mの素掘り溝（SD625A）であったものが、奈良時代になって基壇幅に合わせて両岸を石で護岸した溝（SD625B）となる。SD625Aは参道の東側溝の東と西側溝の西では他の部分より若干幅広がっている。また、鞆羽口、銅滓とともに飛鳥Ⅳの土器の出土した土坑SK626を壊して掘られており、この溝の開削時期は天武朝と考えられる。SD625Bの石組部分は幅1.3 m・深さ0.9 m前後である。堆積土には砂礫を含み、相当の水量のあったことを窺わせる。多量の瓦埴類や奈良・平安時代の土器が出土した。

参道SF610は南門に至るもので、素掘りの東側溝SD611と西側溝SD612を伴う。路面幅8.6 m・溝心々距離約10 mで、南門の正面規模にはほぼ合わせている。両側溝は東西溝SD625から溢れた水を受けて南流し、東西溝SD606と合流して西流する。西側溝SD612からは鞆羽口・埴埴・鉄滓とともに奈良時代中頃の土器が出土しており、SD625Bの時期には埋没していたと考えられる。

橋脚SX622・623は各々東西溝SD625A・Bの時期に南門中央の柱間にあわせて架けられる。SX622は1間で西北を除く三方の橋脚を溝肩に検出。柱間は南北2.95 m・東西2.85 m。SX623は石組溝内にある。東西2間；2.6 m、南北1間；1.1 mである。橋脚は東南隅が円柱、他は一辺0.2 m前後の角柱である。

参道SF640は南門から中門に至る参道で玉石を並べた東縁石の一部を検出した。幅約2.2 mに復原できる。

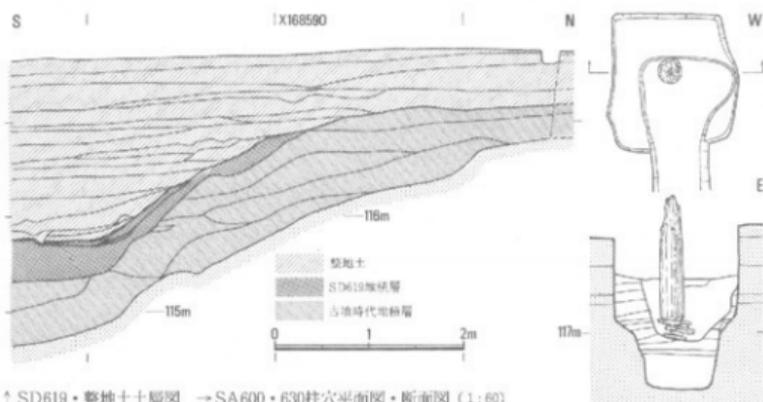
SK603は東西溝SD606の南方約3 mにある不整形の上坑で、東西3.3 m・南北2.4 m・深さ0.7 mである。SX604は正方形の柱穴で、一辺1.2 m・深さ約1.2 m。内部に柱抜き穴がある。SK603と重複関係があり、SK603より古い。SX605はSK603を掘り下げて検出した。内部に1.2 mの間隔で東西に並ぶ2個の穴を有する柱穴で、2個の穴は柱抜き穴と考えられる。同様の遺構は紀寺跡第1次調査でも検出され、掘立柱遺構と命名されているが、轆轤の竿を建てた跡であると考えられる。東西2.1 m・南北1.5 m・深さは0.7 mである。

斜行溝SD629は調査区北東隅から東西溝SD625Bに流入する幅4 m前後の流

路である。堆積土には回廊に使用されていた双頭の鷗尾を含む大量の瓦や地覆石として使用された榛原石の切石などが含まれており、相当の水量のあったことを物語っている。出土土器には10世紀後半の土器が含まれており、南門の廃絶時期を示す資料となる。

この他に、東西堀SA631の北と南に東西溝SD639・637がある。これらはSA631改作時の雨落溝とも考えられるが、性格については不明な点が多い。SD639は平安時代の土坑SK638と重複し、SK638よりも古い。土坑SK636は東西長3.1m・深さ0.5mである。土坑SK635は深さ0.2m前後の不整形を呈する土坑でSK636やSS633の柱穴より新しい。10世紀前半の土器や漆塗りの木製品が出土した。土坑SK613・618は奈良時代と考えられる土坑である。

整地土下の遺構 南門の南で参道上を南北7m・東西6mの範囲で断割り調査を行った際に検出したSD619とSX620がある。SD619は丘陵裾部に沿った旧谷地形の流路と考えられ、北肩のみの検出に留まった。幅は5m以上、北肩からの深さは約1.6mあるが、上方の1.2mは整地土で埋められ、下半の0.4mに当時の堆積層2層が残る。上層は厚さ5mの茶褐色有機土層で、下層は暗灰色粘質土層であり、両層から木簡・飛鳥Iの土器・木製品・木片・獣骨・二枚貝などが出土した。SX620は、東西に並ぶ柱穴で、北で西に振れる。柱掘形は一辺0.6m前後・深さは0.6m、柱間は東が2.3m、西が1.9mである。



↑ SD619・整地土土層図 → SA600・630柱穴平面図・断面図 (1:60)

遺物

出土した遺物には、大量の瓦埴類、木製品（琴柱・曲物など）、木簡、金属製品（金銅及び銅製飾金具・刀子・鉄釘）、銭貨（和同開珎・延喜通寶・貞観永寶）、墨書土器を含む土器類、土製品（上馬・埴塙・雜羽口）、石製品（磁石）などがある。現在整理中のため、特徴的な遺物のみ紹介する。

瓦埴類 丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・極先瓦・鷗尾・鬼瓦・面戸瓦のほか、埴塙も1点出土した。3月末現在の整理による出土点数は83頁表に示した。

軒丸瓦はいずれも単弁8弁の「山田寺式」である。従来細分しているA～Fの6種すべてが出土した。出土点数はD（83頁・3）が最も多く、7割を超える。これに次ぐのがAで1割5分ある。Dは過去の調査によって回廊・中門の所用軒丸瓦と推定されており、南門の所用軒丸瓦もDとみてよい。また、今回出土したAに、2種の丸瓦部接合手法を確認した。山田寺の軒丸瓦はAを含め、丸瓦の筒部先端を断面が片納形に加工し刻みを入れた後、瓦当裏面の先端に接合する手法が特徴的である（1）。ところがAの一部には、筒部先端を全く加工せず、内面接合粘土を多量に用いるものがある（2）。後者は前者に比べ范傷が著しい上に胎土にも差があり、製作時期の違いをうかがわせる。

軒平瓦はすべて重弧紋である。三重弧紋1点の他は、すべて四重弧紋である。この中には、側縁をL字形に折り曲げた隅軒平瓦が数点含まれている。

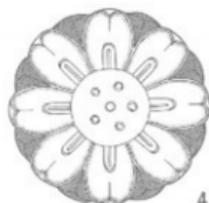
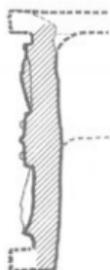
極先瓦は、Dが約4割、Bが3割5分ほどで、この2種が南門の主要な極先瓦と考えられる。極先瓦には、彩色が施されていたことが判明した。裏面を除く全面に白土を塗った後、弁の輪郭線内側をベンガラと思われる赤色の顔料で縁どり、さらに間弁を黒く塗る（3）。

鷗尾は4個体以上、いずれもこれまでに出土しているものと同じ意匠であるが、なかに、互いに直角につながる2つの胴部をもったものがある。これは二つの胴部と一つの腹部・膝部を備えた「双胴単尾」の鷗尾と考えられ、回廊の四隅に飾られた鷗尾にはば間違いない。

木製品・金属製品 SD619の堆積層・造営に関わる整地土・SD625B・SK635から出土した。SD619堆積層出土品には曲物底板・刀子・部材などがある。刀



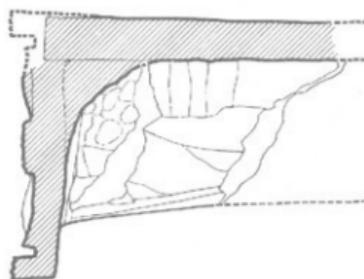
1



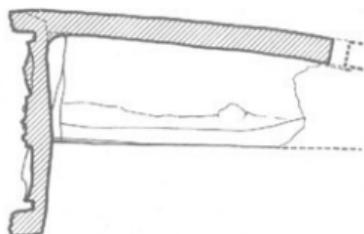
4



2



3



山田寺出土軒丸瓦・檼先瓦 (1:4)

	軒丸瓦						軒平瓦	檼先瓦						鷓尾	鬼瓦			
	A	B	C	D	E	F		合計	A	B	Ca	Cb	D		F	合計	蓮華紋	鬼面紋
点数	42	14	15	199	2	1	273	66	18	137	0	70	158	3	386	78	3	1
百分率	15.4	5.1	5.5	72.9	0.7	0.4	100 (%)		4.7	35.5	0	18.1	40.9	0.8	100 (%)			

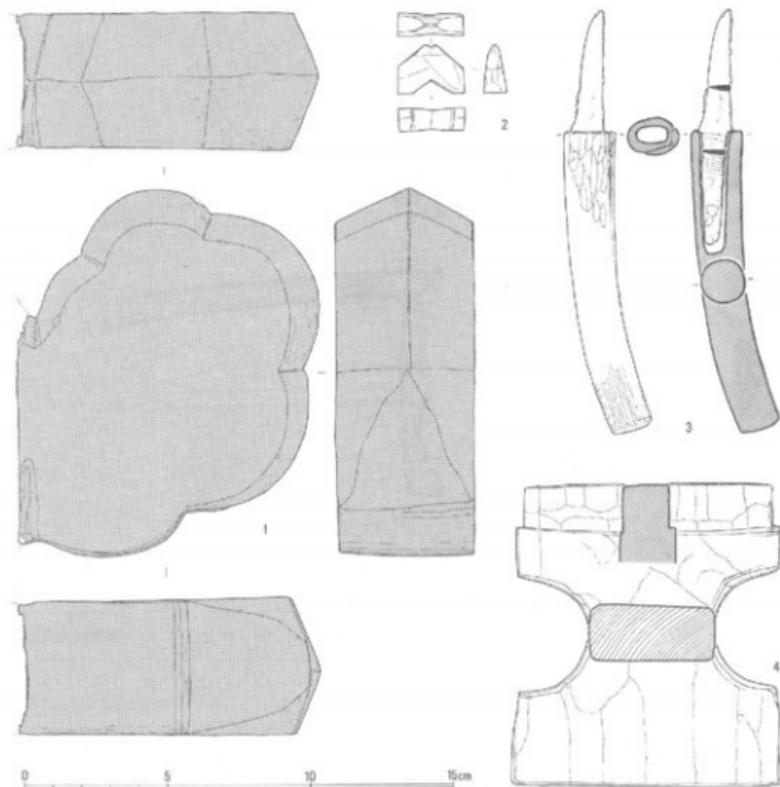
山田寺第7次調査出土瓦集計表 (90年3月末現在)

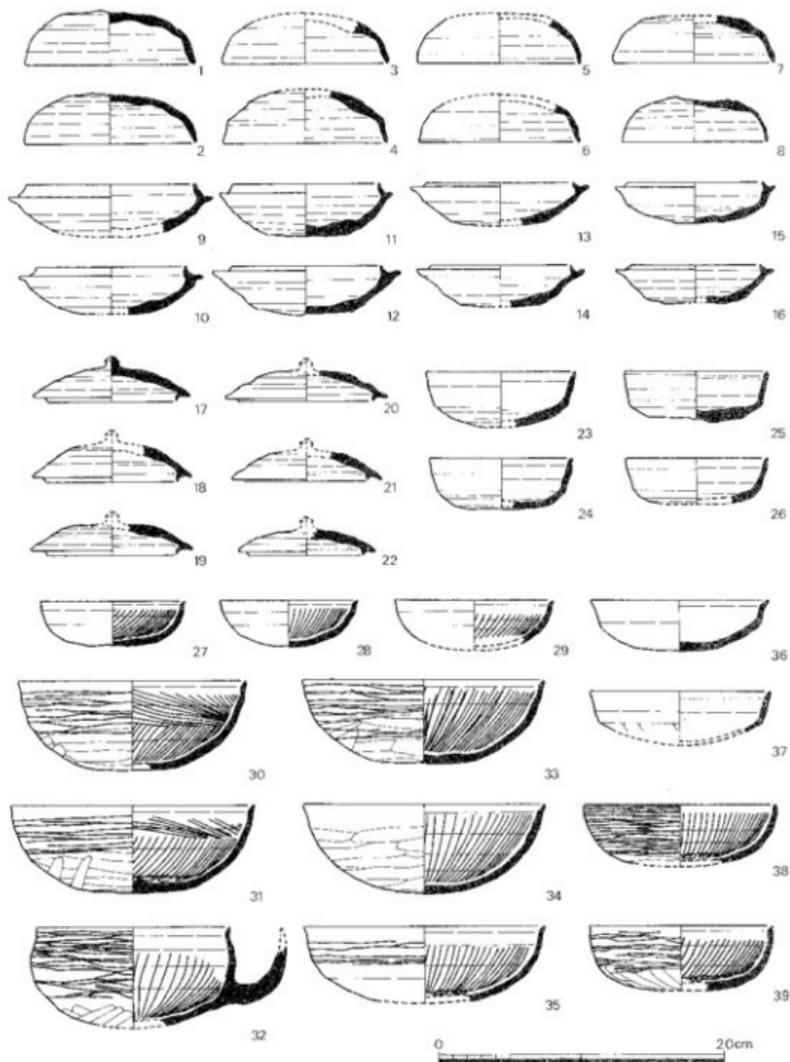
子 (84頁・3) は鉄の刀身をとどめ、柄は角製である。部材 (4) は脚であろう。整地土から琴柱 (2)、SD625Bから曲物底板が出土した。SK635出土品 (1) は断片で、雲形の厚板に黒漆を施す。扁額の部材の可能性ある。

土器類 ここでは造営に係わる整地土やSD619堆積層の出土土器を85頁に示した。これらの土器はいずれも従米の飛鳥地域の土器編年の飛鳥Ⅰの様相を示すが、さらに細分される余地があり、その詳細については再度検討したい。

このほかSD625Bからは奈良時代後半の土師器皿の底部外面に『山田寺』と墨書した土器 (裏表紙) が出土し、寺名を証明する資料として注目される。

木簡 木簡は、造営前の旧流路SD619の北屑から、49点 (うち削屑43点) が出土





↑山土土器 (1~3・9~12・22・23・27・32~34; SD619, その他: 整地土)

←出土木器 (1部材: SD635, 2榫柱: 整地上、3刀子・4部材: SD619)

した。以下に主要なものの2点の積文を掲げる。なお②と同筆と思われる「城」の文字を習書した削屑が10点余出上している。

- ①・□悪悪 081型式 ② □□城城城 091型式
・□身身 (116)×39×3 [城城カ]
□□□

まとめ

今回検出した南門は天武朝に建立され、10世紀後半から11世紀前半に廃絶したと推定される。南門を検出したことにより、堀で囲まれた寺域が判明した。南北規模は、南門心と北方の第6次調査や1978年の水道管埋設工事の際に検出した東西堀（位置図A地点）間で約185mとなる。東西規模は、第4次調査で検出した南北堀SA500を伽藍中軸線で西に折り返すと東西118.44mの数値が得られる。なお、南門と中門の心々距離は18.5mで飛鳥寺に近い数値となる。

礎石建物である南門の前身施設として一本柱の掘立柱塼の存在を確認した。構造的な南門が作られ周辺が整備された年代は天武朝と推定され、金堂・回廊の作られた皇極朝には、堀のみが巡っていたと考えられる。従って南門地区では[掘立柱塼]→[礎石建ち南門と掘立柱塼]→[礎石建ち南門と築地]という三時期の変遷が考えられるようになった。南門の前身施設が掘立柱塼である要因としては、願主である蘇我倉山田石川麻呂の事件や山田寺近辺に推定される山田道からの出入りが西門で行われたことなどが考えられよう。この点については、西門地区の調査を計画しており、今後の発掘調査を通じて解決していきたい。また、南門は単層・切妻の建物で棟通りの柱間全てが扉となる「三間三戸」の形式であることが判明した。古代の寺院では類例がなく注目される。

造宮に伴う整地土下では掘立柱柱穴と溝SD619を検出し、SD619からは木簡が出土した。これらの遺構・遺物は山田寺造宮（641年）前の時期のものである。木簡が含まれていることから単なる集落とは考え難く、山田寺建立の願主である蘇我倉山田石川麻呂の邸宅「山田家」の一画である可能性があり、その手懸かりを得たことは意義深い。また、伴出土器はいずれも飛鳥Ⅰの様相を示しており、飛鳥Ⅰの年代の下限を示す資料としても興味深いものである。

4 川原寺の調査 (1988-2次)

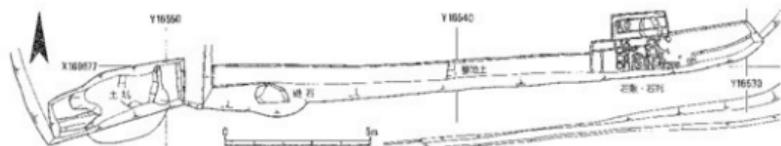
(1989年1月)

この調査は、史跡川原寺跡の東辺・北辺を通る農道の拡幅工事に伴う事前調査として、高市郡明日香村川原で行ったものである。調査地は川原寺「北方建物」のすぐ北側で、「北方建物」がある水田の北西端から、東方に大きく段をなして下降する地点までの約25mについて、幅1mの調査区を設けて実施した。遺構 調査区西端での層序は、農道構築土の直下が黄灰色の花崗岩風化土の地山で、その上面で土坑1基を検出したが、それは「北方建物」礎石上面の高さよりも約0.8m低い。土坑の東は水田が一段低く、すでに地山面も大きく削られているが、調査区中程から東には黄褐色粘土の整地土層が広がり、調査区東端では、地山と整地土の間に青灰色粘土層が堆積し、整地土の上は遺物を含まない黄褐色粘質土で埋め立てられている。

検出した主な遺構は、調査区西端の瓦を多量に含む土坑1基と、調査区東寄りの石列であるが、石列と土坑との中間で整地土の落込みを、また東端で東に大きく下降する地山の落込みを確認した。

西端の土坑は直径2m余りの不整形で、深さ0.3mである。埋土は暗灰色粘質土の上層と暗灰色砂土の下層とに分かれるが、いずれからも多量の瓦片とともに平安時代初めの土器が出土し、下層からは「隆平永宝」8枚が出土した。瓦には川原寺創建時の複弁蓮華文軒丸瓦・重弧文軒平瓦、及び平安時代の軒平瓦などがあり、寺域中央部の瓦溜りと同様、建物廃絶に伴う土坑と考えられる。

調査区東寄りの石列は、直径30cm大の花崗岩を東に面を持たせて南北方向に並べたもので、東と西に約1mの間隔をもって2列配置されている。2列の



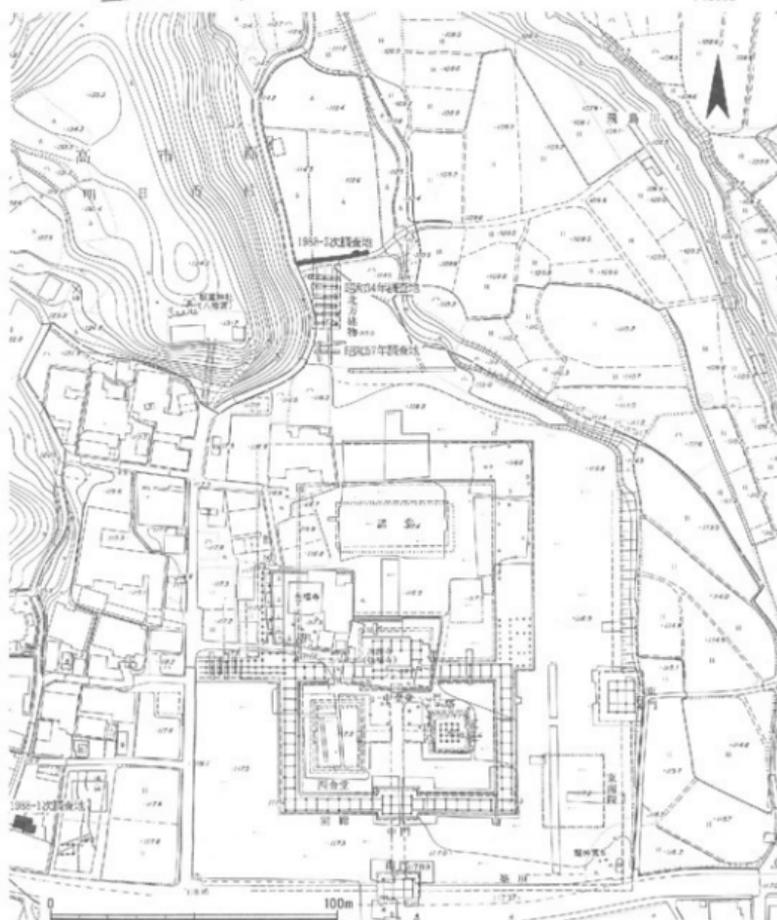
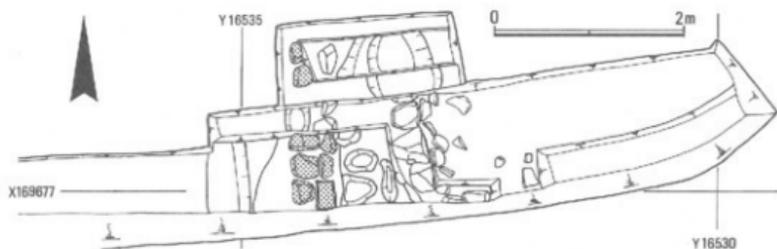
川原寺1988-2次調査遺構配置図(1:200)

石列はともに黄褐色粘質土の整地土中に据えられ、西側石列の上端が東側のそれよりも約15 cm低く、その上に20 cm大の扁平な川原石を南北方向に敷き並べている構造で、石列の上面は瓦を含む砂層で覆われている。石列に伴う建物などが見られないことからすれば、これは、東へ大きく下降する地形を整地し、その縁辺を石列で留め、上面を石敷舗装した施設と考えられる。整地土層及びその下層の青灰色粘土層には川原寺所用の瓦は含まれず、土器も7世紀前半代のものばかりである。

まとめ 川原寺の「北方建物」については昭和34年・57年の調査で、東西3間・南北9間の礎石建ち南北棟建物であると推定されているが、北端については、今次調査の農道以北で大きく下降する地形から推定されており、農道以北での礎石・基壇土の確認が今次調査の課題であった。しかし、調査では昭和34年調査時に注意されていた農道上の礎石を確認したものの、礎石は農道建設時に埋め込まれたもので、旧位置を保つものではない。また、農道下での土層観察の結果も、基壇土に相当する土は確認されず、建物に近接する調査区西端部で礎石上面から約0.8 mも下がった位置に、瓦廃棄の土坑が掘られていることからすれば、北方建物は先の推定通りの規模であり、その廃絶は、土坑出土遺物から、平安時代後期のことと考えられる。

調査区東方で確認した整地を伴う石列・石敷は、整地上に瓦が含まれず、石敷を覆う土に川原寺の瓦が含まれることから、寺以前の遺構あるいは寺創建時の遺構の二通りの解釈が可能である。しかし、石列遺構は周辺の地形にあわせて幾分北で西に振れながら南と北とに延びており、北方建物を含む伽藍の中軸線と一致しない点、石敷上面の高さと北方建物の礎石上面高との比高が約1 mと大きい点から、両者を同時期の遺構とすることには疑問が残る。整地土中の土器が7世紀前半代のものばかりであることを合せて考えると、川原寺創建以前の遺構である可能性が高いといえよう。いずれにせよ、幅広い調査で1地点を確認したにすぎず、石列・石敷の時期と性格については、今後の調査成果を待って再考したい。

川原寺1988—2次調査位置図(1:2000)、石敷・石列詳細図(1:60)・



5 山田道第1次調査

(1988年12月～1989年4月)

この調査は県道桜井—樫原線の拡幅に伴う事前調査として、高市郡明日香村奥山で行ったものである。県道は、幅10m・総延長650mにわたって、現県道の北側に拡幅される計画であり、今回は初年度分として、東西191.5m・南北6～7mの範囲について調査を行った。

調査地は、奥山・久米寺の南方約200mの水田で、東から西へ傾斜する緩傾斜面上にあり、そのほぼ中央を八釣川が北流している。当地は「山田道」推定地であり、藤原京東四坊大路（東京極大路）推定地の東側にあたる。

「山田道」は、大和盆地東縁を南北に走る上ッ道の南延長部にあたり、現在の桜井市と飛鳥方面を結ぶ古道である。平安時代初めに成立した『日本霊異記』に「安倍山田前之道」、『万葉集』（巻1-3276）に「山田道」と記載され、古くから存在していたことがわかるが、造られた時期・正確な位置などについて不明な点が多い。岸俊男氏は、藤原京の南京極を「山田道」にあて、「山田道」が藤原京設定以前から存在していたと推定している。今調査は、この「山田道」に関わる遺構を検出し、あわせて当地区の土地利用状況を把握することを目的に行った。

遺 構

調査区に便宜的に4つに分け、東からⅠ区（東西43m、南北6～7m）・Ⅱ区（68×7.2m）・Ⅲ区（48×6.2m）・Ⅳ区（20×7.4m）とした。

層序は各調査区ごとに異なる。Ⅰ区では、耕土・床土・茶褐色砂質土・黒褐色砂質土（弥生時代包含層）・黄褐色砂質土（地山）があり、西端部では茶褐色砂質土の直下が地山である。遺構の検出は黒褐色砂質土ないし地山の上面で行なった。Ⅱ区東半では、耕土・床土・茶褐色土・礫混茶褐色土（地山）があり、地山上面で遺構を検出した。Ⅱ区西半では、耕土・庄土・黄褐色ないし灰褐色砂質土・褐色系細砂層・黒褐色土（古墳時代包含層）・灰色砂層（弥生時代包含層）・地山があり、黒褐色土上面で遺構を検出した。Ⅲ区東半では、耕土・床土・礫

混暗褐色土・黄褐色砂質土(地山)があり、礫混暗褐色土の上面で遺構を検出した。Ⅲ区西半では、耕土・床土・茶褐色土・暗褐色土・黒褐色土・黄褐色粘質土(地山)となり、西端では茶褐色土の直下が地山である。暗褐色土ないし地山の上面で遺構を検出した。Ⅳ区ではⅢ区と状況が異なる。Ⅲ区とⅣ区の間地点から西へ向けて地山が下がり、Ⅳ区全体を含む大きな窪地状(SK2380)を呈している。この窪地の深さはⅣ区西端部で0.7mである。この窪地には、下から①暗灰色粘土(弥生式土器包含)・②灰褐色粘土ないし粘質土・③灰褐色系砂質土があり、②・③層には飛鳥Ⅰ期の土器を含み、6世紀末～7世紀初頭に埋め立てられたと考えられる。遺構はその埋土の上で検出した。

検出した遺構には、掘立柱建物・掘立柱塀・石積護岸溝のほか素掘り溝・竪穴住居跡・土坑などがあり、これらは主に弥生時代・古墳時代・6世紀末～8世紀後半に属す。

弥生時代の遺構 各調査区に存在するが、7世紀の遺構が広がっているため、一部だけを検出した。Ⅰ区東端の溝SD2253、Ⅰ区西端の竪穴住居跡SB2277などがある。SD2253は幅3m・深さ0.15mで弧状を呈し、何らかの施設の一部の可能性が有る。SB2277は、復原直径約9mの円形住居跡で、畿内第Ⅲ様式土器が出土した。

古墳時代の遺構 弥生時代の遺構と同様に一部のみを検出した。Ⅰ区東端の南北溝SD2250、竪穴住居跡SB2255、Ⅰ区西端の竪穴住居跡SB2281、Ⅱ区東端の竪穴住居跡SB2290などがある。SD2250は幅1.5m・深さ0.4mである。SB2255は一辺4.1mの方形住居跡、SB2290は一辺4.8mの方形住居跡で、ともに5世紀後半のものである。



山田道第1次調査区配置図(1:2000)

6世紀末～8世紀後半の遺構 掘立柱建物6棟以上・掘立柱塀12条以上・石積護岸溝1条・素掘り溝1条がある。これらの遺構は、出土遺物・重複関係・方位からみて大きくA～Eの5期に区分できる。

A期 II区中央の石積護岸溝SD2320のほか、北で西へ約5°振れる掘立柱の遺構が属す。I区西半の掘立南北塀SA2270、III区西半の掘立柱南北棟建物SB2356・掘立柱南北塀SA2358・掘立柱建物SB2359・SB2361、IV区東半の掘立柱東西塀SA2370が属す。

SA2270は2間分検出した。柱間寸法は1.75m(6尺)である。柱掘形は一辺0.5mの方形で、深さは0.2mである。

SD2320は、掘形の幅約6m、両側に拳大～人頭大の川原石を積み上がるが、積み方は乱雑で、南西岸と北東岸の石は崩落している。底石はない。深さ1m・内法幅約3mである。堆積層は大きく6層に分かれ、各層から飛鳥Iの土器が多く出土し、使用年代の一端を6世紀末～7世紀初頭に置くことができるが、溝の開削年代は不明である。

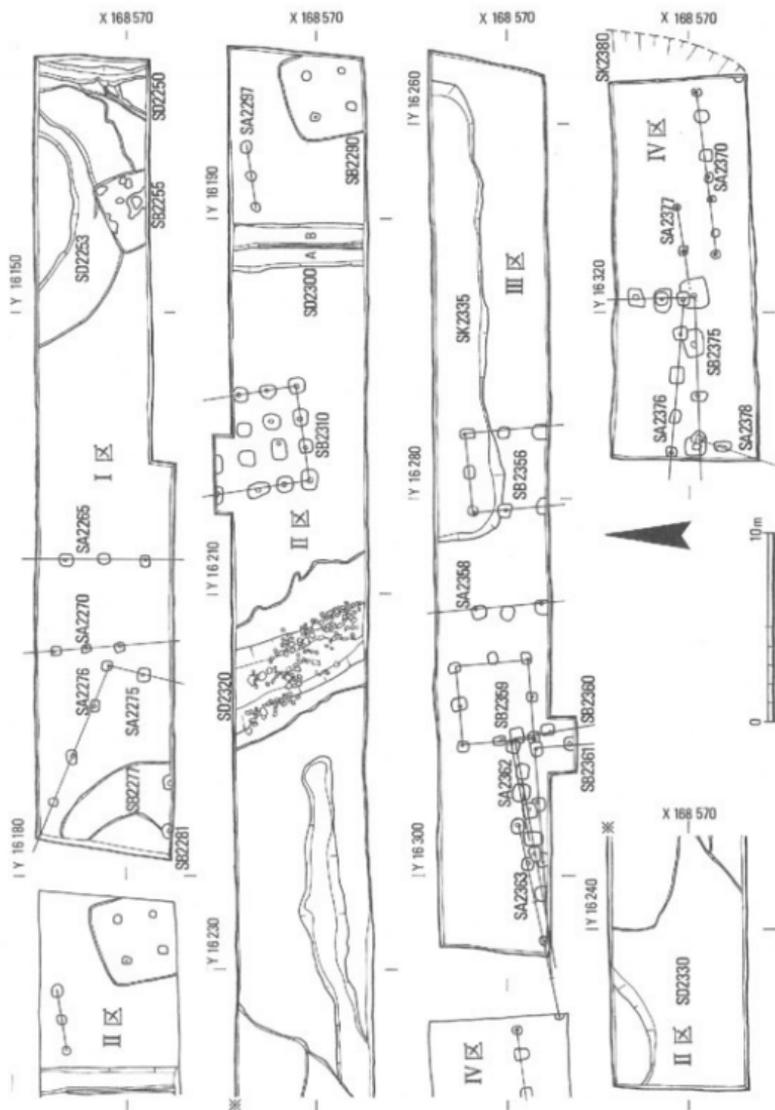
SB2356は、桁行3間以上・梁行2間の建物で、柱間寸法は、桁行1.7～2m・梁行2.1m(7尺)等間である。柱掘形は一辺0.5～0.8mの方形で、深さは0.4mである。奈良時代後半の大土坑SK2335と重複し、土坑より古い。

SA2358は2間分を検出した。柱間寸法は1.75m(6尺)である。柱掘形は一辺0.7mの方形で、深さは0.2mである。SA2358の北端はSB2356の妻柱筋と揃っている。

SB2359は2間×2間の建物で、柱間寸法は東西方向2.1m(7尺)等間・南北方向1.95m(6.5尺)等間である。柱掘形は一辺0.5～0.8mの方形で、深さは0.4mである。

SB2361は2間×2間以上の建物で、柱間寸法は東西方向3m(10尺)等間・南北方向1.8m(6尺)である。柱掘形は一辺0.7mの方形で、深さは0.5mである。SB2359より新しい。

SA2370は6間分を検出した。柱間寸法は1.1～2.1m(4～7尺)、柱掘形は一辺0.4～0.7mの方形で、深さは0.35mである。この塀の柱筋は、SA2358の



山田道第1次調査遺構配置図(1:300)

北端、SB 2356の妻柱筋と揃う。柱の抜取りに際して、柱をまっすぐ上に引き抜いた後に、黄色の山土で埋め戻している。

B期 北で西へ約10°振れる遺構が属す。Ⅱ区東半の掘立柱東西塀 SA 2297・掘立柱建物 SB 2310、Ⅲ区西端の掘立柱東西棟建物 SB 2360・掘立柱東西塀 SA 2362・掘立柱東西塀 SA 2363、Ⅳ区東半の掘立柱東西塀 SA 2377があり、石積護岸溝 SD 2320は本期にも存続する。

SA 2297は2間分を検出した。柱間寸法は1.6mである。柱掘形は径0.4～0.6mの円形で、深さは0.2mである。

SA 2310は3間×3間以上の総柱建物で、柱間寸法は、東西方向1.7m（6尺）等間・南北方向1.65m（5.5尺）等間である。柱掘形は一辺0.7～1.0mの隅丸方形で、深さは0.5mである。

SB 2360は桁行4間以上・梁行2間以上の建物で、柱間寸法は桁行2.1m（7尺）等間・梁行1.95m（6.5尺）である。柱掘形は一辺0.8mの方形で、深さは0.4mである。SA 2362は2間分を検出した。柱間寸法は2.6m（9尺）等間である。柱掘形は一辺0.6～1.0mの方形で、深さは0.3mである。SB 2360より古い。

SA 2363は5間分を検出した。柱間寸法は2.1m（7尺）等間である。柱掘形は一辺0.5～0.8mの隅丸方形で、深さは0.35mである。SB 2360より古い。

SA 2377は1間分を検出した。さらに西に延びると思われるが、C期のSB 2375と重複している。柱間は2.4m（8尺）、柱掘形は一辺0.5mの方形で、深さは0.45mである。柱の抜取りに際して、柱をまっすぐに引き抜いた後に、黄色の山土で埋め戻している。

C期 北で西へ約2°振れる遺構が属す。Ⅰ区中央の掘立柱南北塀 SA 2265、Ⅱ区東半の素掘り南北溝 SD 2300A・B、Ⅳ区西半の掘立柱東西棟建物 S2375がある。

SA 2265は2間分を検出した。柱間寸法は2.1m（7尺）等間である。柱掘形は一辺0.6mの方形で、深さは0.2mである。

SD 2300はA（古）・B（新）の2条があり、BはAを東側にずらして付け替えたものである。Aは幅1.2m・深さは0.35m、Bは幅1.2m・深さ0.3mで、堆

積上から飛鳥Ⅱの土器が出土した。

SB 2375は、桁行4間以上・梁行3間以上の建物で、柱間寸法は桁行2.7m(9尺)等間、梁行1.4と1.7m(5～6尺)である。柱掘形は、一辺0.9～1.6mの方形で、深さは0.6mである。柱の抜取りに際しては、柱をまっすぐ上に引き抜いた後に、黄色の山上で埋め戻している。

D期 北で東に振れる遺構が属す。I区西半の掘立柱東西塀 SA 2276・掘立柱南北塀 SA 2275、IV区西半の掘立柱東西塀 SA 2376・掘立柱南北塀 SA 2378が属す。

SA 2275は1間分を検出したが、さらに南へ伸びると思われる。柱間寸法は1.8m(6尺)、柱掘形は一辺0.5m～0.7mの方形で、深さは0.2mである。

SA 2276は3間分を検出した。柱間寸法は2.3～2.9m(8～10尺)で、柱掘形は一辺0.4～0.7mの隅丸方形で、深さは0.25mである。

SA 2376は4間分を検出した。柱間寸法は2.1m(7尺)等間、柱掘形は一辺0.5～0.8mの方形で、深さは0.5mである。

SA 2378は1間分を検出したが、さらに南に伸びると思われる。柱間寸法は1.4m(5尺)で、柱掘形は一辺0.6～0.7mの隅丸方形で、深さは0.6mである。

SA 2376・SA 2378ともに、柱を抜き取った後に、黄色の山土混じりの土で埋め戻している。

E期 III区東北部の大土坑 SK 2335がある。東西24.5m・南北3.5m以上・高さ0.9mで、埋土から奈良時代後半の土器・平城宮式軒平瓦(6691)が出土した。

その他の遺構 II区西端のSD 2330は、江戸時代以降の河川である。現在、II・III区の間には八釣川が流れており、SD 2330は八釣川の旧流路であろう。

遺物

出土した遺物には土器と瓦がある。土器には弥生時代・古墳時代・6世紀末～7世紀前半のものが多い。石積護岸溝 SD 2320の堆積土とIV区のSK 2380の埋め立て土からは、多量の飛鳥Ⅰの上師器・須恵器が出土した。SD 2300からは飛鳥Ⅱ、SK 2335からは奈良時代後半の土器が出土した。

まとめ

1 各期の年代についてまとめておく。

A期の遺構は、IV区では飛鳥Ⅰの土器を含む整地上の上に造られている。また、石積護岸溝SD2320はA・B期を通じて存在し、堆積土からは多量の飛鳥Ⅰの土器が出土した。したがって、A・B期の遺構は6世紀末～7世紀初の比較的短期間に造り替えを繰り返したものと考えられる。

C期は南北溝SD2300から飛鳥Ⅱの土器が出土しており、7世紀前半代とみられる。I・II区の北方の奥山・久米寺は7世紀前半の創建と考えられている。SD2300と創建期の奥山・久米寺との関連については、今後の検討課題である。

D期は年代の決め手がない。建物の方位がC期以前とかなり異なるので、時期が大きく下る可能性もある。しかしIV区では、C期以前の遺構と同様に、柱を抜き取ったあと黄色の山土で埋め戻す点で共通しており、そうへだたった時期まで下げなくとも良さそうである。1982年の奥山・久米寺東南方の調査では、7世紀後半～8世紀前半代の、北で東へ大きく振れる建物が見つかった点を参考に、7世紀中頃～8世紀前半に収まるものと考えておく。

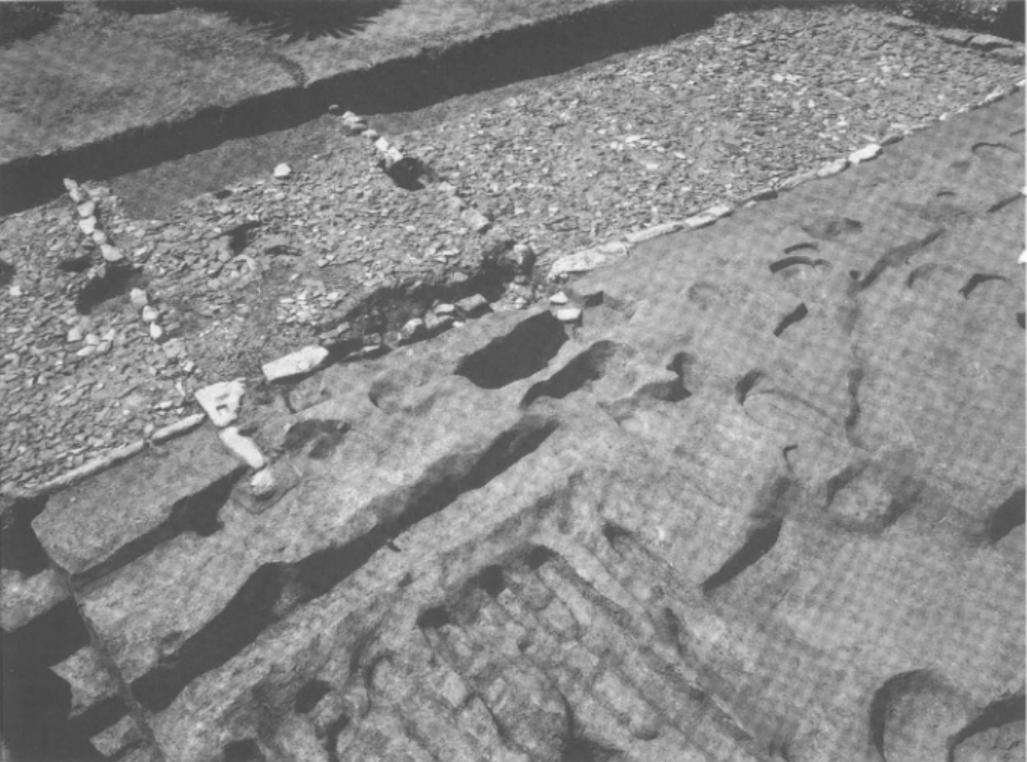
E期の土坑SK2335は、奈良時代後半に属す。当調査区の西方約200mにある雷丘東方遺跡では、『続日本記』の760(天平宝字四)年から765(天平神護元)年にかけて記載された、小治田宮に関する遺構が発見されており、SD2335とそれらの遺構の関係も、今後の検討課題である。

2 今回の調査の主目的は「山田道」の検出であったが、「山田道」に直接関係する遺構は、当調査区内では検出できなかった。I区・III区で検出した七世紀代の掘立柱遺構のうち幾つかは、調査区の南外に伸び、現地形からする従来の「山田道」推定地に及ぶことは確実である。今回の発掘所見は、「山田道」の所在についても、飛鳥の土地利用の変遷の中で検討すべきことを教えている。

3 当地において、特に6世紀末～7世紀前半にかけて、比較的多くの掘立柱建物群が造られており、SB2375のように規模の大きいものも含まれていることが判明した。発掘面積の関係で、建物の配置の全貌や性格を明らかにできなかったため、この地域一帯における今後の調査の発展を待って検討したい。

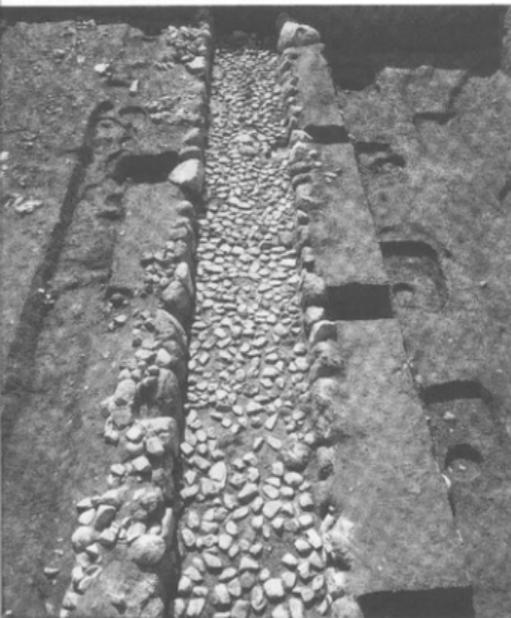


↑ 山田寺南門
↓ 南門前水路

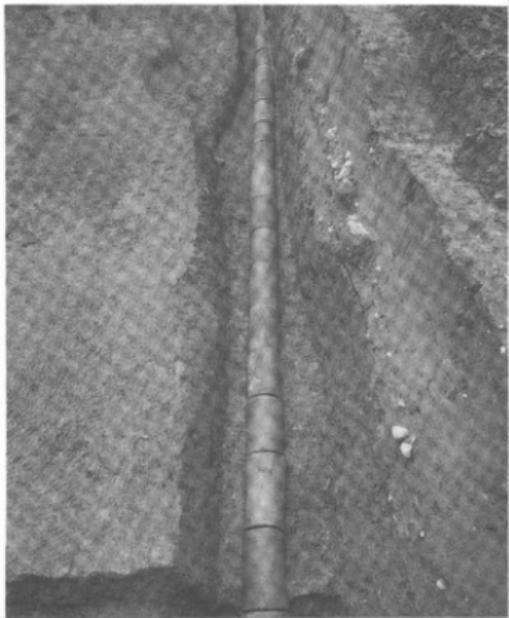


奥山・久米寺金堂

石組溝 SD6885 (飛鳥寺1989-2次調査)



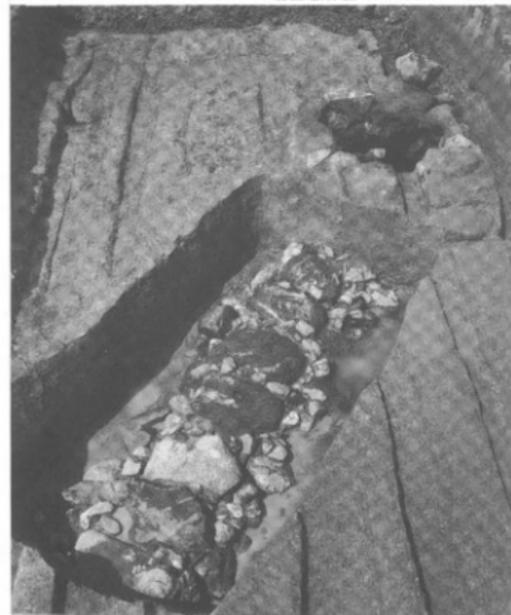
土管暗渠 SX06 (飛鳥寺1989-2次調査)





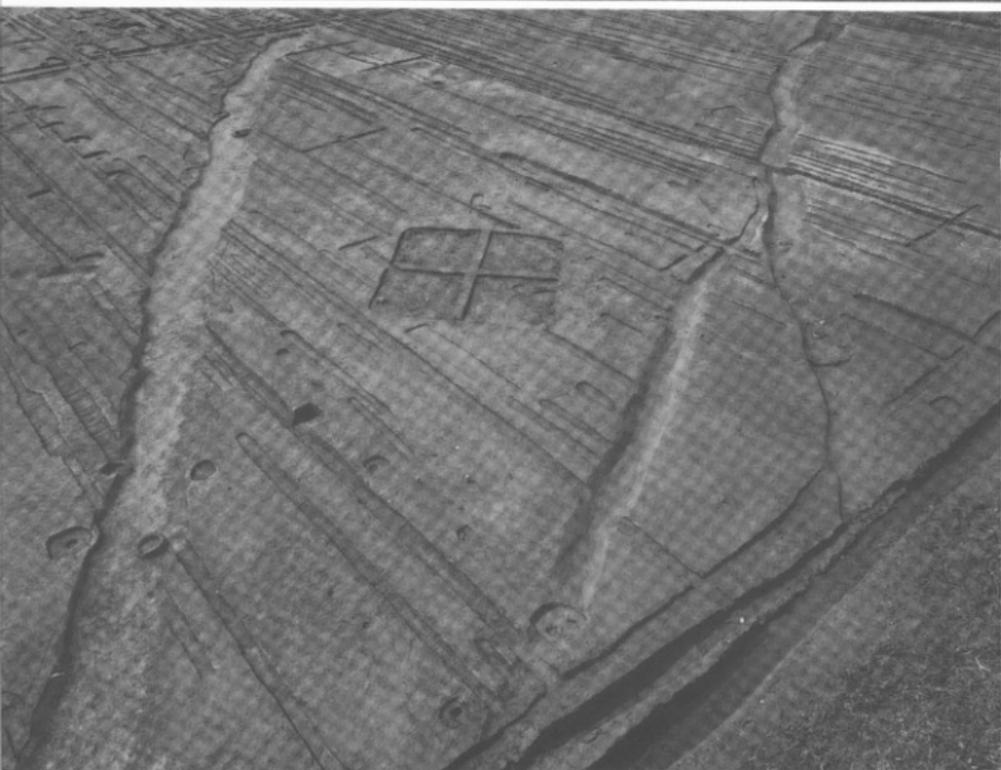
弥生時代の水田・現代の水田（第60—3次調査）

石組畦渠SD2430（第58—20次調査）



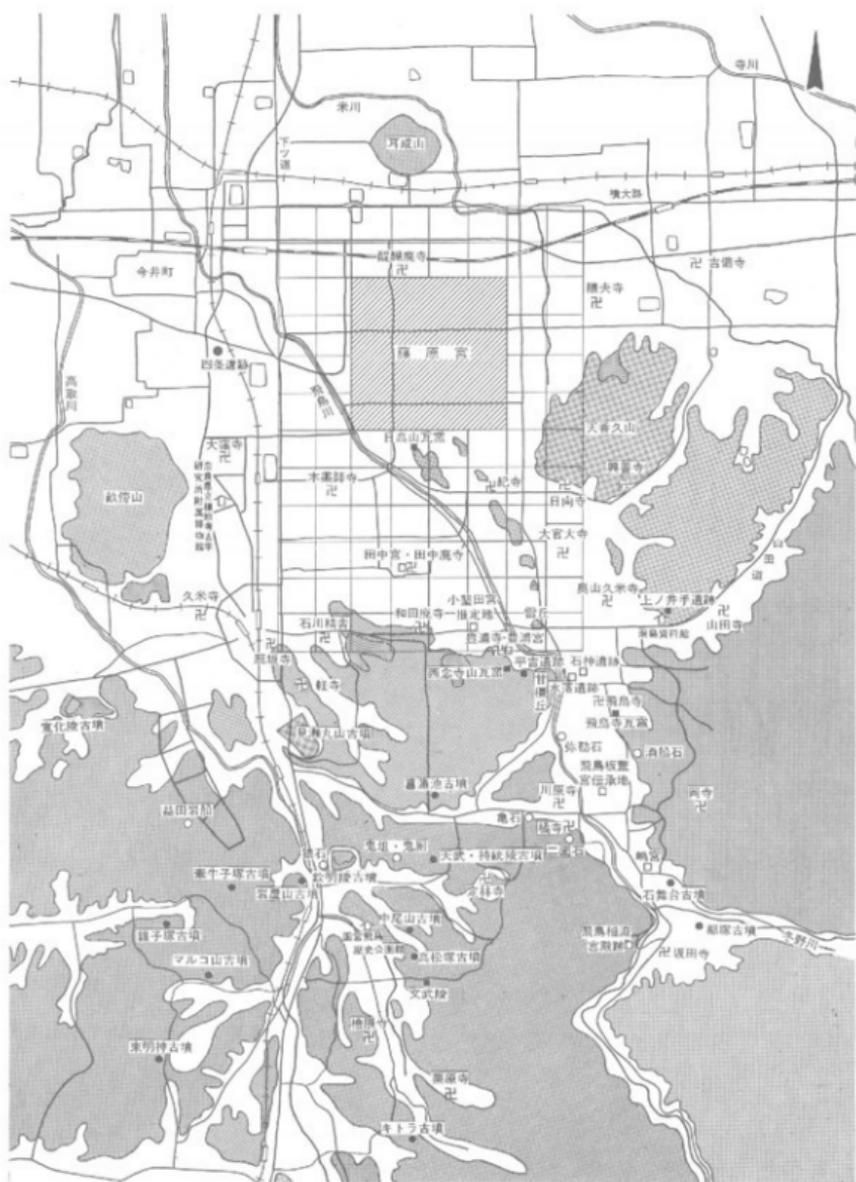
石積護岸溝SD2320（山田遺第1次調査）





↑藤原宮大極殿院東方（第58次調査）

↓古墳時代の住居・溝（第62次調査）



飛鳥・藤原地域の遺跡 (1:40000)



飛鳥・藤原宮発掘調査概報 20

1990年5月8日発行

編集発行：奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

〒634 橿原市木之本町宮ノ脇
Tel 07442-4-1122
Fax 07442-4-1742